麻生路郎主宰

川柳雜誌

八月特輯號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和九年八月一日發行（毎月一日發行）第十一卷　八號　川柳雜誌社發行

泉州の澤海岸に出來た一、二泊に恰好な避暑地です。清澄な海水浴場を伴ひ休憩宿泊の施設完備連日の苦熱を拂ひに一遊をおすゝめ致します。

海濱村 二色濱（にしきのはま）

○八月三十一日まで

◎二色濱臨時驛開設

難波より電車、バス往復有料休憩所サービス券附九十八錢（小兒半額）

——案内書呈上

大阪・なんば 南海電車

冷凍かこい

絶對防腐劑なし

○○○○○○○

灘の銘酒 白鶴が、獨特の科學的研究を基礎として、低溫後熟醸酵を完全に行はせ醸造せる「冷凍ハクツル」は輕くて滋味ゆたか、芳醇凉味溢れ、保健と衛生との條件を完備した、理想的な「夏のお酒」であります。

召しませ！

氷の樣に冷い

〃冷凍ハクツル〃を!!

盛夏綠蔭に在るが如き爽かな醉心地は冷凍ハクツルから…

特價

七㌘瓶詰（三合九勺入） 金八拾錢也

三㌘瓶詰（一合七勺入） 金四拾錢也

素敵にうまい

夏のお酒●…

發賣元

嘉納合名會社

北直賣部 大阪市東區横堀三丁目

南直賣部 大阪市南區大和町一番地

神戸支店 神戸市神戸區元町七丁目

第十一卷
第八號

川柳雜誌八月特輯號目次

金・銀・錢の句……麻生路郎（三）
蒼々亭閑談……川上三太郎（一八）
時は流れる……阿部閑生（二四）
武玉川二篇研究（四）……蛭子省二・森魚（三〇）
酒の世の中……長崎柳秀（三七）
春雪食思……正岡蓉（四二）
富士山の涼味……SANURO（四五）
陀羅尼助其の他……西田艸樂（四八）
月評　金、銀、錢、……福田山雨樓・本山丹路（五九）
夏の論……陣S、U、R（四八）
川柳怪異想誌……岡田某人（六六）
古狸窟隨筆（五）……梅本塵山（七二）
川柳パイロット欄……福田山雨樓（七〇）
胃袋公開……（五〇）
路郎、紀太、綠之助、濁水、紅、民郎、與三郎、明珠、閑生、新水、禿山、機見女、
卷二、夕鐘、春秋、鐵洲、豆秋、柳次、沒食子、山雨樓、艸樂、山月、青兒、夢裡、

あや美、華水、翠夢、幸捐、鮎美、閑路、天痴人、水車、春光、春峯、喜由、九天、白峯、文醉、

柳壇書報……（四）

川柳二十日會の斷片……山雨樓記（六五）

創作

近作柳樽……麻生路郎選（六）

川柳塔……麻生路郎選（三八）

粒々集……柳秀、鞍馬、久流美（四一）

日本名所名物川柳

（大阪の卷）造幣局……麻生路郎選（五七）

（北陸の卷）兼六公園……安川久流美選（五八）

一路集

盆踊……高橋かほる選（六三）

白服……日野華水選（六三）

涼臺、團扇……西田艸樂選（六四）

本社七月例會……豆秋記（六八）

各地柳壇……路郎、絲雨、艸樂整理（七四）

川柳家戸籍調……係山雨樓（六二）

西之町MEMO……絲雨（八四）

編輯の怨……山雨樓（八三）

表記畫　夏の處女　柴谷宰二郎　題字　麻生路郎

柳壇書報

りよ右てつ向列一第（連大）會柳川雅祝稲古鶴すわか武宮
第・蒙々青山寺・明濤⊗大・すわか武宮・八茶林小・生新岡小
玉見・江玉藤後・夏清本奥・子逸四洞片・居可原藤りよ右列二
東木萬・美玄松平りよ右列三第・涙紫湯洞上・清月櫻高・雅凡
森・明雨湯渡・九南村田・陀翔勘諏・壁堅井頭・海青田古・子狂
君語の碑一村竹・母水老海・屋白本湯・心佛鯨

君々舟會川は右てつ向・てに泉温山の湯の亭
左は枝桜櫻堂君（一九三四・三・一〇日撮影）

社本・たつ爲に盛夏愛國婦人同盟(一九三四・六・一)日本婦人の爲に講演せるやあ

(撮影)

本社同人柳崎春路君(一九三四・六・三〇)日本婦人の爲に講演せるやあ

本社同人北川あやの近影

京都に移つた本社同人朋石柳次郎

近作柳樽

路郎選

ゼンマイがもどけたやうに男寢る　　某人　神戸

落日の死他人が泣いて呉れるなり　　同

小濱公園佐久間艇長像

銅像の鼻から明ける日本海　　同

香水のつかれを見せて芝居はね　　天國　同

醉眼のえくぼの渦が卷いてゐる　　同

白粉の瓶まんぞくにふたをしめ　　同

爽やかな朝が續いて惠まれず　　春水　高知

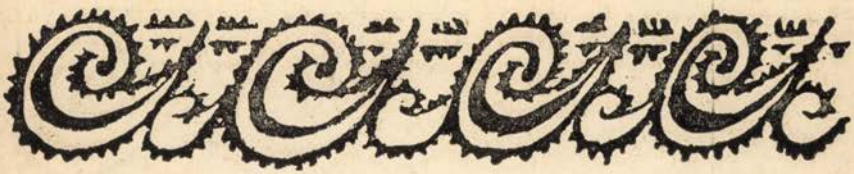
ハンカチを折つてるやうにバラは咲き　　同

算盤を貸せと言ふ眼のずるいこと　　同

履歴書を預けて春の雨に濡れ　　舟々　大阪

吾が時計にあわてゝ歸る程しやべり　　同

廣告の團扇ですます新世帶　　錦城子　大阪



團扇もてかなしきものゝふたにする　同

涼臺煙草の度に顔が浮き　同　珍景　高知

あたまから儲を稅務署に訊かれ　同

みづ飲んでなんにも慾はなかりけり　同

臆病な姉だと思ふ海水着　同　九葉　神戸

庭石に西陽が强い佛の日　同

お妾に子の就職をたのんで來　同

雨の日の母がちいさい佛の灯　同

菓子に手を出すが娘の度胸なり　同　大門　大阪

グループに母の炊いたる飯に觸れ　同

旅支度出來て團扇を使つてる　同

デスマスク苦々しげに世をみつめ　同　有爲郎　長野

肋骨に汗がひかつて豊繁期　同

麥の青さがせめてもの涼風で　同

貧しさへ塗る口紅を意識する　同　貧兒　神戸

オシツコ・海のなかでしてしまひなさい　同

朝顔がさいてほんとに目がさめた　同　英彦　同十一才

六月のたゝみへ蛙が飛んで來　同

なにげなくふれてくる手がぬくいです　靈ケ池　靜太

しびれ脚氣で絶對安靜を命ぜらる

しびれがつけへでむし角を出しました　今治　蛇之助

初夏の風釦のとれたまゝはしり　同

嫁く話娘は麥を刈つて居る　大阪　史呂

兒は何時か星の話に寢てしまひ　同

アパートの朝は靜かな乳とパン　同　新市街

技巧持つ女白々しき指環　同

手枕になる行末に壁の穴　靈ケ池　流之助

きれいな朝だかんごふさんの素足みる　同

ゆめはみなうつくしふとんかむるなり　名古屋　三八朗

雨三日生命線へ觸れかゝり　同

雨の夜を金に楯つく妓がかへり　京都　一風

ひからびた愛吝嗇の眼に宿り　同

待つて居た母とも知らず言ひ返し　楼山　耕一路

チユリツプ鸚鵡をおろす袖が觸れ　同

麥のほに眼を失ひしとは悲し　大阪　有魚

丸刈になつて返濟しに廻り

ざんげする女に汗のにほひする　同

受驗生活に這入る

灰色の空にからすがとんでます　富山　照坊主

東京を訪ふ

眼じるしのポストの横も砂ほこり　同

芋燒いて文藝講座讀んでゐる　大阪　いの助

要領に生きて先輩四十歳　同

悪趣味へ舞妓立食ひさせられて　松江　雛千代

お座敷のつらさをてすりによりかゝり　同

いとしき父

孝行の一つに父の愚痴をきゝ　島根　鴉天

病床にて

水藥の泡がポツンと消へたゞけ　同

教師てふ自覺が嘘となつて居る　石川　しとし

講堂は樟腦くさく今日旗日　同

時節わきまへて家主の低い腰　長野　柳兒

長男をいたわる多産系の母　同

力力と思ふ日の淋しさ　今治　伶人

米穀法へ麥がよく伸び　同

鉢卷のゆるみへ晝のドンが鳴り　同　一郎

甘茶もらひ四五人歸る雨の寺　同

夏痩に淋しき洒落を聞かされる　高知　青雨

頰杖の何かに堪へてゐる姿　同

長男にさして靜かに猪口を伏せ　埼玉　いね三

凡人になりきる宵の涼臺　同

三味線の合間々々に聞く河鹿　大阪　利生

病院に勸め灸をすへるなり　同

體格を褒めれは流石女の子　神戸　好啓兒

座布團に山の疲れが出る夕餉　同

剃刀へ何思ひ出したのか笑ひ　同　吉左右

鼻かんで眞顏で坐はる父の前　同

輪廻だと不運を僧は輕く說き　大阪　德三

寫經する女へ筧の絶えぬ音　同

嘘ばかり上手になつた夫です　兵庫　玻瑠

狡猾な笑顏と知つて默つてゐ　同

早乙女の壁に瞳がある晝の風呂　愛媛　宵明

海女の乳藻草をとれば兒がたかる　同

なに想ふことなく夜の松風や　鷺ヶ池　松雨

桑の樹の蔭に夢なぞむさぼらむ　同　浮鬼

生きてゐる僕が不思議だ鯛のあら　同

看護婦のあらを探せば悲しいね　同　愚寵

若葉風好きな女が笑つたな　同

荷馬車來て歸る硝子に音がする　大阪　洋三

滿月に芝居掛つた科白が出　同

笑へない淋しさも有る戀をする　松江　榮吉

雨風の中に男のやせがまん　同

アツパツパ身輕な妻の歩きぶり　大阪　ライト

背の子と一つ違ひで歩かされ　同

祝叔父の新築落成

喜びのまだ〳〵若い叔父の顏　神戸　港兒

頰赤き娘の戀のたより無さ　同

バツト半分揉み消す仲居老けて見え　京都　晨一朗

妹の花看護婦にからかわれ　同

あるなしの金に心を支配され

後悔をホテルの朝に殘してき　大阪　清美

五日來い十日に來いと逃げてゐる　同

本願寺ひとり泣く子に廣過ぎて　京都　清春

落ついた心わたしの疊です　同

女店員柄と顏とを見くらべる　大阪　菊路

女學生二人になると直ぐ喋べり　同

別れには片手を擧げる丈の友　神戸　久米雄

遠足へ鈴の音一直線に行く　同

風なくば松も晝寢の姿なり　高松　柳夢

阿片窟羽化登仙を試る　同

わびしさを逐へば團扇の音になり　盛ケ池　縷紅

夏痩せの眼鏡大きく光るなり　同

更生へ夜店ながらの小商ひ　同　巷巴

退院をすれば氣樂でない身體　同

想ふ事なし朝まろきはしの音　東京　比呂詩

掌の運命線が短かいね　同

白い壁に生きやう幾つかの吐息　同　志津女

世渡りはみんなこんなものすゝきの穗　同

病床を飾る聖書の豪華版　青鬼
寢そびれた連ありべーヂめくる音　同　登志男
亡き父の寫眞へ涙落つるなり　同　梨生
米櫃にあと一日の音をきき　同
茱萸服衆視の中を躊躇はず　高知　同
子を抱いて子供の爲の話なり　同

病床吟

櫻咲く頃から病んで夏祭り　大和　翠峯
催促の地聲になつて來たりけり　同
年俸のまだその上の慾を持ち　千里山　沐天
名を捨てゝお伽の國へ嫁きたがり　同
電柱の影傾けばとてひとり　大阪　青果
呼び捨にされる女となつた髭　同
聞拔けてあさましき塲おもふなり　高知　映珠
癒りたい電球を見つめてゐる　同
香水の匂ひをさしてノーチツプ　大阪　末廣艸
貸ボート白粉紙が散つてくる　同
あきらめた筈を夢に見て居ます　廣島　彌生
親蠅の障子打つてる母の居間　同
美しい遍路どこまで行くのやら　山口　狂路

新綠の哀愁であるまい君の瞳　今治　國產

失業の父の朝寢を子がゆする　廣島　芳泉

體驗をマダムに聞いて叱かられる　同　承春

影法師頭ゆすつて笑ふなり　今治　バツト

逆境の男耳が小さいなり　大阪　寒草

滿洲やけした顏で凱旋し　廣島　碧園

焦燥の心横切る赤とんぼ　臺灣　耕朗

主婦のメモ見てる間に煮えつまり　大阪　世間音

極道をしぬいた樣に湯にひたり　加賀　義風子

うたゝ寢へがたんと開けた看護婦さん　大阪　雅星

二十七親にたよつて叱られる　名古屋　紘靖

十年も先の給料へ滿足し　兵庫　天秋

利喰日は何時歸つたか膳の前　大阪　トミヤ

捨て犬のやうに夜の街を歩いて來　金澤　緣水

口笛の吹けるあなたが美まし　高松　茂都子

彼女と來て勝手の違ふ映畫館　大阪　美代坊

喫茶店はかなき戀を聞いてゐる　今治　瓢亭

晩飯がすめば蛙の聲ばかり　同　心府

花一つついてシヤボテン大事がり　大阪　靜波

親しめぬ母の丸髷大きすぎ　同　節子

中央市場にて

食べ物の山に今更驚きぬ　大阪　素月
白足袋の繼も京かや綠湧く　京都　竹雅
あゝ細き煙に生きる空を見る　大阪　遊舟
ニキビがいたむ焦點のない足元　高松　好郎
旅歸り泣く子にふつと起される　大阪　葉光
子がませて母も小さい片笑靨　松江　文兒
失望の何處まで續くアスファルト　尾ケ崎　白菊
夕立に潮干の出鼻くぢかれて　廣島　春帆
藪入に小僧着なれぬ着物着て　潛水　御穗子
ビクニツク女を連れて雨にあひ　今治　松茂
港の灯ギヤング現れそうに更け　名古屋　嵜喜固藟
育兒法殿樣らしく育て上げ　同　令風
カフエーのマツチでつける御神燈　神戸　勝太郎
米かつぐ力もあつて緣遠い　今治　史郎
婦人會少しは言へる裾模樣　名古屋　長樂
看護婦の噂青葉ゆれる窓　今治　小間
コツプに滿てる水の素直さ　京都　三郎
珍客に早や盜電の用意なり　同　白葉
親類へ寄らず祇園會かゝさず見　同　華坊

草屋根へ女給重たく歸つて來　今治　五所
嫁が來てから母親のヒステリー　水　稚龍
存外の話しへ茶椀の音がやみ　今治　小松
薄化粧白衣に淨し佛顔　廣島　直
かけ火鉢植木鉢てふ思ひつき　大阪　彩泡
すれちがい質屋の門をつばくらめ　廣島　蛙庵
バタ臭い街をにらんでゆくテルヤ　綠ヶ丘　モリナガ
折目正しくサラリーで勤める身　刈ヶ池　貴代志
ネオンの灯みせて寢つかすくせになり　大阪　まさみ
長崎の友から自由詩今日も來る　名古屋　上上
旅先の友へは告げず汽車を降り　神戸　驢雨浪
ヤトナ今團扇をおいて鬢をなで　螢ヶ池　岸岩
され氣なく徴兵檢査場にて山の雲湧きぬ　京都　輝親
合格へ淋しい母の肩を見る　京都　清春
荷がついて丁稚は向きをかへて寢る　今治　紫陽
働いてゐる娘夜店のバラをすき　高知　抱朴
あゝ葉蘭が斜にゆれる傷心や　翠ヶ池　梟人
うつろなる笑ひ煙草の消えかゝり　松山　靈子
姉の聲母かと顔を見上げたり　蟹ヶ池　白蝶
野菜など作つて和尚親しまれ　京都　丁路

腕に泌むその青白き月に泣く　今市　琴月

水仙ハバーの吐息を吹いて見る　同　一風

帖簿には赤字が派手に並んでる　松江　祥月

小説を聞いてる様な口説なり　同　逸行

負けるのもいゝ薬だと云ふ先生　緑ヶ丘　粹夢

音信なきを子思ひつゝ路次に住み　西宮　三代吉

衛生掃除

愛の巣の呆れるばかりこの埃　京都　白英

巡禮の一人が寄席で立つてゐる　大阪　遊女男

白髯を見れば恩給取に見え　明石　秀太

仰向けに野に寢て雲の偉大なる　大阪　昇鯉

眼鏡に曇つた父の折鑑　同　魚水

侯爵の情痴なさけと言はすまじ　神戸　朝雨

外交の六感へ來る拒絶なり　愛　滑秋

寢て歸るだけをわざ〳〵濱にきた　大聖寺　醉羊

胃酸過多の耳へ金魚賣の聲　京都　正祐

カーテンを締めて女の強いこと　大阪　石流子

久々に逢へば痩せてるのを問はれ　大阪　たけを

釘打てば隣りの朝の靜かなる　同　花涙

手拭に髭一筋を隱して盆踊　信濃　琴の舍

蒼々亭閑談

川上三太郎

暑い折柄である。餘り脂切つた事を書くより、何か取りとめもなくさら〳〵と書いてみたい氣がする。さうかと言つて川柳を離れた事を書いたのでは福田君のやうなひたむき、人は怒るだらう。斯う考へると書くといふ事も却々臆劫なものだと思ふ。

本紙の麻生君は何だか今まで結へ　ゐたものが切れたやうな活躍振りだつた。流石の僕も一寸呆氣に取られた態であつた。彼の滿鮮見聞記は行文淡々、まことに面白いものであつた。但し僕が四月に東京で會つた時「麻生君，君が朝鮮と滿洲で食つた三度の食事のお菜を必　書いて吳れ」と頼んだのだが、これは書いて吳れなかつた。內密で煮豆か何か食つてたんぢやないかと思ふ。麻生君の文章も堂に入つた。最近での好讀物であつた事は感謝に耐へない。今年は大阪へ行けないかも知れぬ。切に健康を祈る。

○

この頃句語といふ言葉が諸方の柳誌に散見するが、あの言葉をこしらへたのは僕である。あれは確か都川柳會の合評會の席上で、言ひ初めたと記憶してゐる。ところが僕の言ふ句語といふ言葉の內容と、近頃用ひられる句語といふ言葉の內容とは少々相違してゐるやうだ。即ち一般に柳界で用ひられてゐ、句語といふ言葉の內容は、四疊半、長煙管、フト、恙なし——といふやうな、川柳家が好んで用ふる言葉、若くは川柳的に或る約束を持つた言葉——たとへば四疊半といへば、特にことはらなくつても男と女の差向ひと解するのが川柳常識になつてゐるやうに——さうしたものを呼ぶ時に句語といふ言葉を用ひてゐる然し僕の言ふ句語とはさうではないのである。

一句中絶對に動かすべからざる言葉――それが僕の言ふ句語である。即ち僕の句に就て例を擧げれば

物干で日本を見てる居候

の場合「日本」が句語なのである。これは「東京」でも「大阪」でも「京都」でもいけない。絶對に日本でなければいけないのである。然し

大日本天氣晴朗無一文

の場合の日本は句語ではない。句語は下五の「無一文」である。

十二月某日猫の歩くを見
友だちのうしろ姿の有難味
天皇旗九千萬のぼんのくぼ
棒押の名人畳間坐つてる
嘘つきの名人號外を前に

以上拙句圈點のついてゐる言葉が句語である。尙川柳雜誌七月號から二、三句を摘出してみよう。（圈點句語）

にごりなき假名出頭をせよといふ　青雨
日曜を働いてゐる果報者　清美
苦勞させられる子供の抱き重り　天秋
看護婦の隱し切れない情熱よ　新水

話は別になるが、川柳にはこの句語が絶對に必要かといふとそんな事はない。句語なんかなくつたつて佳唱がある。矢張り誌前月號から句語のないかに見ゆ　句で僕の好いと思つた句を二三句擧げて見れば

肺をやむことをかくしてどうする氣　靜太
面影の君は餘りに氣高くて　遊舟
砂とあそべば砂の音までさびしまる　噴兒
人間にこんな嬉しい時がある　小松
心の底に靜かな深い沼がある　次都女

然し斯うした句は或は全部が句語であるとも言へる。僕の句語は斯うした意味に使ふのである。だから一寸面白言葉だと思ふ。

○

言葉で思ひついたが關西の川柳家は關西語を平氣で句の中に使つてゐる。これを靑森縣か鹿兒島縣の川柳家がやつたら何ういふ事になるだらうと思ふ位である（圈點がそれ）

掛取が去ぬのをレコード待つて居た　艸樂
大阪城浚へてみたい井戸があり　彩泡
責任のない奴ばかりよう喋り　四葉
又來ると歸國氣易う言つて退け　あや美
深爪をつんで反省ギクツとし　山雨樓

これは當然「去る」「浚つて」「よく」「氣易く」「きつて」と標準語をつかはねばならぬ。げんに句主は愛媛の人であるが左の二君の如きは

碁敵が來て妻の去る涼台　世都象

爪きつてマツダラムプとよんでみる　曉童

とチヤンと「去る」「きつて」と標準語を用ひてゐる。だがさう言へば東京の川柳家も隨分東京語を傍若無人に使つてゐるやうだ。然し東京語の大部分が標準語である事が彼等に幸してゐるのである。この點では關西の人は不幸である。然し運が好いからと言つて我儘が通じないと同じ意味で、不幸だからとてドシ〳〵使つて好いといふ不貞腐れはない。

とは言へ僕は關西語を川柳に使つてはいけないといふのではない。（勿論そんな事を考へてゐるとは諸君も思つては居まいが）たとへば

遠足へ飲みなはんなやと送り出し　一杯

ウダ〳〵言ひなはンなと取るものは取り　路生

あれ見なはれお城だつせと高架線　天八

といふやうな場合は勿論關西語なるが故に興趣深いものがあらう。要は脚本で言へば脚本の卜書に關西語をつかつてはいけないといふのである。

コーヒ茶碗のネキにバンバが置いてあり、ゥンテキのウチラにはヒイがイコつてゐる——

なんていふ卜書は脚本にはない。但し斯う書いたからといつて、僕は關西の川柳家を冷かしてゐるのではない。前にも言つた通り言葉に就ては運の好い東京人の僕が、その運の好いのにまかせて、それと同じ事をやつてゐやしないかと自らを誡めてゐるのである。

○

關西の川柳家はまたよく地名を詠み込む。東京の川柳家もかなりやるが關西の人には敵はない。ところでこの地名を詠み込むといふ事も、ピタリと行つた時には好いが、さうでないと捕手邪飛みたいなバカを見る。僕の句にも隨分地名を詠み込んだのがあるが、その中で割合に好きなのは

深川へ半分消える稲光

潮がいつぱいに濱町河岸匂ひ

津の守や或は下りまた登り

蛤鍋に東京灣は雪ばかり

だが誰だか句主を忘れて申譯ないが、關西の川柳家で

子を抱いて堺を見たか京見たか

といふ句を讀んだ時、僕は思はず手を叩いた。これだ〳〵赤ン坊を抱いてアツチを向かせたりコツチを向かせたりしてゐ

る男親の瓢輕さもさる事ながらさうやられてゐる赤ン坊の顏が僕にはチラつくのだ。「堺を見たか京見たか」は全く好い。夏になると僕は義矢滿君の

雷は河内へ落ちて冷やつこ

の句を思ひ出す。これも地名が實にピタリと來てゐる。僕は河内といふ國を知らない。だが地圖で見る近畿の諸國の中で、河内といふ字は懷かしい。雷、河内、豆腐——斯う考へたゞけでも僕は無類の爽快さと萬斛の凉味を覺えるのである。

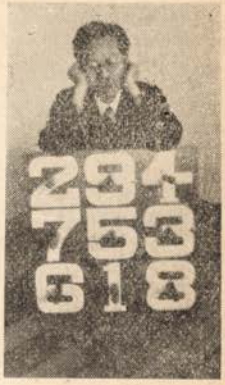
○

少し川柳を離れて何か言つてみたくなつた。こゝから先は福田君は讀まない方が好い。

この間ボレロの十二吋型を買つて來てそいつをかけながら、コップへ冷酒をついでコクリ〳〵三杯ばかり飲んだが、好いレコードはバーや何かと違つた味のある醉かたをするので愉快だつた。レイシュといふのも去年あたりから東京では流行りだした。然しこればかりは關西にはかなはない。

○

僕は割合に嫌ひなものがない人間だが、強いて言へば、景色江戸子、親子丼、丸髷、好いお天氣、歩く事、美人が嫌ひである。右の中で景色は嫌ひといふよりも寧ろ解らないと言つた方が好い。小學校時代に松島へ修學旅行をし 事があつたが、島巡りを始めたか始めない中にアーアーと欠伸をしたので體操の先生から「川上は勿體ない奴だ」と怒られた事がある。神戸に二年居たが須磨にも明石にも行かないで福原の向ふ横丁へばかり行つてゐた。どんな好い景色でも僕には五分と持たない。たゞ嘗て北支那に遊んだ時、絹のやうな萬壽山の湖面へ王城が逆さまに建つてゐたあの美しさは泌々感じた。親子丼はアブクが立つから嫌ひである。殊に蕎麥屋の親子丼の如き、食つてゐるんだか啜り込んでゐるんだか解らないあのズル〳〵といふ音を思つたゞけでも嫌になる。丸髷は何うにもあの型が滑稽で仕方がない。僕の女房は結婚十五年いまだに一度も丸髷に結つた事がない。「貫郎のお葬ひの時には結へるでせう」と諦めてゐる。美人は嫌ひといふより、美人を見るとなさけなくなるのである。だから電車などに乘つて傍に美人がゐると僕は電車を下りてしまふ。汽車だつたら別のハコへ乘替へる。こんな美人と口もきかず、笑もかはさず、一生他人で暮すのか——と思ふと僕は實にはかなくなつて來るのだ。歩く事は嫌ひといふより歩く事が出來ないのである。ヘンペイ足だからである。例の震災の時僕の勤めてゐた新聞社が燒けてしまひ、青山の假社宅で仕事を始めた。僕は品川から徒歩で通ふのだつたが、六本木あたりまで行くと僕の足は一歩も進まなくなり、その儘荷車へ乘つて引退した。十二三日もそんな事を繰り返してゐる中に到々クビになつてしまつた。僕は出勤してゐたのだが、向ふには缺勤である。足が首をきつた話である。江戸つ子の嫌ひな理由は別に機會を得て書かう。但し僕は三代目以上の江戸つ子である。



不朽洞雑稿

金・銀・錢の句

麻生路郎

徳川時代の貨幣には金（きん、銀（ぎん　錢（ぜに）、の三種がある。

（1）一箱もくすねて置いて戸をたゝる
（2）百兩をほどけば人をしさらせる
（3）去る時は九十兩ではすまぬ也
（4）眞中は黍けなくも三分なり
（5）素一歩の心ほそくも只一騎
（6）九十匁も廿四文も同じ夢
（7）初の字が五百鰹が五百なり
（8）うらゝかさ頻りに錢がほしくなり

（1）（2）（3）は金を、（4）（5）は銀を（6）は銀と錢を、（7）（8）は錢を詠んだ句である。

これ等の句を味讀するのに便宜上、金、銀、錢の數へ方と、金、銀、錢それぞれの關係と貨幣價値を述べやう。

金を數へるには金一兩、その四分の一が金一分、一分の四分の一が金一朱と云つた。銀を數へるには銀一貫、その千分の一が銀一匁。錢を數へるには錢一貫、その千分の一が錢一文である。

金、銀、錢それ〴〵の關係は金一兩が銀六十匁、金一兩が錢十貫目に相當した。そして金一兩の含有量から比較すゝと現在の金貨五圓にしか相當しないが當時の物價と現今のそれとは恐ろしい間隔がある。

菅野博士の說くところでは、徳川末期の米の標準價格は現在の貨幣で米一升約二錢だつた。昨今白米一升が約二十錢として計算すると當時の一圓は現在の十五倍十五圓に當る譯であるから（1）の句の一箱即ち千兩は現在の金にして七萬五千圓となる。從つて金小判の値打が如何に莫大なものであるかゞ想像し得られよう。

如上の計數は徳川末期に於ける日常生活の米の標準價格から割出されたものであるから、それ以前の寶曆明和時代の物價が、より低廉であつたとすると千兩一箱が約十萬圓はしたのである

上述の解說を知悉した上で一句一句を味讀する時には時代の隔たりによつて生ずる句の難解さが消失して殆んど現代句の句境に臨むのと何等變らないことゝなる。

（1）句は千兩箱一箱を隱匿して置いて閉店する、惡辣なやり方を諷した句で、現代にもよくある手である。

千兩はぬけるが山師口につき

といふ句もある。

（2）の句は小判百枚、ばら〳〵とはどけた時の燦然たる威力、威壓された人間の弱小さが思はれる。

これ小判たつた一と晩居てくれろ
妙藥をあければ中は小判也

十分一取るにおろかな舌はなし

何れも小判を詠んだ句で、とり〴〵に面白い。「これ小判」の句は擬人法で右から左へ消えて無くなるその迅速さを嘆つたもの、「妙藥」の句はなるほど小判ほどに利く妙藥はない。瀆職事件などがおきるのもこの妙藥の利過ぎに違ひない。「十分一」は醜い嫁の持參金百兩の十分一、即ち十兩は仲介の謝禮の謂である。

（3）嫁の持參金百兩のうち、十兩は仲人の手に渡つたので、九十兩しか婿の手には這入らなかつたが、若し急に不緣にする場合九十兩しか手に入つて居らぬから、九十兩返へしさへすればいゝといふ譯には行かない。持參金の嫁を娶る位だから百兩にして返べすことは困難である。婿の當惑した顏が眼に見へるようだ。

（4）は女郎を活菩薩として讃美した句で寶暦の頃から吉野の全盛妓散茶女郎の畫夜の揚代金が三分であつたので「畫三」と呼んだ。三分とは即ち玉代である。眞中は活菩薩の女郎、兩脇は禿

春宵一刻あたひは三歩なり
うつくしい筈一兩が一歩ぬけ

といふのもある。これも畫三を讃美した句。

ちう三をぶちのめす氣で女房出る

これは女房の悋氣を詠んだもの。

（5）は吉原へ遊びに行くのに只一人で出かけたのはいゝがタツタ一分の金しか所持して居ないのである。

素一歩も知らず駕かきついて來る
素一歩もぜんたいわれが金でなし

といふ句もある。

（6）の「九十匁」は、吉原の最上妓の揚代、「廿四文」は本所吉田町邊に居た夜鷹の玉代が二十四文であつたので、「二十四文」と云へば夜鷹の代名詞となつたのである。

女房はもとが九十匁おもしろし
氣ばらしに廿四文は大きすぎ

といふ句もある。

（7）の句は宵越しの金を持たぬと云はれた江戸ッ子の氣前を見せて初鰹を買つたものゝ、たゞ初鰹であるといふだけに倍額を拂つたのであるから、初が五百、鰹が五百だと皮肉つたのである。

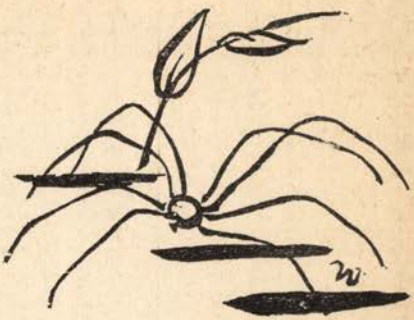
初鰹算盤のない内で買ひ

（8）これ位のんびりした情景はあるまい。花は咲いたが、あるものが無くては花見に出掛けても面白くないのでいつそ麁さがうらめしくなるといふ、斯うした經驗は誰にでもあらう。「うらゝかさ頻りにかねが欲しくなり」と云はずに、「ぜにが欲しくなり」と「ぜに」と云つたところに此の句の生命があるのである。その當時、主として錢は職人、銀は商人、金は侍が遣つたので階級までが、この句にはハツキリ出てゐるのである。

江戸者でなけりやお玉が痛からず
なけなしの錢で松明一一本買ひ
八文は味噌を片手へ受て飲み

など何れも錢を詠んだ句である。

「女房をこわがるやつは金が出來」の如く貨幣を總稱したものでなく、金、銀、錢を詠んだ古川柳は幾らでもあるがそれは各自で味讀されたい。（終）



時は流れる

阿部閑生

時は流れる、明治大正の出版物がそろ〳〵古本としての興味を唆らうとしてくる時、その大正本の中に誠に好ましい二つの小冊子が見出された。日曜の書棚整理から漏れだした夢二の「どんたく」と、路郎著「懐手」がそれである。夢二の描く眼の大きい睫毛の長い女と内輪に足を曲げた小兒の繪は若い人達にひと時強い魅惑を持つたものであつた。今見ても讀んでも中々によい。體裁も氣が利いて居て捨て難い趣きがあるが、それにも増して「懐手」の裝幀は尙好ましい。それに相當な古さが加つて中味としつくり合つたおちつきを見せてゐる。

朝顔の前で爪切る夏休み

逃げ腰で値切る植木はまけてくれ

素材の擇び措字の適否はもとよりだが、活字の組み方にも繪の配置にも句を生かすのと殺すのとがある。その邊の調和がよくとれて句が引立つ所爲もあらうが、相當多くの人によつて詠まれてゐると思ふ爪を切る句の中では、自分はこの句が一等好きである。

ぐる〳〵と廻して元の襟をとり

斯うした一句もこの小さな本の中に無くてはならぬ情景であり姿體であり柔か味である。襟といふ品のもつ特殊な魅力も大正を末期として消え去つてゆく存在となつた。

同郷の人を頼れば二階借り

別れる日飯の白さが眼立つなり

この句集を愛惜せしむる吸引力の中心はこれ等の句のあたりに渦巻いてゐる。道ばたの草に半ば沈んだ道しるべの有つ力で先を急がうとする眼をじつと吸着けてしまふ。

○

材質を選良して大なる粗悪品を造り上げたのは日本の政黨である。今日では材料も次第に低下してしまつた。中に純良なのもあるにはあるが各自に善くない事をして、身から出た錆とは云ひながら可哀想な程消氣てゐる。

安つぽい品質から小さな精巧品を作り上げるのが川柳の仕事である。何時となく製品も漸次粗雜に流れて來たが、これは亦何も悪いことをせぬのに一向振はない狀態である。消氣てもゐないが發展をしない。

材料がざらに有り觸れた安つぽいものであるから半製品や粗製品は皆失敗して結局出來上つたのは、たまさかの佳句か然らずんば大方駄句となり易い、そこが川柳の損な處である。無價値なものから價値を、無趣味なものから趣味を、單なる物質から珠玉を、瑣末な事象から藝術を作り上げやうとするので、完全に成功しなければ完全に失敗して元のばらばらの安つぽさに還るのである。この點ある種の情感や野趣を約束附けてゐる短歌や俳句と異り、愛讀される程度の句を揃へるのは容易でない云はゞ川柳には缺陷を緩和すべき何等約束の連繫がない。

政黨の崩壞は對岸の夕燒けであるが、川柳の衰退は足もとの飛鳥である。只なり行に委せると遂には影を留めぬ悔が殘る。そこに川柳愛好者の直接な關心がある譯で、さし當り積極的に問題が提唱されてゐる。川柳家をもつとふやす方法と、川柳家以外にも買つて貰へる雜誌にする方法と。

適切なだけに難しい事ではあるが、一方が成就すれば兩方とも解決する問題である。

○

山陽以上に書の巧い人がない譯ではないが字の書けぬ輩にまで山陽の書が廣く多く鑑賞をされるのは彼の生活を通じて横溢する覇氣を買はれるのである。天凛の氣力がその作品に迫力を吹き込んだのである。子規と山陽とは時代と事業とを異にしてゐるが、技能と氣力を兼ねた點に似、死を自覺しながら最後の瞬間まで筆を執つた點に似、其他性格に努力に似た點が多々ある。子規はこの氣力のことを自分もしつかり認めてゐて野心といふ言葉に現はして後輩を指導した。「野心を持て、野心のないものは駄目だ」と。

俳聖と云はれる芭蕉ち句を作る態度は必ずしも聖人ではなかつた。其角など流行中心の句を作るのに心を曳かれ、寧ろ大いに時流を氣にしたやうである。後世俳諧墮落の源泉は正風の本家に兆して居るとも云へるのだが、およそものを興し、革新し擴張するには技能に伴ふ氣力が必要であり、更にこれに携はる所の選ばれたる周圍の人々がなければならぬ。

其角や言水や來山が川柳の點者になつてゐるのを見ると、作者にもなつてゐたに違ひがない。その頃の川柳は發句と作者を混同して別の一勢力を成してゐたものである。今日俳人が川柳から劃然と離れ去つたのは川柳の萎微を意味するもので、萎微

の原因が俳句の革新者に對して川柳の革新者が遙かに力の及ばなかつた爲か、本質的の内容から來た當然の歸結か、或は伯樂あつて千里の馬がなかつたのか、千里の馬より坂を喘ぐ鈍牛の方が肉のうまい事を伯樂が知らなかつたのか、何れにしても頽瀾を未倒に防ぎ進展を明日に期すには、技能と氣力の二つで闘ふ外はない。

川柳の雜誌に評論研究の必要なことは云ふ迄もないが、開卷一番まづ讀者を作句の昂奮に捲き込むものは佳句の示す威力である。句のうまい人に成るべく多く活躍して貰ふことだ。稀に佳い句があつても瓦石に埋れては、おしなべて注意の圏外へ疎ぜられてしまう、例へば政黨とおなじ樣に。

年中金庫の前に据ゑて盛夏にも上着を脱がないと云ふだけが取柄の變哲もない人に「あなたは何を樂みに生きてなさるのですか」と一度問はう〳〵と思つてゐたので、遂に問ふて見たらその人は少時口をもがつかせてゐたが吃りながら云つた「死ぬのはかなひまへんな」

如何に前提二問題の解決に努力しても、この種の人まで川柳に引き入れやうとする事は至難を超えて不可能に屬する。川柳進出の本筋は何を置いても親しからざれど最も近き同業者なる俳人一覺醒を與へ得るだけの名句を矢繼早に發表することだ。とりわけ意氣軒昂として。

○

限定本と云ふものが一年もたゝぬうちに百貨店の書籍部など

に累々と屍を晒らすのは見苦しい限りで、奇を好んだ裴頓が却つて氣障と不統一を暴露して、書物とは緣の遠いものゝやうな氣持を起させる。我國には讀書階級がないと書いてある魯庵の遺稿も美裝してその中に肩を並べてゐる。

躰裁の蕭洒な、内容の引締つた、特徴のある川柳句集がぽつり〳〵出るとよいと思ふ。個人の句集なら何處かに個性が覗いてゐるやうな編輯がよく、集團亦は年刊の句集ならば嚴選でさへあれば思ひ切つたお粗末なのもよい。挿繪は多くとも少くともよいが必ずしも句を正面から説明したのに限らず、繪として別個の味の出たのが望ましい。再び「懐手」に戻つて偶然指某してゐるところを見ると

尼寺にまだ煩惱の燃ゆる弟子

とある。風にあふられて机邊に散り開いた新聞には、黑々と「舜海懺悔錄」といふ大きな廣告が出てゐる。一昔前の豫言か因果か。

帶を解く女工一錢落すなり

國を逃げて來て福島の日入屋

こんな句からも時は流れる。流れ〳〵て消えるものは消え、殘るものは殘る。有るうちは買ひもせず無くなれば血眼になつて探すのが人情である。賣るだけ賣り僅かに殘して多く探さすことだ。

——九・七・八——

酒の世の中

長崎柳秀

月に、花に、はたまた雪に一瓢を携へて行く十德姿の俳人のあるかと思へば、銀燭まばゆい高樓に大盃を傾ける大盡もある。嬉しいにつけ、悲しいにつけ、どちらに轉んでも酒の世の中、要は唯

酒とろりとろり大空の心かも　路郎吟

の境地に到らんとするものであるらしい

ぶらり〳〵と街をあてもなく歩いて見ると「白雪」の「ネオン」が光つて居るあちらの川面には「白鷹」「菊正」の逆さ文字が明滅して居る。「ラヂオ」は「酒飲めよ酒飲めば」と唄つてる。眞に酒、酒酒の世の中だ。

時には聲をからして禁酒を說いて居る救世軍を見うけることがあるが、その頭の上には「ジョニーオーカー」の「ネオン」が皮肉にも輝いて居る。

新聞には一頁大の「サントリー」の瓶が畫かれてあるかと思へば、信州伊那谷の某家に傳はるといふ蝮酒の効能がれい〳〵と揭げられて居る。

下界の我々には鞆の「保命酒」あり、奈良の「あられ酒」あり、神樣には御神酒があり、キリストには葡萄酒がつきものだ。

さて我國の酒と云へば、先づ灘の生一本から地方の濁酒に至る迄その種類は實に數へきれない。風がはりのでは琉球の「あわもり」女の口にあふ「柳かげ」てつとり早く醉う「電氣ブラン」また異國渡來のものを數へあげると、これも限りがない。

酒すきの患者が一番困るのは酒の味を解せない醫者ださうだ。「どうで御座いませう、盃に一杯位は」と訊けば、先生すぐ眼をまるくして「絶對にいけませぬ」と頭から否定する。それがもし一寸いける口の先生であれば「小さい猪口なれば一杯位はよろしからう」とか「日本酒はいけないが葡萄酒なれば少し位は」とか、譯の解つたやうな解らないことを云つて程よく承認してくれる。

つくづく人間と云ふ者と酒とは、よく〳〵腐れ縁だと思ふ。どんな未開な人たちの間にも酒がある。即ち、酒のある所また人生ありと云ふものだ。ほんとか嘘か自分は知らないが、猿もまた一種の酒をかもすとか、人跡未到の深山幽谷でえも云はれぬ芳香に誘はれて探して見ると思ひもかけぬ木の股の洞などに甘露のやうな酒をみつける事があると云ふ。

神樣には「バツカス」「少彦名」あり、瀧には「養老」がある。こんなことを書きたてればまた際限がない。

忘れられた遠い昔に何處の民族が酒を造ることを始めて、どういふ風に全世界に擴まつたか知らないが、兎に角どんな未開な人々の間にも酒もしくは夫れに類似する嗜好飲料があり、酒のある所必ずその不思議な作用の爲に靈液とたゝへ治病の藥として用ゐて居る。勿論我國に於ても上代ではまたさうであつた。當時の社會組織の單位は呪術團體であつて、その族長である巫女たちが呪術を行ふ材料として酒をかもし、それを飲用して呪術を行つたものである。

荒木田氏の「くし」考によると「くし」とは酒の古名であり「くする」とは禁厭を行ふて病を除く動作を表はす語とある同一語源から出た「くすり」はその禁厭の術を行ふために食するものであると云はれて居る。

記紀などには素盞嗚命が八岐大蛇を退治せられる時に八醞の酒を造られ、天孫が御降誕のときにあたつて神吾田鹿葦津姫は天の甜酒を造られたと記されてある

未聞時代にはおほむねさうであるが、我國でも古代では造酒な女――巫女としての女――の仕事であつた。そして酒をかもすときには良く醸されるやうにと神樂が奏され、出來上つた酒を味ふときにもとは酒を稱へるために、後では之を飲む人の幸福健康を祈念するために舞がまはれた。これが「酒ほがひ」である。

その他酒と神事とを離して考へることの出來ない例は多々ある。そして當時の醸造法は、恐く現在南洋あたりの土人が行ふて居るのと大差のないものであつたでせう。

其の後皇紀九四五年が王仁が來朝し、論語千字文等を献ずるに及び、織工及び裁縫工の外に醸酒仁番を連れて來たのであ支那朝鮮式の醸造法が這入つて來た。

酒そのものに就いては其最初は果酒であつたやら米酒であつたやらはつきりしない。まして其方法などの詳細は確實に判らないが、大和の飛鳥坐神社の南方三丁餘の丘上「酒船石」といふのがあつて高さ三尺五寸　長さ十三尺七寸、幅六尺、略ぼ楕圓形で平面に三箇の溜と七條の細溝とがある。傳へによると飛鳥神社の神酒を醸した跡であると。尚ほ此の附近には醸造に關係のあるらしい石器が發見せられ、今では史蹟として保存せられて居る。

世が下つて德川の初め頃に至る迄清酒の造りかたを知らなかつたが、慶長の頃攝津鴻の池の酒屋に山中勝庵といふ人があつて四斗樽を製し二樽一駄として年々數千駄を江戸へ送つて巨利を博し遂に三都第一の富豪となつた。其の頃勝庵に怨

を含む者があつて、勝庵に一泡吹かせてやらうとて無謀にも一夜ひそか　酒樽に灰汁壺を投げ入れたところが、翌日勝庵が酒樽をあけてみると何か底に沈んでるが、酒は濁りがとれて澄みきつてる上に香料も亦一段と加つて居つたのを發見した。

この偶然の出來事を基礎として「すまし灰汁」の方法が發明せられ、それ以來追々と清酒が全國へ廣まつたと云はれて居る。

文祿以後關西地方では伊丹、池田が酒を以つて盛んになり、天明頃より攝泉十二郷とて大阪　郷、傳法、三田、池田、伊丹、尼崎、西宮、今津、灘四組、兵庫堺、岸和田等が總稱せられ、漸次酒造に努めたものだ。今日では全國各地で酒造せらるゝ域に達した。

また酒に色々のものをとかし込んで藥用に供せられて居るものも中々多數である。わけても支那では非常に多數多樣の蛇酒が延命長壽の藥として賞用せられ、その中心は四川省であると聞いて居る。

日本で蝮酒等を見るのも其の影響を受けたものであらしい。

斯やうに酒にちなむ漫想は縱橫に流れ〳〵て盡きる所がないが、又酒造家は澤山でありおほむね富豪あり、中には俳句に親んだものもある。俳聖芭蕉が一目置いたと云ふ伊丹の俳人上島鬼貫氏も亦酒造家の生れであつた。

俳句と云ふことからふと心に浮んだことは、もと〳〵酒などと云ふ題は、自分一人の考へではあるが、寧ろ川柳畑のものゝやうに思ふ。さればとて今酒に緣のある古川柳や近代作家の名吟を擧ぐればなか〳〵の紙面にもなり、且つは一々記憶して居らぬから、此處では單に自分丈のものを書き並べて――山鳥の尾のやうに限りなくつゞく漫想を打ちきることゝしよう。

酒にちなむ川柳吟二十五句

お流れの御返盃のと飲まされる
御返盃人の手前も憚からず
大盃を美事に乾した咽喉佛
毒か飲むやうに盃下戸は受け
惚てれば女給まんまと飲んで臭れ
「柳かけ」何處か降つてる風を賞め
君なんていやよと女給酌ぎこぼし
お氣分をきかれて困る二日醉
傑作は今に出來ると呑んで居る
寢たのやら寢さゝれたのか午前二時
恐縮の猪口は兩手にしかとうけ
灯の下に男の弱さ見透され
上燗屋うだ〳〵云ふて金になり
强硬に出るとなみ〳〵酌で臭れ
通夜をする心算の酒に眠くなり
見返してやる發奮は酒を絕ち
格言は格言酒は酒の味
マルクスだ酒だ女と子を案じ
四五人でする心配に酒が要り
贅澤な汗を拭いてる父の酒
來るまでの酒は女將に酌せとき
想ひざ〳〵笑うて受げる人の面
醉うて來た亭主斷じて聞き入れず
人生觀金と酒との違ひなり
養生は俺には出來ぬ酒の味

本稿を草するにまた柳友山彦、關根博士に負ふ所多し、茲に篤く氏の好意を謝す。

武玉川二篇研究（四）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

（101）

醉狂の翌は浮世に突あたり

省二＝浮世は色と酒などと言つて、醉狂過ぎた翌日は、聊か氣恥しい思ひもあらう。――浮世が狹まい樣な氣もしよう。

東魚＝浮世離れのした醉狂から―今日は覺めて、巳を顧みる心持であらう。

秋の屋＝色と酒などの浮世ではなく、醉狂がすぎて、上官が上役を罵詈毆打でもした、翌日醉が醒めてみると、前夜の不始末から、馘られでもすると、忽に腮が干上り浮世の落伍者になるであらう。と窃に後悔するといふのであらう。

（102）

明筈の戸をたゝく高聲

東魚＝明けてある筈だのに、なぜ締めてしまつたのかと、自分の家へ立戻つて、戸を叩いてゐるのであらう。時々小生なども山神の怒にふれて締出しを喰ふ。中つ腹でこつちも、遂に高聲になる。

秋の屋＝錠も下してなく直に明く戸を、前より無暗に敲いて明けろ〳〵と吐鳴る、醉漢の爲であらう。

省二＝生醉本性違ひず、千鳥足で歸る迄は、そう間違ひもなく、自分の家の門迄くるが、そこで一度に醉が出て、戸をやたらに叩く、其上高聲になる。生醉心理を詠むだものか。

（103）

情しらすの笑ひ大きし

東魚＝「情しらず」は微妙な情事などは解せぬ。云はゞ武骨者なのであらう。即ち戀愛などは問題にせぬ豪傑がつた高笑ひの意と思ふ。

秋の屋＝所謂冷血漢が、他人の生命に關する程の大事を、傍觀して救助しやうともせず、呵々大笑するといふので、戀愛事件には限らぬと思ふ。

省二＝前句がなくては判然とせぬ。大きしなどからは、豪傑諺にも解したいが、此句を情趣的にとるとすると、事情や場合を考慮酌酌せぬものと思ふ。

(104)

看病に藥のやうな顔一ツ

省 二＝病は氣からだ。患者の心持ちは爽快に導く要がある「藥のやうな は美しい事を意味しはしなからうか。美人の細君を指すのであらう。―(古川柳では、「看病が美しいので匙を投げ」など詠まれてはある。

東 魚＝左樣、美しい顔なのであらう。顔見ただけでも治りさうに思はれる―偖は戀病ひか。

秋の屋＝或る意味に於ては、毒ともなり藥ともなるのであるが、美人の細君でなくて、何處かで見初めた尤物であらう。

(105)

座頭はなせは文のうへ行

省 二＝「はなせば」は放す歟。「うへ行」は歩く事歟。？

東 魚＝咄せばではないか。座頭に話をさせるとなると、書いたものを讀以上の面白さを發揮すると云ふ意かと思ふ。

秋の屋＝旅宿の坐頭などが、土地の傳說を物語ると、文書を讀むよりも面白いといふのである。

省 二＝適解だ。「文のうへ行」の表現よし。

(106)

鰒買て餘所の流しへ持て行

東 魚＝家人にとがめられぬ樣に、鰒仲間の流しへ行つて料理るのであらう。

秋の屋＝昔の人は藥喰と稱して、鰒や獸肉を食ふ時は世間に秘密にして居たのである。

省 二＝柳多留初ヘン二五三句目に有る。

(107)

夫婦喧嘩の外て小便

東 魚＝何やら騷しいと思つたら、夫婦喧嘩をやつてゐる―それに聞耳を立てながら、其家の外で立小便をするのであらう

秋の屋＝他人の夫婦喧嘩などは、我不關焉と、立小便をしながら、面白がつて見てゐるのである。

省 二＝立聞きは興味十割だらうが、小便は辛抱が出來ぬ。

(108)

たおれ序てに住よしの市

省 二＝住吉市を寶の市、桝市と稱した事は、初ヘン(261)に陳べた。上七は損ついでの意？

東 魚＝物入り序の意かと思ふ。散財序に住吉の寶市へ押出して又散財を重ねると云ふのであらう。

秋屋＝乳守(堺)の曲廓で遊興した後に、寶の市へ押出すのである。

(109)

松風の裾わけをする萩の上

省 二＝祇園梶女の句に「これはさてあの松風が秋さうな」でその松風が萩の上を流れてふく。(裾と上は技巧とみてよろしからう。)

東 魚＝裾と上を技巧的に對照さしたとまで見ないでよろしからう。單に、松をふく風の餘波が萩に及ぶと云ふのを、裾分けといふ日常語を活用してみただけであらう。

秋の屋＝半狂堂本に、坐五は「萩の上」とあるが、これは「荻の上」の誤字ではない歟。荻の上風は和歌にも咏まれるが、萩ならば上露でなければならぬと思ふ。

省 二＝御尤である。「宿かへて荻の上葉や松の風」(紹巴)とあるが、又「荻萩にすそ分するや松の風」(兆之)とも咏まれて居る。

東 魚＝原本は明かに、萩です書損とも思はれぬ。

(110)

帆かけ舟先か直てたはいなし

東 魚＝「先が直て」は舳の方向が正しく直つてとの意か。さ

すれば、うまく舵をとつたとなると、何の譯もなく、ぐん〳〵帆掛船が進んでゆく、何とたはいないものだなア、とでもあらう

秋の屋＝夜中の航海に暴風雨に遭ひ、方向も定めず暗黑の大洋を漂流したが、頓て夜が明け風雨が靜まると、舳先に近く陸地がみえて、昨夜心勞したほどではない、といふのであらうと思ふ。

省二＝たはいない句だ。朦朧として意がとりにくゝ、興趣を覺えぬ。

(111) **隱居の小判うこくあつかい**

東魚＝下七は活きものゝやうに、あつかふと云ふのか。何でも萬事小判に用を足させ、有福な隱居、と云ふのであらうか

秋の屋＝隱居が貯金を徒に死藏せず、これを人に貸して、利殖を謀るのである。

省二＝「うごく」は金をねかすの反對。活用する。うごくの上を越すのは、はねる。

(112) **子の口吸ふて音頭分れる**

省二＝情が出て居る—數年前「子の口吸ふて急行に乘る」と投詠し來つた人がある。

秋の屋＝この「音頭」は盆踊の音頭、「子」は妙齡の踊子のことで、相思の中であらうと思ふ。

東魚＝子は矢張子供らしい。年に似合はぬ唄や踊の上手な子と、音頭取りが分れ際に、口を吸ふて分れると解してもよさそうに思ふ。

(113) **立なから見て歸る金元**

省二＝金元は資本家。さて何にをみて歸るのか。事業ではあらうが。

東魚＝芝居の金主が、景況をみがてら、一寸立ちながら見てゆくと云ふ樣に解されてゐた。

秋の屋＝興行物の大人と不入とは、出資者の損益に關する事故、一寸立見をして來るので、金元の心理を穿つた句である。

省二＝「川柳江戸歌舞伎」には、載つてゐました。「出來不出來金主の運も拍子幕」

(114) **紙燭の反りを土器で摺**

東魚＝紙燭は松の細き材の一尺五寸程のものに、油を塗り火を點するもの、又紙を用ゐるものあり—と俳諧辭典にみえる油をぬる際、燈明皿の土器で、反つた部が摺れると云ふ場合ではあるまいか。

秋の屋＝紙燭は脂燭と書くのが正しいのである。紙捻と松材との二種ある事は前解の如くで、その紙捻のものに、反り曲つた所があつたから、火を點ずる序に燈明皿の緣に摺りつけて、眞直にするといふのであらう。

省二＝前句なくしては眞の働きが認められにくい。

(115) **海馬もらへは背中たゝかれ**

東魚＝海馬は合賴節用をみると、「形如馬長五六寸鮫類也婦人難產帶之身、則易產云々」とあるから、安產の呪禁になるのであらう。その句意は、これを貰つた婦人が、ひやかされて春を叩かれる場合と思ふ。

秋の屋＝海馬は一名「たつのおとし子」といひ、「形如馬」とあつても、足は一本も無くて、繪に描いた雨龍に似てをり、鱓の如くにして食料に供される。

省二＝一說に雌雄一對を、產婦が手に握つて居れば、羊の產の如く、容易であると。

(116) 生醉の次第〳〵に丸く寢

省　二＝丸くねた後では、「生醉を俵のやうに取廻し」（ム十七）。

東　魚＝うまい事をよむものだ。段々醉がさめかかる心持ち知らず〳〵寒さ覺えつゝ、かゞまり丸くなつて寢るのであらう

秋の屋＝次第々々に丸く寢るは、醉漢の實況である。

(117) 瑞軒を見た杣の長命

省　二＝河村瑞軒の逸話に、府下の大火に際し、火未だ消えざるに木曾へ行き、材木の買メをなし大成功をした。八十三の長壽であつたと云ふから、瑞軒をみた杣の長命は、また知らるるわけだ。

東　魚＝お說の通りであらう。

秋の屋＝高名の瑞軒を見知つてゐるのを、杣人が誇りとするのである。

(118) 利そうに思ふは銀のくすり鍋

東　魚＝銀が貴重された昔の事であるから、銀鍋で藥煎じたのは、土鍋などでしたのより、遙かに効果がありさうに感じられるのであらう。

秋　屋＝昔の大名の使用する藥鍋は、銀製であつたと聽いて居る。

省　二＝病は氣から治る。銀鍋なら有難い筈だ。樂山庵氏の話に、「村岡先生、大の菊五郎びいきで頗る通人、身裝もゾロリとした小紋縮緬、古渡り更紗の下着といふこしらへ、舊幕御典醫の一人とあつて大した權式、かれの藥を煎じるなら、銀の湯沸に限るよと嚴命。」

(119) 鮒の中へはかるうの花

東　魚＝桝でうる鮒の中へ、垣の卯の花が、こぼれ込むだと云ふのではなからうか。

秋の屋＝現今では鮒を、秤で量つて賣るが、昔は桝で量り、一升何程と代價を定めて賣買したものである。

省　二＝私の幼時の頃も桝賣であつた、「怖さうに泥鰌の桝をもつ女」（古句）。

(120) めくろの犬も冬かれに成

省　二＝古句「粟餅は犬にくれろと氣が違」。粟餅は目黑不動の名物。境内に犬が澤山ゐて參詣人に、つきまとつたもの、不動樣は正五九の月の二十八日が緣日として尤も賑つた。九月が過ぎれば「冬がれに成」であらう。

東　魚＝犬も好餌にありつけなくなる、それを四邊の景に云合せて、犬も冬枯と興したのである。「成」はナルであらう。

秋の屋＝昔は犬の多くゐた目黑に、今は白面の猫が多く徘徊して居る。

(121) 檢使にこ〳〵下帶に金

省　二＝職掌柄不都合である。金を見てニコ〳〵とは。

東　魚＝下帶に金をくくつてゐたのが、哀れにも可笑味しかつたのではないか。埋葬雜費の心配もいるまいし、三途の川も無事に渡れるだらうし、又下帶にくくつた處が、何となくおかしい。色々な事が重なつた心持ちで、ニコ〳〵なのであらう。然し「ニコ〳〵」はちと恐入る。

秋の屋＝江戸時代では變死人の所持金は、檢視の役人が收得する事は出來なかつた。多くは死屍を埋葬する寺へ收めたやうである。

（122）

旦那へさして逃るさかつき

省＝時の一興。若き女として嬉しい所業だ。

東　**魚**＝客の方へ返盃するのが當前の場合だが、きまりが悪く、常は近寄り難い旦那へさして逃出す。年若い召使であらう

秋の屋＝盃を差して逃げるのが面白いのであ。

（123）

向ふ木挽の揃ふ鼻息

省　**二**＝鼻息が揃つて力もはいる。疲れも少く能率があがる（内地と朝鮮の木挽の使ふ鋸の齒は反對である。」

東　**魚**＝輕妙な句。

秋の屋＝一の木材の前後に、木挽が二人居て左右に柄の附いた大鋸で、それを挽割る場合には、二人の呼吸が合はねばならぬ故、自然鼻息もよく揃ふであらう。

（124）

淺草も上野もなりて郭公

東　**魚**＝「なりて」はどうも分らぬ。「なかで」の筆勢が「り」に見えるものかと考へたが、どうも「り」らしい。或は「鳴りて」であるかも知れない。淺草上野の鐘ー暮を告げるー鳴つて、郭公が鳴き渡つたと云ふなら、光景は想像し得る。

秋の屋＝上野淺草の鐘が聽えた、其すぐ後から郭公が啼き行くといふので、それも入相の頃ではなく、世間の物靜な夜半か曉であると思ふ。

省　**二**＝鐘と時鳥を列べた作は多い。「時鳥聲聞く時ぞ明の鐘」（文鶴）。「入相の響の中也時鳥」（羽紅）で前說いづれとも解される。

（125）

三疋てはねれば馬も詠あり

東　**魚**＝三疋の馬が狂ふとか云ふ俚諺があつたと思ふが、そんな事を前句の關係から句はせてゐるのではないか。

秋の屋＝斯る俚諺が有つたものならば、其れを句にした丈けであらう。

省　**二**＝？印であつた。俚諺調べてみしが見當らず。

（126）

早乙女の笠は裏から日があたり

省　**二**＝田植にかゞむ姿。早乙女の笠は詩材として喜ばれ、句は頗る多い。笠の裏に日が當る事は實際にあり得らるゝのではあるが、句構が少し理窟臭を有しはせぬか。

東　**魚**＝裏から日が當ると、奇を求めて表現したので、理窟めく趣きもあるが、事實の光景を直に思ひ浮べらるゝから、理窟と云つてしまふのは、少し可愛想である。

秋の屋＝事實の有無は別として、理窟ではなからうと思ふ。

（127）

醫者に二度まで積らるる貝

省　**二**＝「積らるゝ」は、見積らるゝ即ち推量さるゝの謂。

東　**魚**＝どうも本復しさうで又逆戻りするのは、合點がゆかなかつたが、矢張り看病の美しい顏がたゝるのだなと、二度目でしかと、さげすみを付けたのか。

秋の屋＝醫者から遂に匙を投げられる顏らしい。

（128）

二ツ重なる嚊の傘

東　**魚**＝原本「呵」であるから、さすれば句意は明である。

秋の屋＝前說には明瞭。

省　**二**＝他活字本は「呵」となつて居る。

（129）

後家のやうなる牛若の影

東　**魚**＝牛若丸の稚兒輪に結つた髪の有樣が、後家の二つ髷などと云ふ髮と、影が似てゐるので、かく奇拔に詠むだのであ

らう。

秋の屋＝後家の二つ髷と、牛若丸の稚兒髷とは、その形が全然相異するので、これは現今癈れたけれども、明治の中葉まで行はれた、「おばこ」といふ髷で、年増女の結つたものである。此の形は稚兒髷に稍似て居る。

省　二＝祖母子髷は年増向、笄でとめる、二ツ髷は若衆姿の繪によく見る。

（130）

くやしい聲て横貝へ向

省　二＝くやしい時に、横を向いて視線をそらす。

東　魚＝お說だと聲の主と横顏を見せた主は、同人となるが句面からは別の樣である。いくら云つても耳を傾けず、横ッそつぽうを向いてゐる人に對して口惜しい聲を振立て、最後の言葉を云ひ放つ場合かと思ふ。諫言でも戀でもよいと思ふ。

秋の屋＝此れは戀の句で、聲の主は女、横顏の主は男である

省　二＝お說通り、横顏「へ」であつたから。

（131）

下戸ふり起して廻る司召

省　二＝司召は秋の除目と稱し、秋（春にも）に行はれた任官式で、大口儀式はやかましかつたもの、下戸はいつの場合でも起し役。「ふたり」は——深く考える要もないでせうネ。

東　魚＝大事な時刻をはづさぬやうに、下戸が朝の起し役をつとめるのである。上戸はもう祝酒で、兎角朝は覺束ない。

秋の屋＝司召の徐目は、朝廷に於て內官即ち左京の諸司を任補する儀式で、九月に行はるゝを以て、秋の除目とも云ふ。縣召の除目は、諸國の國司即ち地方官を任補する儀式で、正月に行はるる故に、春の徐目といひ、また外官の徐目ともいふ。此句は官中に宿直して醉ひ臥せる官人を、下戸が起すのであらうと思ふ。

省　二＝外官除目に對し、京官除目といふ、八月十一日行はせらる。「司召督佐尉の烏帽子みよ」（友竹）。「一理屈もたぬ顏もなし縣召」（蓼太）。

（132）

通りの傘へあたる豆蒔

東　魚＝鬼は外といつて、明け放つた戸口なり窓なりから、豆を一掬み投げたのが、丁度通り掛りの人の傘へあたつたといふ、即興をかく詠んだのであらう。

秋の屋＝除夜の光景で、傘の上へばら〳〵と炒豆の降るところが面白い。

省　二＝通り合せた人も、輕い感興を覺えるならむ。

（133）

物思ふ相手かなさに幅を釣

東　魚＝待つ人でもあれば格別だが、別にそうした當がないから、まア〳〵寢るが極樂と云ふ心持ちで、幅をつる。「蜘を釣」は寐仕度と云ふ丈けを興深く現はしたのであらう。

秋の屋＝「起きて見つ寐て見つ幅の廣さ哉」の古句に據つたらしい。

省　二＝間もなく寢言は妙。

（134）

うしろ姿はしれぬ關守

省　二＝通關人を檢査すべく、頑張つて居る役柄だから、容易に後姿はみせぬ。これで威嚴も保てる。

東　魚＝お說の通り、輕い諧謔に微笑をさそはれる。

秋の屋＝袴とみえたのは、前懸であつたかも知れぬ。

川柳塔

路郎選

山本丹路

背廣でもよい葬式をことづかり
狂ひなくマツチの先に火がともり
同じ嘘なら絢爛たる嘘をつけ
あとさきをわきまへてするお燒香
交際のひとつ送別會にのぞみ
歐洲の空は曇れり外報部
美しき表情をして死にたまへ
實話時代のテイータイムかな
生活の一部としての長襦袢

朝田新水

憂鬱な銅貨の錆びた音を聞き
馬鹿な子の書置のない哀れさよ
女房の存在を知る烟が立ち
そこへ子が病んで無心にくどく書き
父未だ話術に少し眼を細め

西田艸樂

情慾を的にカフエのスローガン
反對を唱へて少し酒が呑め
腕まくりしてビフテキにかぶりつく
二月も經てば新婦が先を行き
レモンティ奢つて高慢痴氣な男居る

阿部閑生

天瓜粉父は流離の旅にあり
雀飲みにくる水滿たしおく
直角に逢ふて別れる炎天下

大掃除西瓜も食ふて日のこり　生田翠夢

貰ひ子の犬をこわがる癖とれず

罵つてさて我身をばふりかへり

奥様の型にはまらぬ妻の齡　福田山雨樓

心中の意氣もあるなり戀ざんげ

海水につかり恩讎なかりける

夕ざれば蜻蛉の戀が流れ來る

波を呑んだ子の鼻汁をいとしがり　永田里十九

退屈は足音等もなつかしく

退屈さ今日は金魚屋ひやかそう　春元紀太

白濱にて

黒汐のどつか男の匂ひする

マッチの灯風に取られて夕涼み　橋本綠雨

綠蔭の籐椅子二つ日があたり

さゝやきに夏の暑さを忘れてゐ

○　吉田水車

うれしさの寫眞扇を持ちそへる

何うするつもりお嬢さんの三味線

コップ一つに二三人動き

汽船今泳ぎついたる姿なり

ヂヤズバンド木魚のやうな音もさせ

御神輿も待たされてゐる交叉點

藝妓今待機姿勢のまゝ涼み　國澤春水

坊さんも醫者も產婆も有り餘り

皿ばかり洗ひ女はつまらなし

憂鬱へアスパラガスの澄ましやう

青春の表情がある街の辻

四ツ這ひになる百姓を嗤ふまじ

撲られて居れば牛馬の出る力

鉦打つてさて坊さんは肥へてゐる　喜多春秋

禮を云へば皮肉になるしむつかしい

玄關子言外の意をとりすぎる
若さの美だけの妹二十一
夫の無口だまつて愛してゐてくれる
臨月の自分の腹へ眼を落し

病める明珠さんを御見舞に行つて

病人の無理に笑ふてくれるやう

渡邊曉童

父等の鯛網不漁

網元のだまつた鼻が太いなり
ふたありが笑ふ子の事親の事
兒が泣いて暑さます〳〵暑いです
妹がおごるといふをついて出る
暑さとは別に女房近く座し
父さんがないできつうに子を叱り

西村明珠

合槌をうつて看護をしてくれる
夏羽織行儀作法もつらいなり
失業に時は金なりとはむごし
泣く人もなく出てしもた高架驛
養生に來たとは見せぬ海水着
時計屋の小僧時計の音で寢る

平井與三郎

娼婦から貰つたバツトが折れてゐた
吉原へ上る五人の僞名なり

女相撲見る

手踊りのしなよい力士弱いこと
あさあさのくちづけめがねはづすつま
さもしさは夢で女にみつがれる

市塲沒食子

見どころがあ我儘を許しとき
冷淡な筈肉身の愛にうゑ
儲りもせぬ注文が殺到し
蔭口に諂ひに君は軍師だね
方便で嘘つく事を父知らず

須崎豆秋

自轉車の丁稚が蛤門を拔け
火葬塲は火をつけてから夕涼み
兒が追へば鳩は歩るいて逃げるなり
同期生中尉や高利貸になり

遊女屋の物干よその唄をきゝ　大鶴喜由

君の手腕にまつと云はれてむすがゆし
子澤山勝手に孕むやうに云ふ
今日中に賣らねば腐る掛値なゝ
僞角帽にふみにじられた虚榮　荒井英賀夫

貧乏を朝寢のせいにして笑ひ
多情とやつまりお金がしからしめ
泣落しだけが貧しい味方です
押しの手でどこでも通す金を持ち　後藤青兒

赤玉の眞晝の裏の無表情
大株の前に手相も店を出し
人情味持つて來るのは路地の風
犬引いて今日の暑さを捨に出る　竹内機見女

多感なる肌をころものうすくして
あけはなしの心におされ目をそらし

空襲も知らずましろきビルの夢
あらしの比叡にて
傘すてゝ山のこゝろにしたがひぬ　日野華水

云ひぬけの巧い男と知りながら
背中の蚊を妻に叩たかせる
はたきの首がぬけたとて妻笑ひ
露路ぬけて鼻の頭の汗をふき　廣江天痴人

街角を曲り夕陽にぶちあたり
恭に強くビールに強く分會長
五月長女ひろみ生る
農繁期とは申さずに抱いてやろ
塗りたての畦が光つて藤の花　路郎師へ

御沙汰は土方になつてをりました　江戸みつる

或る男と女
眞夜中に獸の如く二人居る

滿洲に住んで

大阪はよろしおまんな南地の灯

祝翠夢兄結婚

紅のハギレも出來しこの頃よ　熊谷紅

お姉様へ

たゞ母をよろしく頼むばかりなり

お迎ひを待たせて女醫のコンパクト

神主も浴衣に成つた涼臺　中澤濁水

桃割に結ふて看護婦笑せる

ドライブの姿も醉つたウイスキー

ちよいとした事から女見返らず

暑いこと一雨欲しい電話口　尼絲之助

お花の安さ農民が目に迫る

ようやくにローマンス斷片的となり

一と坪の庭とて風を呼ぶのなり　石曾根民郎

リーダーの聲に雷鳥飛びあがる

偃松に穂高のかげがおちて來た

おしろいのやゝおちついて上高地　梶谷巷二

灯を下げてこの人生を涙ぐみ

醉顏へころがつて來た枇杷の種

新人と云はれて遊ぶ金を持ち　首藤竹楓

戀心窓のあかりを消して見つ

夕空へ仔牛いそ〳〵ついて行く

沈默を續け女は勝つつもり　毛利九波

カツトグラスにさてもユーモラスな鼻よ

生活のための棒紅が折れる

白皙の微笑をもれしニヒリズム　大西八歩

ひやかしの煽いで逃げる扇店

幸福に浸り切つてゐる爪掃除

善人のまたも豫定が延びるなり　奥野禿山

不成功あんまり世事に通じ過ぎ

救はれて見越しの松にあきたらず
木綿着の糊に貞操見付けられ　宮岡白峯

行商の儲けそこねた生ビル
一律に人絹の街夏の街　北川あや美

これ切りの戀か空虛の夕まぐれ
悼綠雨氏御令閨
思出は編輯の日の酒の味　眞田幸捐

バルコニー異人の子供水をやり
起されて十六時間働く身　石丸春峰

氷水のんで白粉つけ直し
何と云ふ淋びしい氣持灯が消えた　丘遊舟

テロリストの悲しき心我れは知る
電線と綠が續く田舍道　近藤勇

粒々集

鎌倉　富士野鞍馬

連込はしばし緋鯉を見てだまり
末席へ女中同情したお酌

値切つてる關西辯は見くびられ
夕立に待つてましたのレンコート

一壘へ手おくれといふ球が飛び
「暨」は理窟に合はぬ太刀を拔き

御影　長崎柳秀

バアーへ往く若さを妻にからかはれ
つゝかけの下駄で呼んでる冷や奴

わだかまる心へ重い夏薄團
惚れて居る弱味女の物も提げ

嫁き遲れこれぢやと思ふ座りやう
年甲斐もないとは酒のことであり

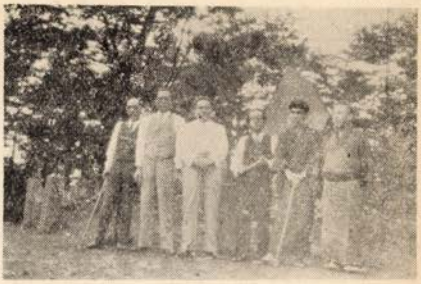
肉買うて戻る約束妻若し

舞鶴　安川久流美

夕刊を懷ろに子の巢へ歸る
朧昆布・遲刻せぬ兒と對ひ

滿腹の帶をゆるめつ蠅叩く
幽齋の詩など思つて夕餉哉

坊主にも成れず久しきペンの錆



春雪食思

正岡蓉

――ことしの晩春の日記をみる。――曰く、

『沈丁花咲き、素袍櫻も庭ざくらも山吹も飴桃も源平桃も、小庵の樹々はれぐ蕾も含らませてゐるのに、けさは雪』

春の雪は消ぬがに降るべき風情なのを、けふのは霏々と小止みなくふる。――正に、萬延元年元巳以來……と云ふやつである。

こんな日にはさしづめ、鍋ものが好ましく、貧しい厨にも青葱があるから、一と皿なにがしのあらでも購ひ求めて、ごく、さつかけなく、ぐづ〳〵煮てみやうかとかんがへてゐる。

配ずるに寒さを凌ぐ茶碗酒……もよいけれど、このごろ、自分は、餘り我が家では親しい友だちでも來ないとのみ度いとおもはない。

うちのものがお酒を嗜まぬので、よく〳〵でないと、ひとりのんでも、ほんとうは美味しくないのである。――そして、このことは、お酒のすきな自分にとつては、ちよつと不幸ではあるとおもつてゐる。

……昔、細長い都々一の本をもつてゐた。開板年月が誌されてゐなかつたが、弘化邊りのものらしく、その口繪に雪だるまのわきに丁稚がゐて、だるまの上には鰒と葱とがおかれてあつた。

その繪の鰒への食慾を、さればいまも忘れかねて雪がふるとつくゞ〳〵おもふ。――こう云ふ構圖はどうしても江戸らしいが、而し、この本、版元は浪華だ。最も例の四月に鰒をくらつて死ぬ『らくだ』が、もと〳〵大阪顚であることをおもへば、何も雪だから、鰒だからとて、木堰邊りのしようさい風景に獨專しちまふ手はないのであらう。それには

〽橋の下には鷗が來やる、木津や難波の橋の下……と舊い、哀しいおゝさかの子守唄は、こうして江戸と同じく並藏の多い河岸のしゞまをもおしへてくれるのだから――。

――序にたべもののことは餘談になるが、この本には

〽拙者　この土に用事はないが
　　お顏みたさにまかり越す

と云ふのがあつた。――いかにも故しん生の『捧だら』や、桂圓枝の『口合茶屋』へでさうな勤番侍の口吻がうかゞへておかしい。

――ほんとうに『餘談』であるが……』

で――と、本文に引返さう。

この間うち、ひどい醬油に惱まされた。

にがい。惡辛い。えがらつぽい。

いつもと同じのを購つたのだが、極底なのか、アミノ酸をなめてるやうにいたましくつて、三ど〳〵の食事が文字通り苦痛になつた。

貧棒の、いまよりずつとはげしかつたころ、二週間も砂糖が求められず、醬油許りでくらしたゝき、つくゞ〳〵、あまい味を戀々としたが今度はあのときどころの苦痛ではなかつた。全くすべてのあぢを支配する醬油がわるくては、人間、ことごとくみじめである。

で、とう〳〵、勿體ないが半分以上を棄てゝ了つて、別の佳き醬油と代へた晩、自分は嘘もかくしもなくゆめにも忘れ得ぬ戀びとにでもめぐりあつたほど、うれしく、欣ばしく。雀躍した、さうしてこののちはいかなるときも醬油丈けは必ず佳きものを

えらぶ可しと今さら、こゝろに約束した。

——殺人燒酒、殺人日本酒のやう、かくては殺人醬油と云ふものも、世の中にはあるのではなからうか。

——所で、自分なぞことしからまた高座と文筆の二足わらぢだから、成可、時間を有効につかつて、あそぶときは、大いに近郊の旅へでて、英氣をやしなひ度い所存だ。

片桐千春とでもまた武州飯能の春にあそんで、東雲亭で、暮春の野のもの、山のものに親しみ度い。

たんぽゝの花のおひたしに——名栗川の鰻も、これからは美味しくならう。鰍のあぢも、飯能は、ぼくを、こよなき樂しみにさそつてくれる。

——さて春の雪は未だ熄まない。

『抱きしめて逢ふ夜は雪のつもりけり』

と云ふ憎い句がたしか泉鏡花にあつたが、あんな境地もしみ〴〵戀しい。

ぼくにも、雪ふれば鰒のやう、切々とおもふ女優くづれの、酒場をんなの人妻がひとり丈けはあることをかゝせてもらつて筆をすてやう。

雪は——春の雪は、未だ熄まないできれ〴〵にふる。今夜はよほど、つもるであらう。

——さて、どうして季はづれのゲンコーをあへてかいたか。

6月朔日は、古川柳に

御献上　富士さへ蒼くみえるころ

とある。

卽ち、加賀さまから冬ぢう貯へた氷をば公方さまへ献上

のこりは、加賀鳥の手で、ちかくの町人たちへ配られた。

それをおもひ、これをおもへば、9夏3伏、あへて、たゆたな春の雪をしるした。これの小片も、一服淸涼のたつきとなるであらうかと、あへて爾云。

（カット寫眞、向つて右より）
（二人目が筆者正岡寛氏より）

富士山の涼味

—SABURO—

●この七月二十一日の午後五時十五分大阪驛を出發、同二十四日午前六時二十七分大阪驛歸着。富士山を這ひ登つて來た。

●一行六人何れも初登山、足弱を相手へ川柳家は僕一人なので、一合目から愼重な足どり。追ひ越した中學生などは龜のやうだと冷やかしてゐた。

●大宮口から登つて御殿場口へ下つたのであるが、自動車を乘り捨てゝから、頂上迄約十二時間かゝつてゐた。五合目で驟雨に逢ひ恰度一時間晝寢をする。六合目に着く少し前から山が荒れだして凄い風と深い霧が行路を阻む。土用こんなに荒れることは珍らしいです。今年は女學生が澤山登るせいでせう。とは强力の話。

●せめて六合目から七合目迄の間風はいよ〳〵きつくなつて横なぐりに身體を衝つ。眼鏡はすぐ曇つて見えなくなるので ポケットに收めた。頰冠りした頭から凍つてくるやうに寒氣が迫る。ふと眼を外らせば山のスロープはこぼれ刄のやうに鋭く、脚下にそゝり立つてゐた。

●やつと七合目にたどり着いて、石室に宿ることになつたときには全く救はれた やうな氣がした。寒いのでずぐ着のみ着のまゝ布團にくるまつて寢る。恰度午後の一時頃であつたが十疊ほどの一室に三十人ばかり詰合ふので、身動きも出來なかつた。この晩七合目に宿つたものは約百五十人 人の身體の溫りで寒氣を忘れ、富士山の懷に抱かれて寢たが蚤の襲來には惱まされた。

●寢苦しい一夜が明けた。天候を氣遣ひ雨戸を繰つて若者が騷ぐ。どうもよくないらしい。やつと石室で冬シャツを求めて着込み、之れに勇氣を得頂上目指して 七合目を出發したのは午前五時半頃。

●八合目から九合目、九合五勺、と登るに從つて風はいよ〳〵强くなる。不意に身體を押し倒すやうな烈風が來て冷ツとして 岩にしがみついたことは一再でなかつた。岩屋毎で葛湯やうどんで腹を溫め、愈々最後のゴールに入るべく、九合五勺を後にしたときには思はず胴ぶるひを覺えた みんなの唇は紫色に變じて顏色もなかつた。

●物凄い烈風をつきぬけて、やつと頂上に跳り上つたときは嬉しさの餘り、富嶽征服の兩手を高くさし上げたが、內心では富士山の脅威におのゝき、靈山の前にひれふしてゐた

●劇しい山の荒れにお鉢廻りは危險で到底出來ないので、淺間神社の奧宮に詣で名物の甘酒に舌鼓を持つて、直ちに下山に向つた。下るに從つて天候も恢復し、今迄十間先も見えなかつた眼界が次第に擴大されて、八合目あたりから下界の沼津海岸・愛鷹山、伊豆半島、箱根山の展望がきくやうになつたときには思はず快哉を叫んだ。そしてこのときほど雄大な景に打たれたことはなかつた それも瞬間にして霧が遮ぎつたが、晴間々々立止つて讃嘆の聲を放つた。

●一瀉千里の砂走りに快味を滿喫して、自動車乘場の太郎坊へ下つたときには、大阪と同じやうに陽はカン〳〵輝いてゐた。みんなの顏は赤黑く染まつてゐた。御殿場に着いて宿の風呂やあびビールの滿をひき乍ら 女中にからかつてゐる時分には、もう俗人に還つてゐた。

●茲で雅號に山の字の付いた川柳家諸氏に特に敬意を表する——手近な 雜誌から調べたので脫漏の點は寬容乞ふ。

大阪の山月、禿山、元山、喜山、阜山、靜山、山彥、山抱子、白山坊、檗山人。京都の二山雨山、容山、芙山、山草。神戸の霞山、山都。東京の塵山、壽山、奇山、元の山門。名古屋の朝山、一山、よし山。高知の柿山青山。福知山の杉山、雄山。大分の勝山、龍山。布哇の山石、翠山。丹波の畑山。北海道の鼻山。鳥取の潮山。岡山の鴻山。萩の素山。金澤の山艸人、赤崎の景山。博多の一人山。大連の滿山の諸氏。

夏の論陣

S・U・R

アンデパンダン

▽……頃日、大朝評壇アンデパンダンは仲々活氣を呈してゐる。曰く、大衆小說と藝術小說の問題、大森氏漫畫論の駁論、短歌論等々何れも川柳家の關心を呼ばぬものはない。しかもあの形式が一脈の涼味を湛えてゐる。

▽……之れは五百字で盡すからだ。賛否が明白なからだ。川柳式なのだ。

▽……川柳家は簡潔を尊ぶ。文章、言葉 用談みな然り。川柳家は果敢を喜ぶ。常往臥坐自ら敏。即ちわが國民性に觸るゝ所が多い。このこつでゆけば川柳の浸潤普及は期して待つべしだ。

川柳組し易し

▽……「川柳はりに」に町二創作評を稿す。鄉友喋郎を評して「氏は氏の眺めた對象が餘りにも容易に句に表現出來ることに馴れてしまつて「川柳組し易し」と思つてゐられるのではないか」と急所を刺してゐる。

▽……だが當の町二も「川柳組し易し」「川柳家亦組し易し」と早合點してゐるのではないか。そしてこの早合點に對する警告こそオール川柳家に向つて深き省察を要求してゐるのではないか。

▽……それのみではない。世間が、大衆が、近代人がこの早合點をきめ込んでゐる事實を匡正せなければならぬことを氣付くべきである。煽風機を知つてアイスクリームを知らぬ人達に、その饗宴を與へるやうに。

課題吟の將來性

▽……「番傘」の雲雀「課題吟の將來性」を論じ「我共が朝に課題吟を作り夕に主觀川柳を作りつゝあると云ふ現狀の矛盾を如何にして解決せんとするか。これは次に殘された大きな問題であらう」と眞劍な吐息を洩らしてゐる

▽……課題吟は凡そ三つの必然性をもつて生れたものである。作句修練上の方便、競吟を意圖する興味的要求、句會制度に隨伴する傳習即ち之れであるそしてこれらは將來繰返さずにはおらぬ有機性を持つ。

▽……課題吟が卑下しない考え方から川柳は言葉の適中性或ひは辛刺性をねらふものである。そこで前句付や課題吟が川柳から捨てられないのは、寧ろ川柳の本質が背負つた宿命であるのだとも云へやう。

柳誌月評家

▽ 三太郎筆「きやり」の「柳誌月評」は七月號に至つてうどんが延びた。あれでは紋太を初めふあすとの同人を喜ばす爲めに書いた感がある。筆者らしくないお上手がある。好意の紹介に力が入り過ぎてゐる。

▽……これまでの内「番傘」二月號を讀んだ——商品を意圖せる川柳雜誌の

編輯機構――には嚴正な態度が見え、「みちのく」と「くろかね」を語る――更に一つの十字架――には同情の眼なざしがあり、「たまむし」四月號を讀んだ――君知るや君の情熱　には激勵の辭が贈られ、「ふあうすと」六月號を手にして――なつかしの神戸よ――には感傷の陶醉がある。

▽……そこで、この次剛勇三太郎をして語らしめるのは、果してどう云ふ態度か見ものであるがこの上生溫るいもの、骨拔きのものが出ぬやう、飽くまで峻嚴冷徹を期待する。三太郎は柳誌月評家としても大きな存在であるから見るがいゝ。碧梧桐ほどのものが棒を折つたのだ。短歌などのお先棒をかつぐことは止したがよからう。

▽……國夫あたりの急先鋒は一體本氣であんな句を作つてゐるのか、それで寂しくないのか聞きたい位だ。歴史ある「川柳人」今日の傾向にはほんとに自信があるのかね。餅でも固くなつてしまつちゃ喰へないからねえ。

「川柳人」の自由律傾向

▽……「川柳人」の鶴彬「定型律形式及び圖式主義への闘爭」と題し大きな見榮を切つてゐるが、あんな空威張りの百萬言を聞いたとて、定型律の優越を信ずるものにとつては一顧の價値もない。佛教信者に大本教を強ひるやうなものだ。

▽……自由律が是なら先づ劍花坊を動かして見るがいゝ。それとも井泉水や一碧樓見たいに二十年も地道にやつて

川柳プロフエッショナル

▽「芥子粒」で伊藤瑤天　川柳プロフエッショナル出でよ、と叫ぶ。之は贊成だ。俳壇、歌壇、短詩壇にプロフエッショナルがゐる以上柳壇にそれがゐないことは非常に淋しいし、川柳の發展進歩向上を期する上において遺憾の點が多いことは確かだ。

▽……しかし「川柳で食ふ」と云ふことと「食ふたけはある川柳家」とはわけが違ふ。後者の方ならかなりある。あつても餘暇にやつてる川柳家の努力に及ばぬものが多い。

▽……川柳專門家から衣食住の心配を奪ふことによつて、一層その靈率貢献が望まれる場合は誠に結構で、是非その實現化を計らなければならぬが、遊藝師匠見たいな職業川柳家を拵らへることは御免蒙る。そしてそこのところのけじめは實際上儘定至難ではないかと思ふ。結局川柳家の總意と時の力に待たなければ解決の出來ぬ問題に落着。

柳壇はどこへ行く

▽……「ふあうすと」で睡花は――川柳作家である私の告白――として川柳の定義其の他について述べてゐる。定義をきめることは惡くはないが滿足をうることは至難だ。大まかな定義ならなくもがなであるし、あまり細かいと窮屈である。定義がないから俳句と混同すると云ふ心配は捉はれてゐる。要は微妙な差なのだ。自得さへすればそれで大した差支えのない問題だ。

▽……該稿は未完のものであるが、自由律の出現が川柳の將來を危くすると云ふ杞憂が若しあるのならば、さう云ふ心配は捨て給えと云ひたい。自由律が放縱律になりすぐ飽いてくることは少しく長い眼をもつて眺めてゐるならば、わけなく見付かる事實なのだ。川柳が死に瀕してゐるなんて哀れな川柳觀は、大した神經衰弱だ。

××陀羅尼助其の他××——成書を正す

地黄

廢姓外骨著「川柳語彙」中、地黄丸の條

ア、腎が少い哉と地黄丸

「とは狂句であるが、補腎藥として天地玄黄の地黄丸と名づけた理由は不明」とある。

名づけた理由が不明なら。いゝ加減な想像はせぬがよい。地黄丸は天地玄黄から來たものでなく、又何の關りもない。理由はかう云ふ譯である。

地黄は一名サヲヒメ Rehmannia glutinosa といふ植物であるゴマノハグサ科、心臟藥としての貴重デギタリスと同科である支那が原産で我國でも藥種として栽培されてゐる。

地黄の名の起りは、本草綱目に「生の者を水を以て浸し之を驗するに浮ぶ者を天黄と名け、半浮半沈の者を人黄と名け、沈む者を地黄と名く、藥に入るには沈む者を佳とし」云々

地黄は現在ではあまり重用されぬ藥種であるが、昔は補血强壯劑として地黄丸、六味丸、地黄煎飴などで末摘の畑では可成お馴染深いもの。

地黄のむうち間男出來るなり

など、賢虚藥としての句は公表をはゞかるもの多々。

神の鉾豆腐と地黄ばかり切り

は地黄煎飴に關する句で、神の鉾は豆腐切庖丁の樣な眞鍮製の鉾である。

大黄

西原柳雨著「川柳風俗志」生藥屋附藥品の條、

大黄は腹の掃除の草箒

なる句に「虫下し」の註が附してあるのは博學柳雨翁にも專門的の事にはかうした誤ちがあるのは無理もない事である。

大黄は虫下しにはならない。下劑に用ふ。狂句であるが

大わうは降らぬ奴をせめてゐる

の如く、大王と大黄、下しと降參の秀句。虫下しでなく、瀉下劑である。尤も驅虫劑に配して便通をよくし主藥の効を速かにする目的には使はれるが、蛔虫、蟯虫等の寄生虫に奏効するものではない。

大黄 Rhiyoma Rhei 蓼科の植物 Rheum officinalis 及 Rheum Palmatum. 和大黄といふ本邦産のは俗に「ぎしぎし」と呼ばれてゐる草である。

陀羅助

これも「川柳風俗志」中陀羅尼助の條に

略して陀羅助といふ苦い氣附藥を賣り來る本家は吉野にて、

僧の陀羅尼經を誦する時、嘗めて睡魔を拂ふ爲に、吉野大峯に生ずる百草を集めて調製せられたものとある、とて

陀羅助は腹よりは先づ　顏　に　き　ゝ

の句を擧げてゐる。

が、陀羅助は氣附ばかりでなく、例句の如く腹痛に服む藥で頗る苦い。これは黃柏エキスとして販賣されてゐるものと同一のもので、黃蘗 Phellodendron amurenae なる芸香科の植物で、その皮をキハダといつて打身に貼附したり、煎じて眼病の洗藥にしたり民間に多く使はれるもの、陀羅尼川はその皮の煎汁を煮つめて越斯にしたものである。大和洞川から多く出る。

食はず芋

これは今年の弘法大師千百年遠忌に因んで藤里好古氏の川柳天神緣起にならひ、川柳弘法大師を書くつもりで少し誓見をしたがあまりつまらぬ句ばかりで、書き上げる氣になれなかつたが、松村範三氏著の「川柳日本俗說史」の中に

末世迄弘　法　芋　の　い　し　が　へ　し

他數句、弘法大師食はず芋の句が載せてあり「丸芋忽ち石芋となる。石にして返したはひどい意趣がへし」といつた風に數句にそれ〳〵諧謔の文字をもつて註を附してあるは面白いが、元來丸芋なるものは何であるか。

石芋とも、くわずいもとも云はれてゐる。天南星科の植物で Alocasia ma rorrhiza なるものの事で、さといもに酷似してゐるが食用にされず、觀賞用に鉢植などにされてゐる。傳說には弘法大師が東北巡禮の砌、上野國世良田村に於て百姓が里芋を洗ふのを見て、一つ呉れと乞はれた處、百姓は惜んで呉れなかつたから眞言秘密の法で忽ち石芋に化し、一生此村では里芋を封じられたといふのである。

ま　く　り

生れ子は乳のにせ首しやぶつてゐ
まくりから飲みはじめたる江戸の水

「川柳風俗志」の此の條に、海仁草といふ海草を紅絹の布片にて包みたるもの昔は下毒劑とて必ず產兒に飲ませたりとある

昔でない今でもほとんど、二三日右の樣にしてまくりを飲ます習慣が去らない。

和漢三才圖繪には、小兒初生三日中先用海人草、甘草二味或加蕗根包帛浸湯令吃之、呼曰甜物、此方不知始於何時、本朝通俗必要之藥也。吞之兒吐涎沫謂之吐穢汁。可以去膈上胎毒云々とあり。毒を下すにあらず口から吐かすものとされてあつた。又初生兒の蟲下しと誤られてゐる。海人草(漢名鬼箭羽藥) Digenea Simplex は貴重な蛔蟲驅除劑として現在盛に用ふるが、初生兒に蛔蟲はなく、下毒劑としての効果はない。習慣は強いもので、此の誤た法が日本人には今後百年經つも止むまい。

——西田艸樂

胃袋公開

アペタイトの減少する今日此頃「このはがきをうけとつた直前の食事に何を喰べたか」と同人諸君に聞いて見ました。（編輯局）

春元紀太

朝食をしながら、此の葉書を讀みました。それで只今、胃にあるものは、牛乳約五勺、食パン半切です。

尼　緑之助

食パン　金五錢

何十年振りだとかいふ旱魃に雨を待つてゐる村　そこの村役場の一室、どんより曇つて風が吹き遠慮なく進入して來る七月の砂ぼこり。此處では床次さんの轉向問題に泡が飛んでゐたのである。

中澤濁水

「もし〳〵、昨日寄宿舍から貰つた晝の料理は何でしたかナア。たしかコンニヤクの切れが二筋……」舍監近藤女史「まあ、靜に仰つしやい。それがどうしたんです」葉書を示す「おや〳〵とんだ事に成つちまつたわ、おとと日の西洋料理を書いてお出しなさいネ、外聞がわるいわ」「いけない、直前食だエーと、ジヤガ芋が大部分を占めてゐたやうだが、蓋に壓迫されて、ぐじや〳〵になつてゐたし、おまけに、取つた拍子に汁が机にこぼれて、給仕に笑はれたので、應變の處置を執り、一方新漬の胡瓜（眞二つの二切れ）にその汁を配分したのは覺えてゐるが……さう〳〵夢のやうな鷄肉が三切れ、いんげ

んの鞘豆が二振だけだつたね、此の料理法の名は抑々如何」「野菜の煮付と申しますハイ、そんな事書くのは止して頂戴。わたしの恥ばかりでなく高知縣女子師範の面目に拘りますの、前から判つてたら先生には特高貴品を差上げましたのに」「イヤ、過ぎたるは及ばざるが如しです。その代り今日のお晝に一本添へて下さい。」「かしこまりました」

熊谷紅

七月十日晝食の献立

一、茄子の油煮（丸茄子、胡麻油、煮汁）
一、卸し大根（大根、鰹節、醤油、味の素）
一、鹽鮭（鮭、味淋）
一、佃煮手製（鹽昆布、ちりめん雜魚）
一、米飯

石會根民郎

麥飯も豆腐汁も、朝のせいか舌にすべらかい。近所のラヂオ體操がもれてきた。おやぢの蔬菜をおふくろが調理する。ミツバのひたしもの、すつきりとして齒もにほふ。カチ〳〵！何だと外を見たらアスファルトを歩く登山者だ。これは胡瓜もみ、それは茄子のしそ和へ。

平井與三郎

「いらしやい。なにすんの」
「僕のランチ」
「ミルクの生溫いのと、プリンね」
「そう」
「あんた何故、生溫いのか飲まないの」
「榮養價が多いからさ」
「そいでとても痩せてんのね」
「へーんだ。だから肥えようとしてゐるんだよ」
「あとはボイルドエツグね。あんた晝これでもつの」
「食ひたくないんだよ。半熟にしてね」

八重べがボレロのレコードを捜してゐるらしい。二三度、ボレロをかけてくれと云つたら、僕の顔をみると、ボレロをかけて呉れる。

西村明珠

七月十一日　朝食　午前六時
溫く飯（一）　茶漬飯（一）　生卵（一）
鰹節（けづつたもの少々）　願もどき（半切れ）

麻生路郎

阿倍野橋の富士屋の二階で晩めしを喰べた。煽風機があるが廻轉させる必要更になしといふ涼しさだ。客がたて込んでゐないのも涼しい。亂耽クンが「ビールどうだす」と云つて僕の顔を見るそして二人で一本だけ飲むことにした同人會へ出席する前だつたので一寸遠慮した譯。僕の健康を思つて、亂耽クンがオムレツとテキとを註文した。テキは云うまでもなく亂耽クンの好物ー尤もスエヒロのテキでなければいけないんだが、今はそんな贅澤を云つてゐる時間でない。加ふるにライス二人前飯は十五錢のう卷で喰べた。何等奇も

ない晩めしが濟んだので天王寺公園内十三軒で開催の同人會に臨んだ。七月十一日の夕のことである。

阿部閑生

讀み物も食べ物も年につれて範圍が狹なつてゆく、この日のお晝は腰掛けで慕の内、西瓜、それつきり。

朝田新水

書の献立＝鮒刺身、鬪東煮三色、蒟蒻天ぷら、馬鈴署、鹽鮭の燒物、味附海苔、とろゝ昆布、山椒佃煮、鹽昆布、漬物二種(大根、胡瓜)

書喰べた物を考へて大げさに献立として書きならべると實に驚く。これだけの物を喰つたのである。榮養が片方にかたむいて居るかも知れない。併し我が家で野菜が穫れるとこんな料理を考へるのだらう。漬物用の大根、胡瓜、馬鈴署は買はない。味附海苔は東京のお土産、佃煮や鹽昆布は家で煮る。看類のみ買うのである。

奥野禿山

同人句會散會後ヒールで腹は膨れましたが物足らぬので函壽司を喰べました。

竹内機見女

當番だと云ふので、十二時に十五分前に食堂に入る。ガランとした食堂！この日女子席では私がトツプを切つてゐた。

赤いまるいお辨當がずらつと並んでゐる中の一つの席につく。おかずは何かしら？これは毎日の小さなたのしみの一つなのである。獻立表が有るにかゝわらず一寸も見ないのはかうしたよろこびを味はひたいからだ。そつとのぞくとほのかな香ひと共に眼にうつつたのは親子丼だつた。何時もの例として御飯にかけてない親子丼だ。御飯は相當暖いが汁はすでにさめてゐるのでかけて食べる勇氣がない。鶏肉と云つても細かい切端だし分量は少いし、女でさへも情けなくなる。おとなりのを一寸失けいするかなとさもしい事を想ふても見る。——そんなのが時折はあると何時か賄の小父さんがこぼしてゐた。——汗になつた顔を生暖かい御飯の湯氣がかすめる。せまくても皆と肩をならべての食事がおいしいなと思ひ乍ら、あつけなく御飯がすんだ。時に三分前。

おかずの不平を云つても、これが月二圓八十錢の日生ランチなのだから仕方がない。汗をふき乍ら階段を登つてゆくと氣の早やい友の一人に會ふ「今日はなあに」「親子丼」「へーン」うれしいのかいやなのかさつぱり分らない返事をしてかけおりて行つた。

梶谷巷二

愚生は夏は食慾がないのであつさりしたものが好きだ。宍道湖で取れる「しじみ」を貝のまゝ味噌汁にする。これに青ねぎを小さく切つてそへる。尙この貝を松江の人の賣り聲が「しじめ」と聞へると良く他國の人が笑うそうだ。

姫田夕鐘

さし向ひのちつぽけな三味形の膳に

誂向の好物ばかり鯛の鹽燒に八幡卷にきも吸あつさりは瓜とおこうこのきざみと京のからし漬とおいでなすつた。安物の殿樣のような馳走にありつき、夕餉はいつも一時間もかゝるが新妻は時折は三味でサービスをしてくれる。

喜多春秋

毎日三度々々の總菜に困る女たち「朝は何處でもお漬物です」と子供は叱られる。それで茄子漬に胡瓜漬、海苔の佃煮に昨夜の殘り馬鈴薯。

中島鐵洲

十一日(七時)朝食　天候、雨氣近づく溫度三十度、味付海苔、なすの早漬、以上茶漬で一碗をかき込む。食慾不進わかもと服用。

須崎豆秋

うだるやうな暑さだ。

上服を抱へてT百貨店のグリル食堂へ下りた。こゝは自慢の冷房裝置でお客さん滿員だが、食べてる人よりいい氣分になつて冷氣を樂しんでゐる人の方が多い。私も別に食慾は無かつたのでビールを一杯もらつて、しばらく涼まして貰ふことにした。ビール一杯也で餘り不足を云つてゐたら怒られるかもしれんが、扇一つ動かぬこの冷房といふやつは、しばらくすると陰性な氣分になつてくる。私は野蠻人だからやはり少々暑くても煽風機が首を振つたりビールの泡が飛んだりする方が盛夏らしい感じがしていい。

三十分も涼まして貰つたので財布までが冷めたくなつてゐる。冷めたい銀貨をつまんでレヂスターへわたして又炎熱地獄の街頭へ首を突き出した。

明石柳次

晝食　ライスカレー、氷西瓜計三十錢人一倍肥えてゐて一日着物で得意廻りしなければならない自分はせい〳〵冷房裝置のあるとこで晝は腰を下ろすことにしてゐます。煙草の喫えない食堂は大禁物です。

市塲沒食子

空梅雨の暑さに惱まされて少々ばかり、胃腸を痛めてゐます。それでなくとも勤め人の誰れでもが味ふ事だらうと思ひますが、毎日の晝飯(辨當)には全く困ります。本日(七月十日)も下腹が痛むので片栗でもと思ひましたが定石通り安物の辨當にしました。蜆の味噌汁に、胡瓜と茄子の漬物です「何んだいこんなもの毎朝啜つていらア」と早速小使に何んなと副食物を貰つて來る樣に辨當屋へ走らせましたら、あんべいと、さんど豆の煮たのを持つて來ました。此の代價金拾五錢也歸宅して斯んな棄書が舞ひ込んでると知つてゐたら阪急でランチでも喰べておくのだつたに。

福田山雨樓

晝食——おむれつ、トマト、昆布卷、香の物二切でした。定食十四錢です。この仕出しをしてゐる食堂の主人と云ふのは永らく鐵道の飯を食つた人ですが先年過つて列車に觸れ横死しました辨當の入れ物が十年一日の如く變らないので、時々その主人の童顏を思ひ浮

べます。——合掌

日野華水

今朝の食事は日本人特有（尤も今朝ばかりに限らないのだが）のお茶漬がさがさ。居候ならざる僕は立派に三杯頂戴した。その副食物（一寸大きく云つて）は漬物だ、その種類はお茄子と青瓜と胡瓜とだ。その量は細かく切つてあつたから覺えぬ。こんな奏書が來ると分つて居たら數へて戴いた事だらうに、お茶は夏季とあつて麥茶、御飯は麥と白米との混合物。これでビターミンは確かに多量、脚氣の愁なし。右の諸物が今僕の腹の中に收まつて居ると思へば一寸面白くも感じられる。

生田翠夢

七月十日の晝食

昨日の生國魂の御祭の殘りの赤飯を母が勿體ないと云つて、强いお粥にした主食に、副食物ときては、純然と殘りの燒直しの鰻と赤魚の煮付、但しトマトは新らしい。漬物ときては同業園角氏の天下一品の札付の茄子の淺漬。一寸乙ぢやありませんか。

眞田幸捐

朝食はリヤカーを操じゆうして神戸中央卸賣市場へ二里約八分の後、簡易食堂で食べて居ります。金十五錢也、朝鮮米の御飯、味噌汁（豆腐、のり、三ッ葉、かまぼこ）玉子燒の各五錢宛參點で榮養もあり其日の活動の源泉となつて居ります。

水谷鮎美

無雜作な幸福にひたつてゐる小生にはこん度のお訊ねはほんとうにうれしく思はれました。その日の晝食をおもひ出しませう。

ライスカレー一皿（カロリー性に富む現代色調の濃きもの）

トマト一皿（このごろの娘さんはリンゴの頰でなくてトマトの頰に成つてしまつた）

金二十錢也の傳票を記して社の食堂のテーブルにゐて窓硝子にうつる六甲山脈の美しい雲脚と人生をみてゐたことがはつきりうかんできました。（一九三四・七・一〇西宮食堂にて）

東谷聞路

鰻の子と小粒小芋の煮附の冷したのに柚をかけたもの……これは夏の食膳で私を嬉ばすものの一つです。

尙胡瓜のザク〳〵と茶漬には茄子の淺漬と暑さ負けせぬ樣申年の梅干。

廣江天痴人

馬鈴薯の鹽辛煮、梅干一個、大根漬。

近頃は一日二食主義を實行しつゝあり右の料理（？）も昨日の午後六時に食つたものであります。頭は少しはつきりしましたが肉體はフラ〳〵しとります

吉田水車

左樣です、ハガキを見た直前と言へば少々腹具合をいためて、あはれにもオムレツと生パン、それに溫いコーヒ、しかも窓外は折柄の雨に煙る姫路の街そして白鷺城も模糊たる內に左手に眺めやうと言ふ、九州からの歸途朝五時過ぎ、食堂車で眠り足らぬ眼でどうか

すると溢れそうなコーヒを見守り乍ら食べたのが以上のものです。（七・一四記）

西田　艸樂

晝飯は家ですか、夕餉はお歸りですかと毎日聞かれる僕だ。日に三度宅で食事をとる事は稀であるが七月十日火曜の晝食はたしかに宅でとりました。從つて食事の内容は平凡な晝食です。此の葉書が午後三時半に着いたのですもの。

女學校行きが二人、中學校行が一人若い店員が三人、私達夫婦、かなり大家内ですが、此の日の晝は二人きりのサシでした。お献立は雞肉と葱の煮合せ——お汁が多かつた——濱納豆、胡瓜の淺漬、黄色い澤庵漬、貧弱でせう!!晩には御馳走が買ふてあるんですがねー、憎らしい時に葉書を見たものですよ。

西村　山月

此の葉書を見た直前の料理と申ますと恥しい氣持が致しますが有りのまゝに書きます。葉書は十一日の朝食前ですから十日夕食を勤務中江戸堀のうどんやで御飯と漬物かもなんの代拔きの副食物でした。うどんやは場所柄サービスも無く眞面目な内で勤務中殊に適當でした。其の外熱い茶七八回コップで飲み汗は瀧の如くなりしも腸工合殊に良し。

後藤　青兒

子供の時間ラヂオが鳴つてゐる。
豆腐の煮付、蒲鉾に大根おろし、茄子味噌汁、新漬。
七月十二日　妻その他大勢。

村松　夢裡

喰べたもの　杖豆、ス、キアライ、アワビノ酢、コールビーフとアラ芋、鮎の鹽燒、イモ吸物、櫻んぼ、水瓜、メロン、ビール?本、友人の話、御飯、香の物。

喰べなかつたもの　友人、おはなさんゞとみさん、おしまさん。

北川　あや美

昨日と一昨日とは氏神の祭で、面白く遊んだのだが、今日から働くのかと思ふと汗がにじみ出て來る。それでもどうやら午前中は樂に過ごせた。しかし午後は熱くなるだらうと思ひつゝ食膳に向つた。

幾つかの皿にはどれもこれも冷めたいものばかり盛られてある、と云ふのは昨日の殘りを冷藏庫に入れて有つたものばかりを食膳に並べられたからである。一つの皿は玉子と鰻とである。玉子は色が變つて居る。鰻は昨日食つた時の樣にうまくない。別の皿に胡瓜とトマトとがつけ合せてある。とてもよい色合せである上にとてもうまい。又別の皿には變な冬瓜の樣なものとキヤベツとが附け合せてある。兩方とも淺漬けである、冬瓜の樣なものはあまり變な味がするので妹に聞けば昨日の食ひ殘りの西瓜の皮だけを淺漬にしたのだそうだ。人を馬鹿にして居る。

もう一つの皿は「あをうり」と蛸とで有つた。こんな變なつけ合せである上に一家八人が前日の食ひ殘りを分けて食ふのだからどれもこれも少しづゝでとても足りないので不足を朧こぶでおぎなつてどうやら午めしをすませた。

平井春光

ハムサラダ、オムレツ、トースト、コーヒー、まことに御馳走樣でといはれさうですが、これなんサービス・ランチと申す、大衆向の廉價料理(晝食)でありました。

石丸春峯

一、トマトサラダ
一、ホワイトライス
一、梅干、澤庵
一、冷番茶

これが本日晝食のメニューです。何んと素適でせう。商賣柄トマトサラダはお手のもの、きれいに皮をむき氷で冷し別にマヨネーズを造り程よくつけてめし上ります、こんな事を申しますとまるで割烹の先生の樣でありますが、とにかく御飯は三杯澤庵一切梅干は三つ冷めたいお茶に何んとお美味かつた晝食よ。附言、妻と共にあらず。

大鶴喜由

食ふことゝ飲むことゝは人後に落ちない自信があります。その癖うまいとも云はずうまくないとも云はず食ふ私です。勿論舌を鳴らすことなんかありません。妻は常に私の舌先を見守つてゐます。だから變體な料理になるのです。

今宵の料理は魚のフライ、玉吸、瓜と馬鈴薯にマヨネーズを配したものと鹽昆布冷しビール一本です。

ラヂオが面白くなると箸を休めるので今夜も叱られました。この頃はあまり遊ばぬので待遇はこれでいゝ方ですこれでも裏からメスを入れると犬(セハード)の膳立に闘聯してゐるのです肉をやりたい日、魚をやりたい日、それに私の料理が引きずられてゐるのです。

植山九天

昨日玉突で今日の晝食を負かされたのです。料理は鮎のフライ、ポークチャップ、野菜サラダでした。友は一かどの鮎通らしく鮎の苦味など云つてむしや〳〵やつてゐました。こちらは苦い鮎と負かされた腹だちとでコールコーヒも冷たく思へませんでした。丁度今臺所では燒茄子の酢味噌あえが出來てゐるそうです。(七月十日午後五時)

宮岡白峯

丁度十日午後五時ハガキを見たのだから一寸早過ぎました。もう一時間たてば奥樣料理を照會できたのにとは實に殘念千萬でした。ですから役所の中食です。何の色氣もありません。

膳立は十五センチメートルです。内容と申しますと

一、インゲン豆とナス
二、コロッケとキャベツ
三、コーヒ一本、飯一杯

これで氣味惡い煽風機の前で汗を流しながらパクツクのでした。全くお話しにならない次第です。

加藤文醉

突いた鱸へ篝火や燃えて
落ちる火の子がアノ涙やら

之は私の作つた當地の小唄なんです今捕つたばかりの鱸を掛小屋へ持つて來て早速料理したです。そうです。……さしみ、鹽燒・酢の物、吸物……とネ。實に美味かつたです。鱸の骨吸物ときたら又格別です。木曾川の流れを聞きながら鱸の手料理、斯う書くだけでも惡くないですなあ。

日本名所

大阪の巻（一三）造幣局

麻生路郎選

大西長三郎畫

其の日暮し造幣局に傭はれる　某人
造幣局金の値打の粉をこぼし　新市街
ない時は造幣局を思ひ出し　比古
卵生むやうに造幣局のかね　山雨樓
造幣局出來そこないでもくれぬなり　艸樂
造幣局十萬圓も足の下　天國
金借りに造幣局の近所迄　奈里
金貸しの慾で造幣局を見る　雨少
造幣局職工力なく凝視め　白峯
造幣局片手位にほしい量　新市街
造幣局しばし無慾の僕となり　春光
造幣局日本の國はこう動く　雀踊子
造幣局金はどこにも落ちてゐず　末廣艸

造幣局とつぶり暮れて月と花　與三郎
船世帶造幣局を氣にとめず　某人
一掴みほしく造幣局を出る　亂耽
造幣局こゝも滿洲景氣なり　雀踊子
造幣の秤冥加に使はれる　艸樂
造幣局ふと良心を恐がらせ　新市街

名物柳川

北陸の巻

(一)兼六公園

安川久流美選

兼六園勿體なくも素通りし　今雨
スタンプに兼六園の石の苔　義風子
くさなぎの劍の下へ花が散り　自然坊
花見茶屋團子の焦るかざもよし　香仙
あり餘るやうに兼六水を見せ　利生
此の山に流石加賀樣水が來る　しとし
兼六で二人の寫眞すゝめられ　美津女
兼六園我が物顏にして話し　智柳
兼六の水美しう茶がは入り　陽月

公園で香林坊の醉がさめ　ひろし
欠伸して〳〵兼公園日が永し　素描
兼六園ふと樂翁を懷かしみ　壽美子
名も高き加賀のお庭を素通し　文路
ふを投げて兼六園の春をゐる　千秋
團體旗眞つ先に來るいゝ公園　たし路
ぐる〳〵と廻らされてゐる傘山　豐月
夜櫻へ又公園を見直され　新水
團體の皆名園を賞めて過ぎ　花曙
春は花冬は雪見の酒になり　眺水
手をたゝく人あり霞ケ池濁り　千波
福壽山七ケの石にある個性　同
公園で指のさしたは河北潟　綠雨
兼六園城のラツパがどつと聞へ　輝亭
人工の美をきかされた兼六園　小樓
尾山城團子の箸が聞き直し　三々涙

月評

金★銀★鐵

山本丹路
福田山雨樓

山雨樓――今晩はちと砕けて好きな句の鑑賞と云つた氣持で進めませう。

筍にふとほゝ笑が湧いてきた

縷紅

この筍は勿論生えてゐる筍でせう。僕等のように生活が忙がしく追はれてゐるものにはめつたに筍ののびてゐる姿に出會ひませんが、作者のやうに靜かな生活をしてゐるものにとつては、そして螢ヶ池の方面は筍の名所として知られてゐるところでは、あまり珍らくない風景でせう。しかし筍の初々しい姿を見て微笑を禁じ得なかつた作者の純な心持を思ふとき、僕はもうすつかり句主が好きな人になつてしまひました。

丹路――山雨樓氏の鑑賞に盡きて居りますね。「川柳に惡ずれる」つて言葉を誰かに聞きましたが、僕も始終それを怖れてゐるんですが、こんな句にぶつかると氣が強くなつて來ます。素直におどろき、素直にほゝ笑む精神は川柳にとつても大切なことゝ存じます。螢ヶ池に生れる句は此の點で誇り得るものがあると信じます。

滿月へ天鵞絨色の猫が出る

耕一路

山雨樓――耕一路氏には松山で一度お目にかゝつたが、實におとなしい方でした。この句の持つ香氣といつたものに、自ら句主の人柄が表はれてゐるように思ひます。下五の「猫が出る」は無雜作に云ひ捨てたやうですが、別段句の趣きを傷けてもゐませんし、却つて餘韻を殘した表現ではないかと思ひます。

丹路――滿月を背景として主人公の猫が登場するんであります。「猫が出る」が句の焦點でもありませう。猫が「ゐる」でなしに、句主の視界にまかり出た「猫」が、面白いんであります。滿月、びろうど色、夫々に貴重な役割をもつて居ります。作意も野心もありません。句の持つ香氣はそんなところから自然に生れてくるんでせう。

生活へあすこも日の出拜んでる

五所

山雨樓――僕の少年時代、祖母や養父は正に日の出を拜してゐました。自然僕の惱裡にも太陽禮拜の觀念が植えられてゐます。で、今かうした句に接して見ると そゞろ田舍の故郷が戀しくなつてくるのですが、それよりも今日の生活に照して、斯樣な原始的な人間の姿を見據えた句主の眼に、ある深さを覺え

ます。

丹路——「生活へ」が幾分概念めく嫌ひが無きもにしもあらずてな氣がするんですが、句の味に至つてはさう氣になりません。所詮中七下五ににじみ出る句主に敬虔な感懷にひかされるがみでせう。先づ作句態度だ、と云ふ事を敎えられるんであります。

また女を想へば葉蘭がゆれてゐる

巢人

山雨樓——ちと叙法にたるんだところは見受けられますが、變つた色彩のある句だと思ひます。理窟も説明をも拒む句です。つまり主觀句ですね。ところが、その主觀に知らず〳〵引きづれるから面白い。鮎美さんに「のろけてゐれば鼻の涼しき」といふ句がありましたが、何だかこの句と一脈通じたものがあるやうに思ひます。

丹路——僕この句からいゝ意味での技巧的な面白さを感じるんです。

たるんだ叙法も却つて内容の効果をあげてゐると思ひます。兎に角句を通じて句主のからだから妙な味覺を感じて、たしかに引きづられて來ます。

エンゲージリングへ怖い父の株

青果

山雨樓——この句には一篇の短篇小説が壓搾されてゐるやうに思ひます。相場師の娘だなんてことを想像しなくても、何かそこに不安と憔燥とを孕んでおります。所謂事件構想に成功した句と云へませう。凄味を帶びた句ですね。

丹路——面白い句ですね。確かにこんな人生もあると思ひます。併しさう切實に迫つてくる句と思えません。事件的構想に成功した句——それでこの句はいゝのではありませんが。構想をよくこなしてある點は敬服の至りです。

引き眉毛男の馬鹿が面白し

令風

山雨樓——この句はかつての本誌月評にのぼつた「十人に吸はせても赤い〳〵唇」ほどの辛刺味はありませんが、こつぴどくやつつけたやゆには僻易させられます。句想が陳いと云へば陳いですが、斯くけさ懸にばさつとやつた太刀先に、川柳叙法の一面を代表した諧謔味を覺えるではありませんか。

丹路——辛刺味が句の裏にかくされてしまつて、讀んで少しも不愉快を感じない德をもつた句ですね。淡々たる表現がさう思はせるんでせう。或る種の女の男性觀を冩つた句としては、餘りに云ひふるされた句想と云へるでせうが、それを感じる前に、叙法、表現の面白さに思はず釣りこまれてしまひます

人の死を聞く顔ごなりゐる

曉童

丹路——うがちと云ふ程でなく、差迫つた感情のなかに、ひよいとして自分の顔を意識した瞬間に此の句が生れたんぢやないでせうか。とんでもないときの自意識を忠實に「顔となりゐる」でおさめた句の味に好意がもてます。故人を愛した人も、憎んで居つた人もその死を聞いたトタンには、一樣にこんな顔をするもんです。

山雨樓——自分の顔を意識した と云ふよりも寧ろ、第三の眼で他人の對話から川柳を拾つたもの、と云つた方が句解として適切では

ないかと思ひます。實際「人の死を聞く顏」と云ふ顏があるようですね。例へば、眼玉が發狂したときのやうに怪しく澄んで、口が剽きん者みたいにとんがつて、一時呼吸の根が止つたやうな顏をするものですね。多少誇張意識といふ奴は手傳ふんでせう。「なりゐる」は稍遲緩したものを感じます。それからこの句の創意は「武玉川」に先鞭を付けられてゐはせぬかと案じられます。

觀音堂までは財布があつた筈

與三郎

丹路——句主のキヨト〳〵した眼を限りなく愛します。財布をなくした代りに、素晴しい川柳を拾つたもんです。觀音堂までは財布の存在が句主に確信がもてるんです。人生に於ても確信をもてるのは、結局この句の財布の存在程度ぢやないかと存じます。

山雨樓——句主は最近東京へ遊んで來たので、多分淺草での實感句でせう。淺草の觀音堂でないと句が生きて來ません。で、この句は事實を通じて來た力强さを感じます。

それからこの句に就て思ひますことは、何のたくみもないやうで、結句うまい句になつてゐると云ふことです。これは「鹽は辛い」と言はずして「砂糖だと思つて鹽を舐めガツと吐き出した」といつた反喩法を用ひたものです。この句にしても句主らしいところが出てゐるやうで、僕は思はずほゝ笑まされました

表情の巧い男に歩かされ

華水

丹路——句主の嬉しい微苦笑が句に溢れてゐて、まるで自分自身が心齋橋筋を歩かされてゐる樣な氣持にされます。それだけで僕はありがたいです。

山雨樓——さうです。「歩かされ」がちつとも嫌味なく響きますねえ。表情の巧い男とは作者自身であるやうに思はれます。僕も親しい人と話をし乍ら歩くことは大すきですが、その親しい人の表情の巧拙には拘はりません別段話の合槌を打つてくれなくとも構ひません。しかし親しい人は結局馬の合ふ、同氣相求むる問柄に外ならぬから、眞情の溢るるところ、自然巧みな表情に思はるゝのでせう兎に角この句を通じて華水君の朗かな性格が受取れるのは、句に人柄が反映してゐる爲めでせう。

運轉手ものゝはずみを知る日なり

春光

丹路——地味な表現のうちに、よく職業臭と言ひますか、句主の生活味のにじみ出た句と存じます。川柳に對するこゝろがまへも常にかくありたいと思ひます。

山雨樓——實際ものゝはずみと云ふものがありますね。殊に運轉手の職務にあつてはその豫測感が一層鋭敏に來ることだらうと思ひます。近頃大分道路がよくなりましたが、まだ〳〵街中では危險なものです。外國の運轉手だつたら大阪のやうなゴチヤ〳〵した道路ではやう運轉しないだらうと云ふ人があります。

この句にはさうした不吉な豫感に直面した句主の不安が物語られており、川柳を正直に取扱つてはおりますが、述懷的で句の調子が弱いと思ひます。

路傍集　募集句

盆踊

高橋かほる選

盆踊序幕に見せて夏芝居　彩泡
さら〳〵と草に音して盆踊　花涙
旅の夜を誘はれて見る盆踊　紅
駈落ちの様な氣持ちで盆踊　新市街
盆踊櫓に一人寢てしまひ　禿山
養生でゐる此の村の盆踊　貴代志
盆踊旅の終列車でながめ　小松
看護婦と一緒に見に來た盆踊　たけを
盆踊朝から用意してるなり　青兒
サーチライトに恥しくなる盆踊　祥月
盆踊小町娘の前が空き　久米雄
旅にゐたはすの娘がゐる盆踊　紫陽
盆踊遠く眺める病み上り　利生
盆踊女工の聲でないのなり　小樓
本年の盆踊にも月がなく　柳夢
町の娘はやつぱり違ふ盆踊　菊路
盆踊地主の息子戻つてゐ　朝雨
代數が解けて見に行く盆踊　秀雄

（佳）

ポータブル提げて見てゐる盆踊　葉光
いい聲が汗をかいてる盆踊　華水
兄弟が別々に出る盆踊　同
盆踊世話人らしひ澁團扇　新水
團扇持つ事も嬉しひ盆踊　御穗子
洋服が二人見てゐる盆踊　曉童

（軸）

盆踊一人か二人あくびする　かほる

白服

日野華水選

白服の似合ふタイプへ夏が來る　實
白服で暑い〳〵と云ふてくる　朝雨

川柳家戸籍調（續）

（係）山雨樓

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業又ハ勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（378）草木鐵扇花

（1）草木定一郎（2）鐵扇花（3）明治三十三年十一月一日（4）東京市麴町區三番町（5）同同九段三ノ七（6）印刷業（7）この外澤山あり、故郷へ廻る六部は氣のよわり（柳多留）見詰ても戀しい足しにならぬ空（武玉川）お互に江戸の心をしつかりと持つてゐやう（久良岐）（8）最近の句帳より「迎合の世の中といふ羽織着て」「うまい店すまないやうに剩錢があり」（9）を持つ程餘裕がありません（10）妻あり子なし（11）自分（12）大正七年一月

（329）和田玄水

（1）和田潔（2）玄水、幻醉（3）明治三十三年六月十一日（4）山口縣大津郡菱海村伊上（5）大阪府中河内郡小阪町上小阪七八四（6）藥劑師（7）晩飯へやつとこしよのどつこいしよ紋太、フルーツと呼んで聊か値が上り水府、天井の低さも知らず子はうまれ路郎（9）釣魚、圍碁（10）妻子供五人（11）子供の病氣（12）大正十一年

責任は重し　白服よく汚れ　世間音
白服の一年生は隅にゐる　史呂
街路樹の蔭を白服縫ふて行き　菊路
白服は洗ひのきける布を選り　節子
白服で休暇うれしく歸つて來　彩泡
夕涼み　あこで　白服世話をやき　芳朗
白服を彼女に渡してオール持ち　葉光
白服へ心亂れたまゝで居る　小松
白服ゝ折目をつけて戀を持ち　紫陽
十字路の風に白服顏を上げ　伶人
白服のパナマは阿彌陀に冠る　辯德三
白服が一人乘つてるバツアート　利生
新調の白服、神經の疲れいの助
白服へ蠅一匹のあからさま　耕一路
白服に焦げつくやうな蟬の聲　禿山
白服のズボンの皺の目立つ宿　華坊
他愛なく醉ふ白服を危ながり　嶺喜固萬
白服の女へ舗道情緒めき　令風
白服の女は晴れた口を効き　史郎
夜の底を職務に走る白い服　春秋
さげすまれまい外交員の白い服　有魚
白服へ儲かりもせぬ汗をかき　たけを
アリランの唄白服でカメラへ來　紅
白服が似合ふ女のマニキュアー　同
白服へ一家を背負ふ汗のしみ　芳泉
泥遊びする子をさけた白い服　同
白服へ自動車辻を折れてくれ　曉童
白服へこんどのバスも混んでゐる　同
白服の汚れを袖に見てる朝　花涙
白服の醉ひ暗闇を縫ふて行き　同
白服がプランを變へる空模様　末廣艸
白服になれば男の細い腕　同
十年を平凡に來た白い服上　上
現實を物語つてる白い服　同

佳　句

人間のなやみ白服で仕へ　新市街
ポケツトに扇子を持つて白い服　春秋
白服で立つ絶景に風があり　小樓
朝と云ふ力に滿ちて白い服　義風子
見直して白服坐る席があき　たけを
いさぎよく白服汚す男の子　有魚
眞直ぐに白服へ泥飛んで來る　久米雄

（軸）

乾き切つた街・白服、剝にぬけ　華水

選後　スケッチの句が多かつた爲に類想の句が澤山あつた事は免れませんでした。佳句七句はそれ〴〵云ひ切つた力強さと輕みと苦笑を與へる事とを多分に持つて居て推奬する價値多き句でした。

（390）　岡田某人

（1）岡田德次郎（2）某人。別號なし（3）明石市西本町（4）神戸市須磨區飛松町五ノ二二（5）明治三十九年十月十四日（6）大阪鐵道局經理課（7）ひとりでに釣瓶の下るおそろしさ（古川柳）まよひ子の親はしやがれて禮を云ひ（同）すり鉢の音も夜ふかきならの町（同）（8）一錢をしみ〳〵見れば御紋章。初七日をすぎ神妙に父と寢る。滅入るといふ盃に影があり（9）ぼんやりとしてゐる事（10）差し向ひ（11）いはゆる世間。ぬかるみ（12）昭和八年二月

（391）　平井與三郎

（1）平井與三郎（2）曠原、冬呼、與三郎（3）大阪市西區阿波堀通四丁目（4）大阪市大正區大正通六丁目九二（5）明治四十年五月二十一日（6）印刷業（7）ピアノが鳴つた金借りに行け（路郎）愚かにも顏見に行けば雪になる　路郎）肺であることなぜ隱したりするんです（路郎）（8）裏表十圓札の色が好き。札持てば心よろめく二十一（9）俳句、麻雀（10）ナシ（11）好きなものは少ないですが嫌ひなものも格別に感じません（12）昭和六年七月

（392）　矢島三嵩史

（1）矢島市郎（2）三嵩史（3）東京市神田區（4）東京市足立區栗原町八一九（5）明治二十八年二月七日（6）西洋料理業貸室業（7）醉ふてゆく心をのぞくわが心（米花）階段を物落ちる音またたのし（犇郎）悲しさの足をちゞめたまゝで寢る（泉福）

涼臺、團扇

涼臺嚊の人が今通り　嵜喜固蘊

南無三と飛車を取られて涼臺　馬笑

涼臺寢るのにおしい月があり　琴月

涼臺淋しき唄にさそはれる　天國

降らんなアと涼臺から一人言　晧熙

やつと寢ましたわと來る涼臺　彌生

指先で月突いて見る涼臺　呂烈

涼臺　娘見合の樣に出る　新市街

涼臺まだ宿題が殘つてゐ　有魚

涼臺　端へ娘は笑ひこけ　白英

涼臺浴衣の糊の强すぎる　史呂

日本の未來で更ける涼臺　同

涼臺どの內閣も氣に入らず　芳泉

襟足をそつと見つめた涼臺　同

涼臺見て來たやうな嘘も出る　菊路

涼臺夜間飛行へみんな立ち　同

涼臺野球の賭も惡かつた　寒草

歩一つなくしてしもた涼臺　同

（佳）

涼臺女の足の白いこと　青柿

涼臺因果話にしんとなり　いの助

◇

寬いだ心團扇へ寬げる　嵜喜固蘊

西田艸樂選

出雲屋の團扇食慾ないのなり　史呂

團扇持つ女と題し深水畫　青柿

澁團扇さて是れからの襷がけ　兼魚

立腹へ團扇手あらく使はれる　白英

たゝいてる團扇も戀の役目なり　つよし

團扇フト蚊取線香の灰が落ち　塞草

あをぐでもなく待ち佗（た）團扇（なし）　呂烈

失禮な欠伸へ團扇あてられる　東陽

一稽古すんで師匠が持つ團扇　蛙庵

病床の頭へ團扇ゆるくゆれ　春陽

手持無沙汰へ團扇强られる　新水

うちはから覗く稚兒の齒が白く　琴月

冷へ切つたビール團扇へ泡が（とば）　山月

團扇投げ捨て主婦シツコ拭き　正七

去年のと同じ炭屋の澁團扇　承春

稻の出來見に來る腰の澁團扇　同

鷹揚にかまへた父の澁團扇　彌生

二階借團扇で塵を捨てに下り　同

枇杷の皮を團扇の裏へむいてる　葉光

抱いた兒に團扇持たして桃を買ひ　同

一路集課題募集・「涼臺」及「團扇」は前號編輯後記に於て斷つて置きました通り、改めて七月十日迄の應募句を發表する事になり各題西田艸樂選として、茲に掲載する事になりました。

（8）岩魚燒く爐へこゞんでる夜の霧。旅の字は風に吹かるゝ姿なり。（9）山岳は我がすくひの眞顏を思ふなり。（10）妻、一子（男）（11）何物も嫌へない（12）昭和五年七月

（393）　毛利九波

（1）吉田正五郎（2）毛利九波、愚生徒、白蛾（3）明治四十三年十二月（4）大阪市東區道修町五ノ三十四（5）同（6）東區淡路町三株式會社吉田商店輸出部（7）上海の戰火の底のでかめろん（亂耽）死ねばよいと思ひながら電車道越えた（愚陀）生涯を耳はしずかな姿なり（噴兒）若い人達のロマンチツクな句ペシミスティツクな句純情な句等詩情のある句に心をひかれてゐます、最近ではモンタージュ川柳なるものに注意してゐます（8）絕えず川柳味なるものに疑惑を感じながら作句勉强中です。亂作の方で自信の句はありませんが左の句が好きです。子供らよ戀なき我と砂投げんかな、夏めいた空にクリームの銀皿（9）ラグビー水泳ならやります。見るのでは野球拳闘トラツク競技、パラマウントの小市民的映畫、昔の築地小劇場の人達の劇音樂ではブレクトラム樂器及シンフオニツクジヤズ、長唄、ビール麻雀遊ぶことなら何でもやります（11）單なる感傷にのみ墮した句、學生に對してわけもなく反感持つ人、場所を考へずに大聲出す人、水の江瀧子、芦屋邊の江戸癖のマダム、おまんじう（12）昭和七年十一月（10）ありません

柳川

二十日會の斷片

▼第一回の二十日會は、暑さに負けた連中が多かつたと見えて集つたのは左の七人であつた。艸樂・亂耽、禿山、山雨樓、與三郎・史呂、それから森半疊氏

▼南洋に十　年もゐたと云ふ禿山君の獵奇とエロに滿ちた實話には、只もう傾聽の外はなかつた。新感覺派の亂耽君などソーダ水に咽喉をうるはし乍ら只管謹聽してゐた。

▼禿山君のエピソートを一つだけ紹介すると、彼氏が今よりもつと若かりし頃、南洋の美人（彼女は芳紀十四、玉才であつたが、早熟の場所柄とて豐滿なるをんなであつた）と戀を語る間柄となつた。ところが彼氏は仕事の都合で其の地を引あげて、他へ移ることゝなつた出帆の前夜、二人は公園の暗いベンチで別れを惜んだ。しかし彼女は彼氏の眞意を疑つてゐた。そしてつと彼氏の眼に涙が流れてゐるかどうかを手探りに撫でて見た事實涙は出てゐなかつた。薄暗いところなので突嗟の間に彼氏は、唾をしめして涙に擬したと云ふ。

インチキの這入つた南洋情話ではある。

▼半疊氏も南洋、印度方面は度々視察されてゐるので詳しい。その半疊氏が土人語を混ぜて禿山君の話に合槌を打たれるので話は一層眞實味を加へる。

チンタ（情夫のこと）と云ふ言葉がふと半疊氏の口から出たとき禿山君は、昔を思ひ出して手を叩いて喜んだ

▼艸樂氏は流石藥の專門。南洋の植物の話から、靡睡劑のことを思ひ出して、儲けの話になり急に行つて見たくなる。

▼僕も何か自分の畑のことを話さうと思つて出掛けて行つたのであるが、南洋の話で手も足も出ず、今更日本の話でもあるまいと引込んでゐた。

▼庭球に關心をもつてゐる僕は佐藤選手が飛び込んだマラッカ海峽はどんなところか、と訊ねると半疊氏が「シンガポールを出てからすぐマラッカ海峽で、佐藤選手は船が出ると間もなく飛び込んだのですね」と答へられるや、禿山君すかさず「もう少し手前で飛び込めば極樂へ行けるのに」と洒落る。（因にその附近に極樂寺と云ふ有名な寺があるさうだ）

▼南洋では結婚披露宴で、花嫁が盛裝して、白粉をコテ〳〵に塗つて一段高いところに座らされ、宴が終るまで一語も發せぬのみか、笑ふことすら出來ず、ちつと顏を晒してゐるのださうな。「一體どんな氣持で座つてゐるのか、ちつとは笑つてはどうだ」とひやかしたくなる、とは禿山君の實驗談。

▼與三郎君と史呂君は小學校時代の友達で、史呂君が先に來て待つてゐると、與三郎君が自轉車で駈付けて來ると云ふ、まるで戀人同志のやうな親密振り。

▼第一回の集りは頭數は割合少かつたが、その代りほんとの打解けた感があつた。そこで亂耽君「千客萬來みな來ては困るなり」と笑はす。

▼路郎先生は「あまり僕が喋ると集つたものが喋らなくなるので、聞き役になつた」と笑つてゐられた。蔑乃奥樣も聞き役の一人だつた。（山雨樓記）

九、七、二〇
於キンギ喫茶店

川柳怪異想誌

—うら門のひとりでにあく日永かな—

一茶

岡田某人

金の番とろと〳〵してうなされる（柳樽初編）

およそ怪異と名付けられるものの本體は、如何なるものであらうか。枯尾花に幽靈を見、月光に鬼哭を聞く、何によつて來るのであらうか。たゞし茲に謂ふのは「怪異」であるが故に、お盆興行的な幽靈乃至は、見せ物めいたお化けの類は、後に述べる理由によつて、扱はれなく、しかも現世的見方感じ方に終始する川柳の世界に、普通期待される怪談なるものを探すのが無理といふべく、一讀過した柳樽初編より八編までに僅に十指を屈するに足らず、辛ふじて得たそのものが、一として超現實なものでないことも見逃し得ないことであらう。

轉居の紙をなぶる五月雨

×

鶏の何か言ひたい足づかひ（同前）

したがつて、私が茲に怪異として取り上げたものも、一見何の妖しさもなく、素材に於ては何處までも一個の動かぬ現實であり、數千百の他の句と同じ世界を見てゐるに過ぎないものなのである。其處には何らお芝居めいた因果もなく、傳說もない。お膳の上に置かれた茶碗のやうに、あたりまへの現象なのである。にもかゝはらず私は、私たちは、その短い十七音の中に、ある種のおのゝきを覺えるのである。

寢息靜にもれるあばら家

×

狐火の折々野路をほころばし（同二編）

別に其處に山氣があるわけではなく、こしらへものゝあやふやさ、どぎつさが微塵もない。あるものは只、十七音字中に移された、美しい、物の見方、感じ方のみであり、幽玄な第三世界からの微光ばかりである。

裾のみじかい友の白膚

×

新尼のわれをいやがるかげぼうし（同四編）

すべて豫期せざるもの、智識以上のものらを怪異とするは、初歩の意味に於ては肯けもしようが、それらもうろ〳〵の不可思議は、こゝに扱はれた怪異にはやゝ遠く、科學的努力に依つて、いづれは解明され、いつかは常識にまで落ちぶれる運命にあり、眞の怪異とは名付けがたいものである。しかるば、眞の怪異とは……

凄い音して落ちる八ツ手葉

×

鐵砲のあひへ一と聲ほとゝぎす（同五編）

眞の怪異とは、あくまで一個の現實を對照とし、在り得べきものに發祥して、しかも理論を別にした精神的な、あまりにも精神的な、その上、それ以外の何ものでもないもの、即ち、一つのア・プリオリな情緒に外ならない。本能に原因づけられる動物的恐怖にもとづく死者の空影、來世的不安から來る信仰的靈現など、私のこゝに曰ふ怪異の前には、凡そつまらない子供だまし、又は爲にするところあゝ利我分子に滿ち、後世これをもつて一の商賣道具となすに到つて、むしろおかしい位のものになり終つたとも言へよう。

×

砂ぼこりして月のあぜ道

おさへればすゝきはなせばきりぎりす（同前）

私はこゝで、かのアイルランドの一城主、ダンセニイ卿の劇「煌ける門」——GLITTERING GATE——を思ひ起す。何もない、即ち虚無、それも亦美しい怪異であるのだ。大作者鶴屋南北以來世に行はれて來た幽靈變化のたぐひも、底を割つてみれば、存在しないからこそ怖いのであつて、これを除いては一の滑稽　一の道化とよりほか見樣もないものであり、假りに幽靈といふものが實在して、夜中巷間を彷徨するところを想ひ浮べてみるがいゝ。それこそ怖いどころか、正にチンドン屋以上であらう。お化け——それは恐らく人だかりの種になるのみだらうではないか。出て來ないからこそ怖い。これが本當だ。だから現實を尊ぶ川柳には締め出しに會つてゐる。したがつて私の言ふ怪異——眞の怪異とは、なんでもない、あたりまへのものに對する、觀者の神經絃の異狀運動、いはれも因緣もない、說明以外の神經の震動。これこそ、そしてこれだけが眞の怪異ではなからうか。

×

背伸びおどろく書のうす月

ひとりでに釣べの下る物すごさ（同前）

茲に到つて、怪異も亦極まれりと言ふべきであらう。理窟も議論も理性もない。德川の昔、丁髷を備へた頭の中に慄然たるものを與へたこの一現象は、昭和の今、コンクリートと金屬に圍まれて暮すロイド眼鏡にも、一讀悚然たらしむる力を藏してゐるではないか。それが些も懸引のない實在であるが故に、われらの神經が衝擊される力は減じない。この恐ろしき十七字の前には、わが畏敬するラフカヂオ・ヘルンこと小泉八雲のKAIDANも、實は少年少女の讀みものに過ぎないとの感が深いのである。

ひる寢の汗がおのが身の丈

×

屋根葺きの唄わくら葉のあとを落ち

髮そよ〳〵と凄い山伏（同二編）

本社七月句會

七月三日夕　於道頓堀倶樂部

猛暑襲來！七枚の、皮膚も脱ぎたい心地。天井の三基の煽風機によつて、場内一杯に風が送られてゐるのに、句藁握る手には汗を覺えるほどの暑さ、出席者苦吟の姿は尊いものに見えた。幸ひ佳作の續々生れたことゝ兼題「藥」の發表に當つて、藥劑師である艸樂氏が隨時自己の身邊談を挿入された新機軸披講とによつて、興趣深い一夜であつた。尚、山雨樓氏は先月の句會席上の雜吟の成績發表のプリントを配らる。（春光記）

（出席者）

路郎・綠雨、紅、艸樂、白峯・里十九、鶴峯・豆秋、與三郎、新市街、天國・雨少　正明、雀踊子、末廣艸、春光・彩泡　奈里、亂耽、いわを、禿山、山雨樓　節子、ひろし、夕鐘、紫石、

席題「落　書」　互　選

落書を交通巡査消しに來る　白　峯
落書を讀めば女のことだつた　同
落書は淡い嫉妬も交つてゐ　奈　里
落書にしては奇麗な文句なり　同
落書の頁夜店の月遲れ　紅
落書の壁本坊はもめてゐる　同
落書を横文字にする中學生　天　國
落書を見つけて汗をかいでゐる　禿　山
落書をそつと村一番の塀　雨　少
落書の塀の向ふで園はれる　新市街
社長室社長落書して歸り　與三郎
ふげつない落書萬年筆で書き　豆　秋
宙返り空へ落書する如し　春　光

席題「果　物」　綠　雨　選

果物屋隣りは肉を燒くにほひ　白　峯
千疋屋たゞ呉れさうにならべたて　奈　里
間食に果物が出る家庭なり　雨　少
果物と光るナイフと女ゐる　艸　樂
食後の果物とやらでやせてゐる　雀踊子
食べられぬ果物籠を列べられ　與三郎
果物屋枇杷の單價を云ひそびれ　豆　秋
驛前の夜更け果物だけ光り　新市街
（佳）果物の味覺に似たる戀心　末廣艸
（同）病人に果實の艶が喜ばれ　豆　秋
（同）果物へ女給の手が伸びてゆく　彩　泡
（同）果物屋派手に空箱積みあげる　ひろし
（同）メロンメロン銀のスプーンですくひあげ　ひろし

席題「床ずれ」　山雨樓選

床ずれへ愛の言葉がしみ過ぎる　紫　石
床ずれへ天井から吊る大布團　禿　山
床ずれの子に童謡をきかす晝　新市街
床ずれの醫者は同じ事を云ひ　いわを
床ずれへコスモスしやんと伸びてゐる　夕　鐘
床ずれへ南京豆を燒くにほひ　白　峯
床ずれを慰めてゐる國訛り　同
床ずれへ見舞の客は春姿　雀踊子
床ずれへバットの煙が目に泌みる　同
床ずれに人の寢息がうらやまし　艸　樂
（人）床ずれの二階へ上つてみたくなり　豆　秋
（地）來る客へ母床ずれを見せたがり　ひろし

（天）床ずれの父の腕に肩をかし　末廣艸

席題「インチキ」　亂　耽　選

インチキへ貧しき右手のばしたり　雀踊子
インチキの頭畫寢でこさへとき　天國
インチキは承知の上で飲んでゐる　夕鐘
インチキは下眼になつて返事する　いわを
インチキの顏も疲れた刑事室　白峯
蠟燭の明り春畫と見せかける　彩泡
雜音の街へインチキ店を出し　紅
インチキは判まで捺して歸るなり　末廣艸
インチキと氣附いたここは暗い部屋　艸樂
インチキは追つかけられた夢を見る　豆秋
インチキの會社にたんと椅子があり　同
インチキへ元代議士も名を列れ　春光
インチキなメーター助手の背に隱れ　同
インチキを咎めるやうにノーチップ　雨少
インチキの下では進む地下工事　同
インチキで捨てる十錢面白し　同

兼題「藥」　艸樂選

痔ぢこけたこんなみゝずが効きますか　夕鐘
藥飲む女となつて見捨てられ　節子
賣藥が効かないまゝに稼ぎに出　山雨樓
商標の事てもめてる製藥商　末廣艸
氣休めに呑ますくすりはサトを入れ　豆秋
藥局に毒藥がある高いとこ　同
百姓はこれが藥草かと思ひ　里十九
はづかしい藥は二三度往來し　同
惚れてゐる女毒藥持つてゐる　雀踊子
アダリンの夢別莊でやせてゐる　同
粉藥義齒が落ちた音がする　同
炙の跡風呂屋で藥敎へられ　彩泡
能書のせめて半分効いてほし　同
藥飲む小兒褒美が要るのなり　同
藥効を恨まれもする猫いらず　同
副業の藥でお寺忙しい　同

八月句會は中止

本年は炎暑殊に酷しいので八月の例會は中止致します。

日本名所名物川柳募集
（大阪の巻）

題　「住吉」三句
〆切　八月十日
宛先　本社事務所
選者　麻生路郎

川柳パイロット欄

句を生む心構え

福田山雨樓

今回の集句（課題、下駄）は、投句制限數を十句に改めた効果で、よき句が多かつた。從來と雖も相當の句數の中から最もよき一句を投句されてゐたのであらうと思ふが、矢張り十句なら十句を示すと云ふ心構えが眞劍味を帶びて來たのであらう。兎に角從來より遙かに優れた句が比較的澤山揃つたことは嬉しい。

○

澤山作句すればその作句數に比例して佳句が生れるかと云へば、必ずしもさう云ふわけにはゆかない。假令作句數が少くてもよき句が生れることもある。要は句を生むときの熱心さと心構えの如何にあるのである。

課題吟にあつては作句經驗の比較的淺い作家がよく秀逸の句を生むやうである。これは作句經驗の淺いと云ふことがその句主を一層奮發せしめることゝなるからで、是非他に優れたよき句を生みたいと云ふ意氣込みが勝を制することになるのである。

勿論作句は勝負事ではないから、必ずしも他のものに勝ち、他のものに優越した作句振りを示さうと云ふ、所謂勝ち負けに心を奪はれてはいけないが、最もよき句を生むために創作氣力を旺盛にして、一心を打ち込んで作句に當ることは必要である。と同時にさうした意氣込みが遂に秀句を生む結果を齎らして、努力が酬ひられるのである。このことは當然のことのやうであるが、實際に當つて仲々實行の出來ぬ問題であるから、平素からしつかりとした信念を固めておくことが肝甚である。

その信念を固めるのには只右に述べたやうな道理だけでは不充分だと思ふから、今一歩突き進んだ考へ方を申述べておきたい。それは川柳と云ふものゝ持つ本質が、俳句などに比して能動的であり、積極的であり意欲的であると云ふことである。もつと碎けて云へば、川柳が詠ふと云ふ態度が受身でなく、こちらから進んで働きかけると云ふ心構えなのである。例へば釣魚のやうに魚が餌を食ひに來るのを待つと云ふ構え方でなしに、網で打ち獲らふと云ふ態度なのである。さう云ふ態度で働きかけなければ川柳の眞髓に觸れた句がつかみ難いのである。

川柳は社會人生を批判すると云ふやうなことがよく云はれるが、この批判と云ふ態度の如きも頗る能動的な行爲であつて、手を拱れてゐては出來るものではない。

だから川柳を生むと云ふ努力には一層一層意力を盛にして、創作的意志の活動を待たねばならぬのである。

文弱に流れ、感傷に甘へるやうな氣弱なことでは、遂に川柳から見離されることを牢記しておかねばならない。

○

前回で投句上の注意を述べた中に、十句なら十句の中で最も自信のある一句には、○印をつけておいて貰ひたいと云つておいたがその○印の句を採用せず、他の句を採用したのが若干あつた。これについて少しく意見を

述べておきたい

有魚君の「母ちやんの足音わかる留守居の子」は説明調で、句意がありふれてゐる。美代坊改め玉格子君の「下駄フツテ〳〵嬉しい歩き初め」は「嬉しい」と言つてしまつたのでは味が乏しい　句意も單純すぎる。御穂子君の「アスファルトそこから響く下駄の音」は句意が平凡を免れない　久米雄君の「庭下駄の音が身にしむ旅の宿」は實感が出てゐるが川柳としての味に乏しい。葉光君の「塗下駄を鳴らして行水から上り」は美しい情景を捉へてゐるが、採用句の方が含蓄があると思つた。松路君の「平均に履いてる積り下駄のちび」は考へた句だらうが理窟に走つてゐる。繰紅君の「下駄と傘持つて父さん待つてゐる」は凡想を免れない。

斯樣に思つたので他によりよき句と認めたものを採用した次第である。

○

添削を要せないものと認めた句は

下駄からりころり錦帶橋の月　輝親
かたつぼがひつくりかへつた女下駄　琴月
役に立つ小僧の下駄がちだてゐる　白英
心中の下駄すれ〳〵に潮が滿ち　有魚
子供もう明日の祭りの下駄をはき　雅龍
ルンパンの下駄片方は柾目桐　双亭
お妾の下駄が一足畫の風呂　蛇之助
親の下駄子の下駄蟹は拔けてゆく　都留逸
下駄ぬげば下宿の時計二時をうち　繰紅
利久の音噂の中を通り拔け　天國

で白英、有魚、蛇之助君の句は三才といふ出來榮えである。

課題の

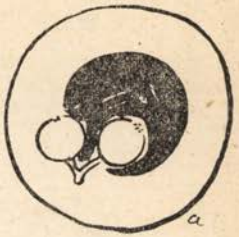
「濱水着」十句以内　一〜切八月十日、宛先　大阪市浪速區湊町保線事務所福田山雨樓宛。但し一般投句と同封するも可

原　句

すつきりと白い素足の利久下駄　當藥
下駄に釘打つてなみだの失業苦　清春
スリ切れた下駄と味ふ失業苦　善知鳥
均一の下駄何足もいりません　廣石
水かけるほど下駄は汚れて來　三九
下駄の齒は日毎々にへつてゆく　梅照（十四才）
アツパツパ丸髷結ふて下駄で來る　玉格子
燒ばんを押して始めておれの下駄　花城
新米の小僧行李へ下駄を入れ　御穂子
顏は顏先づ下駄のそく引子の眼　トミヤ
書生下駄三つ四つ並ぶ日曜日　笙人
駒下駄が曲れば粹な闇の音　久米雄
入院へ母新しき下駄そろへ　松生
濱岸に脫ぎ下駄ありて騷がせる　柳夢
母の下駄穿いて極草を買ひに出る　葉光
書置きのそばに可愛い下駄もあり　情美
下駄はいて無口の姉をひがんで見　小松
案じてた我が娘の下駄の音がする　松路

添　削　句

苦勞する素足が白い利久下駄
下駄の緒のゆるさ仕事の無いに馴れ
履歷書の紙買ひに出るちびた下駄
特價下駄近所四五軒連れが出來
水かけてこするほど下駄汚れて來
落第の下駄の齒うんとちびてゐる
簡易服世帶に馴れた下駄で來る
燒判の煙頼もしいおれの下駄
居着く氣の下女行李から下駄を出し
まつさらな下駄で引子に冷かされ
日曜日同じ若さの下駄が寄り
駒下駄で出てみて粹な旅の闇
退院へ母新しい下駄を出し
濱岸の下駄警官も一人來る
母の下駄穿いて歸省の門に立ち
書置きの端に可愛い下駄をのせ
下駄はいて無口に姉を送つて出
心配の中へ娘の下駄戻つて來



古狸窟雜筆（五）

梅本塵山

（五〇）茶にする

他人を嘲弄することを、「茶にする」とも「茶かす」ともいふ。此れは近世の語にあらず。

「柳庵隨筆知字篇」卷之八下

或家由緒書。

光秀が持し熊毛の茶筅やり人を茶にしてつゝたてゝやれ

と云御うたを、東照大權現の御自筆に遊ばして賜はりしなり。

（五一）刀豆

癲癇病者、刀豆を食ふ時は、直に病が發作する故に、昔の妓家に於て、新に女を抱へる時には、先づ刀豆の漬物を食はせて、癲癇病者か否かを、試みたりと云ふ。

「神靈矢口渡」

親指に肉がなけりやこれも商賣屋で嫌ふ事、氣をつけて置つしやれ、癲癇を試すにはなた豆くはしやつひ知れる、云々。

（五二）狸の語原

狸の語原に就きては、二三の說あれども手こまぬきの略也といふ異說あり。

「關秘錄」

緣は目うしなひの略。狸は手こまねきの略なり。立時、手をこまぬく故也。

（五三）鰹の烏帽子

堅魚の異名を烏帽子魚といふ。これは堅魚の烏帽子と稱する動物ありて、此物の先づ來りて後に、堅魚の寄る故也とぞ。

「立路隨筆」卷之二

鰹の烏帽子、三浦三崎の浦に、此烏帽子流寄る時は、鰹烏帽子ぬぐと云て夫より初鰹を釣に出るなり。此えぼし寄らざる內は、鰹取に不ゝ出由。其形如ゝ此（圖略）也色白ク水月ニ似タリ、紐ノ如キ物紺色ニ光ル針アリ、至テ毒アリ。人手ヲ著レバ忽痛ミハルルト云。

按るに此堅魚の烏帽子といふものは、水母（くらげ）の屬なる可し。

（五四）一夜檢校

俗諺に「一夜檢校」といふこと有り。此れは不時に一身の榮達する事をいふ也。

「古老茶話」中卷

河內梅千代と申、神君近習俄に盲目と成り、依ゝ之即時檢校に成る。是より世に一夜檢校といふ。

「領城色」三味線「大阪之卷

上京の有德なる、茶人の本へ大分の銀に替て、一夜檢校のごとく、よい身となつて、しばらく西寺内に宿をかり、云々。

（五五）　奇異の冠辭

我邦の歌文には、くさ〴〵の冠辭といふものあれど、奇異なるは、「ぬすびと」といふ冠辭なり。

「拾遺和歌集」卷第九

　廉義公家のかみゐに旅人のぬす人にあひたるかたかけるところ　藤原爲賴

ぬす人の立田の山にいりにけり、おなしかさしの名にやけがれん。

（五六）　手　綱

「鼻褌の「たづな」といふ。一說に其制相異なるものともいへど、男子の臀部を被ふもの也。

「曾我物語」卷第一

兄の彌五郎、弟二人負かして安からずに思ひ、袴の腰解くを遲しとひき切り、手綱二筋繹り合せ、强くおさめ走り出て云々。

「醒睡笑」卷之五

宗長法師あるかたにとまり、曉いそぎかへるとて、下帶をわすれおかれしを、もたせて送りければよみてつかはす。

　思ひきやおとす手綱の濱風に浪より高き名のたたんとは

（五七）　白　波

盜賊を白波といふは、支那後漢の黃巾の餘賊郭大等の、西河白波谷に起れるに據る也。我邦に於ては、和歌にも「しらなみ」とよまる。

「新古今和歌集」卷第二十

　不偸盜戒

浮草の一葉なりとも儉かくれ思ひなかけそおきつしらなみ。

（五八）　田　作

小鰛の乾したるものを、たつくりといふは、田圃の肥料ともなる故なる可し。此れを小殿原とも、ごまめともいふは、何故にや詳ならず。

「愚雜俎」

鰯の干たるを田作と云て、田家至要のものとす。是をホシ　と云、按するに干子なるべし。此ホシカ轉訛しヒシコと云。京攝にて小き鰯の鹽に漬たるをヒシコと云。東都にては小き鰯の生なるをヒシコと云。

（五九）　落　首

他人を諷刺し、嘲弄する意を含める、歌文などを書きて道路に落し、門壁に貼るを落首といふ。古はこれを略頌とも、落書ともいひたり。

「奥州後三年記」

將軍の郎等どもの中に、名を得たる兵どもの中に、今度殊に臆病なりときこゆるもの、すべて五人ありけり。これを略頌につくりけり。鏑の音をきかじと、耳をふさぐ剛の者、紀七高七穴藤王腰瀧末四郎といふは、末割四郎惟弘が事なり、云々。

「平治物語」

如何なる者がしたりけん、左馬頭元は下野守たりしかば一首の歌を書きつけたり

　下野はきのかみにこそ成にけれよしとも見えぬあげづかさかな。

或者此落書を見て申しけるは、云々。

「應仁記」

山名も佐殿の御上洛の事、只一身の大慶と賀し、通夜酒宴の興をぞ被催けゝ。其朝、義就宿地藏院の門の扉に落書をしけり。

　右衛門佐いたゞく物が二つある山名が足と御所の盃

各地柳壇

いのちあるる句を創れ

理整・樂艸・雨緣・路郎

本社同人句會

七月十一日夜　於天王寺公園十三軒

會場は公園の高見でもあるが、風の少ないむし暑い晩だつたので、同人はたれかれとなくシャツ一枚になつたり、寢ころんだりして打ちとけた句會であつた。句作批講の後路郎師は「前月號の川柳塔」について各作家の句風句評等に忌憚なき御講評を下されて大いに敎はる所があつた(豆秋記)。

出席者　路郎師、山雨樓　九波・青兒　秀山　閒路・梧郎・里　九・機見女・丹路・豆秋　艸樂、亂耽、綠雨、浸食子、夕鐘　路郎

兼題　防　空　選

防空へ伊勢の神風ある日本　青兒
暴落に防空どこの沙汰で無し　梧郎
防空に兎も角蚊帳は吊つて置き　秀山
防空の準備あせもがなほらない　浸食子
防空へ女灯を消すことをしり　丹路
防空へ夜業の汗を拭きに立ち　山雨樓
食ふや食はずで防空の寄附をする　亂耽

防空にあほむいてゐる消防手　同
防空の燈火を一つ見逃さず　綠雨
防空にこゝも休みの喫茶店　同
大阪は闇の庭なり聽音機　艸樂
(人)開けつぱなしの空へ闇を守る　同
(地)端役でも空の護りに僕も出ん　浸食子
(天)ニッポンの空の青さをみだしたる　丹路
(軸)防空もせんじ詰めれば寄附なり　路郎

席題　許　婚　選

許婚佛間にかしこまつて居る　秀山
許嫁鼻へ大きな汗をかき　豆秋
許婚浴衣の寸法は知つてゐる　九波
許婚パットを買ひにやらされる　路郎
許婚水着になつてまたあまへ　機見女
陽にやけてちと許婚たのもしく　同
盆踊目立つているは許婚　里十九
許婚二人になると下をむき　亂耽
フライパンもち朗らかな許嫁　同
アルプスはすばらしと書く許嫁　青兒
許婚世間の狹さ考へる　同
許婚野球を覗く氣にもなり　同

許婚他人行儀もして見たい　同
許婚眉の薄いを氣にしてゐ　浸食子
許婚都會へ出るを喜ばず　同
許婚訛を思ひ出さすなり　同

川柳雜誌社大鐵局支部　畔柳社句會（大阪）

於鐵道クラブ

七月十二日

この日は柳友神戸鐵道クラブ展望社との第一回合同句會として神戸から苦樂公氏を先頭に十數氏の御來會があり、例により兼題席題の披講後山雨樓氏の有益なる御話があり、今後全鐵道川柳大會開催への精進を約し兼題大位に選者の短册をいたゞき九時すぎ散會。尙神戸北野伸路氏から祝電・又呑舟氏は四ケ月ぶりの病床を追つぱらつて出席し皆をよろこばした。

出席者　三十名

席題　氷　水　（九天記）

氷囊の氷無氣味な溫かさ　天秋
氷水呑んでこの村通り拔け　秀太
辭退した氷子供が手をつける　喜山
氷水馬子だけのんですましてる　木履
接待の氷におどる馬子の咽喉　一蜂
大阪へ來て今年のみぞれ喰へ初め　杏林
氷水飲めるる男がうらやまれ　佐登詩
朝顏が明日咲くと數へ氷水　九天
大粒の汗が出るる氷水呑舟　某人
氷水父がにらむで飲み殘し　水客
用談のまだ片着かぬ氷水　呑行
すぐ汗になると承知の氷水　同
男の子その上を食ふ氷水　山雨樓
氷水子供見る〜元氣が出　舟選

席題　藥　瓶　呑

初年兵の顏の丸さの藥瓶　山雨樓
大掃除庭の隅から藥瓶　久米雄

今日からは色が違ふた藥瓶藥瓶菓子と並べて置かれて居葬式をすませたまゝの藥瓶藥瓶蚊のとまつてるむし暑さ甲子園へ繼へ立つ藥瓶

(佳)珍らしい名が呼ばれてる藥瓶

(同)藥瓶壽命の話聞かされる

(同)藥瓶提げた姿の純なこと

席題　釘

釘錆が襟についてる一人者カレンダを貰つて釘の打場所打つた釘塀の表へまはつて見釘打つて〳〵引越終ふなり新婚の借家へ釘が多すぎるまぜて釘買ふて來る平大工今度こそ眞直打たう釘の錆

(佳)落成へ最後の釘を強く打ち

(同)引越さ來れば釘拔き要る借家

(同)釘打つた亭主の髮がちと亂れ

席題　噓

噓して話の續きフト忘れ汽車の間に合はない汗に出る噓噓する子の次の子が噓する鼻唄の隣大きな噓噓して娘盛りを親しまれ噓すむまで横で待つてる出かゝつた噓へ奉加帳を出し漸くに噓押へた謠濟み剛情に生れ噓の大きいこと噓した赤子へ家内中笑ひ

(佳)忍び足大きな噓出てしまひ

(同)宴會のある日嬉しい噓が出

(同)名案がなくて噓へ拍子とり

(人)宿題がまだたんとある噓なり

(地)ひとり居て噓をしてる馬鹿もし

秀太　小寒　九天　秋　某人　苦樂公　山雨樓

(天)噓する顏が見付けた妙な雲　某人

席題　安全地帶

早退して安全地帶暑いなり　山雨樓選

踏みながら安全地帶のビラを讀み　九天

圓タクがのつそり安全地帶へ來　勇

(佳)ネオンの灯安全地帶もとゞき　天秋

(軸)セーフティゾーン地を堀る俄雨　同

苦樂公選

兼題　雨夜

たばこ買ふ巡査へ雨の灯があかい　山雨樓

時報まですつかり聞いた雨の夜　水客

ふと故郷へ便り書く氣の雨の夜　呑舟

別れた夜シガルの煙は雨にぬれ　呑行

雨の夜すぢらしい嘘思ひ付き　杏林

雨の夜一家十一人寢てる　某人

感傷のベッドに雨の夜は更ける　山雨樓選

雨の夜貧甚へ下駄の音うつろ　楚堂

甚敵がほしい雨夜に猫の聲　久米雄

船の音此處までとゞく雨の夜　秀太

(佳)むきだしのチップを貰ふ雨の夜　以佐美

(同)遠い火事聞く雨夜の戸を閉める　水客

(同)雨の夜を不興なこともち歸る　九天

(人)陽よけの下で街の夜の俄雨　山雨樓

(地)疑ひもせず雨の夜を縫ひ續け　九天

(天)義理のある人と寢てる雨の夜　以佐美

(軸)支人と云ふが夜釣の雨にぬれ　某人

苦樂公

同　避暑

山雨樓選

避暑に來た隣座敷のさんざめき　喜山

避暑歸りやたら團扇の音たてる　木履

避暑地から暑中見舞が長すぎる　以佐美

絕好の避暑地わづかな溪があり　楚堂

午後三時變つてもない避暑便り　呑舟

傳說を聞いて避暑地の第一夜　某人

避暑客へわだかまりなく畔によけ　苦樂公

避暑に來た子眞先に雜魚見つけ　秀太

人)芝居裏避暑歸りらしい客の色　一蜂

(地)ウナ電を受で避暑地の霧を立ち　某人

(天)ヘチマの實見で避暑地を引き上ぐ　九天

(軸)避暑に來て朝を勿論なく起る　山雨樓

同　復　活　山雨樓選

復活のスターに子供あると聽き　小寒

復活の舞臺へ廣ろう三番叟　木履

復活の姿朝日へ伸びた茄子　天秋

復活を祈る暃へ銀の星　喜山

復活の心と別なコップ酒　水客

洗髮仲直りした水を打ち　九天

友情の復活一つ蚊帳に寢る　某人

(人)ほろにがき解消昔語りなり　楚堂

(地)ごう工面したが工場煙が見え　伸路

(天)復活の景氣へ父の古金庫　水客

阪大川柳會（大阪）

六月例會　丸島利生報

兼題　金持

金持である故記事になる仕打　氷炭

金滿家無事にあけたる陽を拜み　同

金持の進まぬ筆で金五圓　柳秀

うす暗い家で金持年をとり　同

親類の金持吹いて何になる　一杯

私生子へ金持の子と書いてなし　同

長者番付に見る同姓をこひしがり　青一路

金持てば金持らしい顏になり　路生

大分持つてゐると云ふ人を紹介し　同

〃持の婦男氣を鈍くゐる　芳一

〃持の家に生れて病み續け　同

此頃は芦屋の方でござゐます　栗

膝枕磨の別莊を賣ると云ふ　同

富の偏在を難じて卒業し　貞三

ふれ出しは金持の若でありにけり　利生

強盜の記事を金持寒う見る　あさ女

千萬ないとお氣輕にアレンヂレ　筑川
（人）ごりがあるとあつは持つてゐる　路生
（地）金持と云ふ事だけで嫁に行き　あさ女
（天）金持はもう戸を閉める音をまし　たけを
　　兼題　蚊　路　耶選
兒の寢像叱りも出來ず蚊を燒き　氷炭
吾が骨の秋の蚊にさも似たるかな　貞三
陳情は蚊の鳴くほどに聞かれてゐ　方正
夕刊の端をちぎつて蚊をまるめ　栞
蚊柱の崩れて檢視五六人居る　同
蚊遣などたいて妾は一人居る　同
蚊柱へあはてだ顏がつきあたり　一杯女
圍碁敵先手をうつて蚊をたき　青一路
蚊のゐないことが和尚の自慢なり　たけを
蚊柱をぬけて電報配達夫　芳一
蚊柱の立つ軒先で故郷思ふ　栞
剃刀を持つた手首に蚊がとまり　利生
疳立てゝ蚊をはたいてる負將槙　正甫
歌麿の畫いたやうなる蚊帳の中　路生
（人）蚊に喰はれまつせと女將上つて來　氷炭
（地）足で蚊追ふて電話で禮を言ひ　貞三
（天）子澤山汗に働き蚊に住ひ　方正
　　雜吟　路　耶選
さん付に呼んで女に叱られる　利生
帶〆てゐるとこへ來ておごられ　氷炭
口答へ・後は口笛懷手　柳秀
第三者だから意見も出來る戀　同
手敢な脚だ靴下づり下り　方正
馬鹿にしなさんなと齡が云ふ　同
廢嫡の家とも見えぬ鯉幟　青一路
腕まくり出來るうれしい酒の味　氷炭
東郷大將國葬の日　芳一
默禱へ日本海の波の音　路生
（秀）なんでそれがと女將とりあはず　耶選
　　席題　悪筆
悪筆もほめればならぬ名士の字　一杯
悪筆に父の個性もなつかしく　たけを
父へ來る艷書釘流ばかり　方正
悪筆をうやうやしくも額にかけ　路生
悪筆へ變體假名を多くまぜ　氷炭
馬鹿にした伯父の讀墨で飯が喰へ　柳秀
悪筆が筆何本も咬みしめし　氷炭
履歷書は書いて貰つて出しました　正甫
悪筆であります國から呼び出され　同
人物も見ず筆蹟で斷られ　青一路
この字ではと課長一向氣乘せず　同
豪放な悪筆を書く人であり　檜舍
悪筆は悪筆年ら枯れてをり　同
悪筆と見られぬ樣にくづしとき　同
悪筆は穗先も見ずに筆をもち　栞
帝大出給仕の文字と並べられ　同
元氣ある字だと元氣をほめるなり　同
こんな字を書いて貰ふに墨をすり　同
悪筆の署名で切手五千圓　利生
判讀をしても嬉しいラブレター　同
折釘で思ひのたけが書かれてゐ　同
（人）悪筆の履歷書いつち下になり　同
（地）ご本尊も讀めないものをお筆先　方正
（天）墨つぎを無視と無心狀がくる　路生
（軸）大官の悪筆振りも面白し　耶選
（同）親戀りなどゝ悪筆逃げておき　同

川柳雜誌社

御旅吟社

於　翠夢居

七月八日夜生國魂神社の宵宮、御旅所を控えた北上町は隨分と賑やかな事である、御旅所に因んだ御旅吟社はこの好機會を掴んで、吟社事務所で句會を開いた、宵宮の和やかな情緒に浸り吟社の隆盛の永久ならん事を祝して、夜をそくまで語つて喜びを頒つた。

　　席題　採用
採用ときまり歸りをレストラン　艸樂選
採用の通知へ街の灯のうれし　秀山
採用は元氣で戸口を馳上り　あや美
採用はいゝがげだす金もなし　太一
　　席題　祭　翠夢選
宵祭り高提燈の立ち話　席題
祭りには寫眞を採ると騒いで居　正明
お祭の金宵宮にみな使ひ　秀山
（佳）夏祭西瓜の山を崩すなり　艸樂
夏祭それ政變だ防空だ　正夫
　　席題　靴　多耶選
靴づれか眞夏の海を感じたり　翠夢
ホワイトホワイト五年塗る夏の靴　景木
靴脫げそうにトロットの拍子踏む　艸樂
靴底の破れて旅の淋しき夜　あや美
　　席題　波紋　路耶選
雨だれの波紋を蛙見つめてゐ　みつる
失言のあゝ恐しい波紋なり　同
泉水の波紋へみずを少し下げ　太一
見つむれば波紋無限の力あり　翠夢
かりそめの戀に波紋の大きすぎ　あや美
女と別れ心の波紋視つめ居り　正夫
（軸）巡禮の眼にさびしの增す波紋　路耶
　　兼題　舌　路耶選
舌かんで死ぬる氣力はないのなり　みつる
その舌が虛僞の世界を生んだのだ　洋三
媚びている證據を舌の先にみせ　同
日本壽は舌で半分繪を作り　太一
その舌で迎へられ君の人の好さ　翠夢
舌のスピードアップ眠いこと　あや美
ちと舌があやしくなつていたられ　正夫
舌かんで死ぬ覺悟をも持合せ　路耶
まわらない言葉で父の酒を止め　翠夢
（軸）いつはりの舌となつたり子の土產　路耶

川柳雑誌社

今治句會（今治）

七月七日　伊豫貯蓄支店樓上　渡邊曉童報

兼題　蟹　宵明選

うろたえた蟹石垣を轉びおち　玉樂
海岸の日向に蟹の物想ひ　紫湖
登校へ蟹が大きく見えてゐた　星
兒の瞳蟹の行手を見のがさず　小松
ふり立てた蟹の目玉へ雲の峰　一凡
ぬかるみへ蟹は必死に生きんとす　史郎
敷居出ぬ生活のかに似て　小樓
炊事場へ蟹が來てゐる雨上り　心府
木綿糸蟹ははさんでみたりする　曉童
眼へ蟹のはさみがまともなり　同
（軸）ほろ酔の眞つ紅な蟹を見つたり　宵明

兼題　少年　曉童選

少年の瞳に青い空があり　紫陽
少年の希望は夏の雲に似て　湖
シェードは青く少年夢に入り　小樓
少年はお長さんにお辭儀をし　玉樂
少年の誇に兄はチャンピオン　心府
少年は勳章の數だけおぼえ　小松
（佳）少年の肩を叩いてやる愉快　宵明
（同）少年の素直を叱る生活苦　史郎
（軸）少年の一合買ひに行かされる　曉童

兼題　掌　一凡選

手のひらと手のひら戀の血が流れ　紫陽
掌のひらへチャマコロンの淋しさ　同
合掌の線香いつかくれてる　曉童
合掌の虚心を亂す蚊一匹　史郎
見つめてる掌のひらあまり凡な　禧純
掌にうける強さ弱さの人生よ　曉童
慇懃てくれる友の掌あたゝかい　心府
掌の相を見れば浮世もおもし　小松
（佳）掌のひらに盲は記憶殘しとき　史郎
そむかれし掌に石ころを握つてた　宵明
一錢が汗にまみれた小さな掌　同
（軸）掌にのする拔毛冷たき夏の朝　一凡

席題　若旦那　小松選

若旦那仕入は文がしてくれる　紫陽
若旦那日記を埋めるのも仕事　史郎
若旦那紺ののれんへ考へる　曉童
若旦那短かく電話切つて出る　心府
（軸）若旦那父の堅氣と氣が合はず　小松

席題　臍　史郎選

碁口を臍のあたりに落付かせ　心府
藻の花を拂ひのければ濕女の臍　宵明
父の臍子の臍茄子はあげ加減　曉童
朝顔へ大きな臍が向いてゐる　宵明
駈けつけて臍のあたりで息をする　心府
（軸）日光浴臍までさせて青白し　史郎

席題　香水　心府選

香水の匂ひとなつて女出る　小松
その若さこの香水にもゆる戀　曉童
（軸）香水も三十の香となつてゐる　心府

川柳雑誌社

鶴町句會（大阪）

六月廿二日　於自助倉俱樂部

兼題　夕立　艸樂選

夕立へその日暮しの屋臺店　雀踊子
夕立に臍まで濡れたビクニシック　紅
夕立に話ます〳〵もつれて來　水車
夕立に二度使へぬ傘を買ひ　親路
夕立へ家主一べん呼んで來い　ライト
夕立に濕水浴も這ひ上り　謙公
夕立が晴れたり古き詩集讀む　小柳子
夕立のビルヂングみんな退けた後　史呂
夕立へチト錠前がかたすぎる　變人
夕立に塵一ツなきアスハルト　彩泡
夕立が來そうになつてよく釣れる　同
（人）夕立もカラッと上りいゝ夜店　同
（地）ワスコーヒ夕立は止まぬなり　親一路
（天）夕立の中を自家用靜かなり　遊舟

兼題　覺悟　水車選

女の覺悟に笑つても居れず　變人
順番に呼ばれ覺悟の席に立ち　寛柳
覺悟して居るを先輩笑ふなり　雅幽
覺悟して來た罰金へ待たされる　友帆
溫泉で二人の覺悟またゆるみ　謙公
轉職の覺悟は易を信じ切り　紅
（人）大阪へ出たら何でもする覺悟　彩泡
（地）覺悟して女の方が強くなり　謙公
（天）覺悟して居たと健氣な未亡人　彩泡
（軸）書置きのその片假名もあはれなり　水車

席題　看護婦　雅幽選

看護婦とゆけば嬉しい青い空　白峯
汚れなき愛を看護婦求めてゐ　遊舟
看護婦の意地アダリンを持ち出す　友帆
看護婦は胸の疼きを星に告げ　禿山
看護婦の一枚ぬげばいゝ娘　彩泡
看護婦の聞けば死線を越えた人　同

席題　帽子　友帆選

帽子たゞ取れば人生過ぎた跡　親一路
鳥打ちを買ふて丁稚はなれてくる　雅幽
カン〳〵帽洗ふ男に見上げられ　ライト
軍帽はどこで死んでもいゝ姿　雀踊子
（佳）帽子掛け遠慮の要る人と知り　水車
（同）久し振り帽子をはでに振り去る　白峯
（同）古帽子小さい金魚を二ツくれ　艸樂

席題　ホース　紅選

打ち水のホース小さな虹が出る　雀踊子
七色の虹がホースの水へ浮き　春光
撒水車ホースへ遠慮して通り　史呂
日盛りを巡査ホースで水を撒き　謙公
グーリンのホース花壇の水をまく　友帆

古ホース思はぬ疵が水を噴き　謙公
演習のホースゆつくり引き廻し　水車
貴嬢するつもりホースでウンと撒き　變人
　席題　酒　場　秀山選
色氣ない人で酒場でもてゝゐる　彩泡
常連が宵の酒場へ雪崩れ込み　謙公
優勝の元氣酒場へ酒場出來　水車
不眠症逆ふ様に酒場ひま　與三郎
あるだけの洋酒並んで酒場　雀踊子
今日だけの戀に酒場更けてゆく　同
酒場のぞけば女給のぞきに出　變人
(佳)酒場から逃げて好だち子の寝顔　紅
(同)酒場の灯暗く公園雨が降り

川柳雑誌社　御旅句會

六月二十四日夜　於心齋橋心交社
梅雨にけむる心齋橋筋のネオンの灯は一入に美くしく輝いて居たシト〳〵と降る雨に出足をくじかれた方々も有つたがいつもながらの熱心な作家連中に二三の新人を加へたうれしい句會であつた
その夜は路郎先生を初め本社の方々がOBKの第二で川柳に就ての放送をせられた戻りを打揃つて本句會へ御來集下さつた。
　席題　眼　鏡　紀太選
どうでもよい眼鏡を役者忘れて出　艸樂
鐵鍋の頃の初戀しのばるゝ　あや美
金の値のあがり眼鏡の目方かけ　景水
夕闇へ只野凡兒の眼鏡で來　紫石
喧嘩する相手は眼鏡預けてき　清美
ロイド眼鏡今夜は別な女給と來　翠夢
見つむれば眼鏡に自分が動いてる　同
物足らぬまゝを眼鏡にしやくらせる　新水
　席題　地下鐵　艸樂選
地下鐵へめくらも一度乗つてみる　清美
この下が地下鐵やらと肢胯を踏み　同
地下鐵を上つて正午の氣に戻り　紀太
スピードは何時しか地下へ潜つて居　同
地下鐵を出て心齋橋の人に蒸せ　あや美
地下鐵へネオンの風を吸ひ　紫石
地下鐵へ話半分持ち行かれ　同
　席題　綻　び　翠夢選
今更に綻び妻に見せられず　新水
綻びの一つ二つも母の手間　正明
綻びの何時までもある獨り者　紀太
綻びを自慢に出來る上級生　清美
綻びが悪事露見を恐れたり　艸樂
(佳)綻びと緒に話題見つけたり　紫石
(軸)綻びも氣にせぬ女の圖々し　同
　席題　集　合　翠夢選
集合は義理につかりの顔がより　新水
間に合つて嬉しい顔の集合所　秀山
集合の樣子を小使見にやられ　艸樂
集合へたつた一人が氣にかゝり　紫石
おくれて來だのが一番よく喋り　紀太
集合に紅一點は目立つなり　正明
かついでるスキーも輕く集合所　清美
(軸)集合を斷り兼ねる妻の愚痴　新水
　席題　梅　雨　山雨樓選
梅雨は梅雨世間は世間いがみ合ひ　秀山
さみだれに千守行く所ないのなり　正明
ハツタイ粉梅雨ぐるぐる郷里から來　紫石
梅雨空のあがり眼鏡の目方かけ　艸樂
梅雨空へ今日もあぶれて冷で飲み　清美
梅雨空へ青梅つける母の背な　勇
女まるでお名指しを待つ梅雨の宵　同
(人)留守番へ五月雨小氣味な響き　翠夢
(地)梅雨空へネオンサインの媚てる　あや美
(天)梅雨晴れ(うヂオ體操の手が揃ひ　紫石
　席題　首　路郎師選
首を洗つて顔を磨いて逢ひに行く　みつる
首の心配縺れた糸をときゝ給へ　秀山
二千年昔ガラスの首かざり　同
人形の首たちぎつた男の子　清美
トリックの替えた首だと信じられ　新水
天明の首と判つてうろたへる　豆秋
首一つ命一つで濟まぬ約束　翠夢
病院の窓に首細き女ゐる　勇
首を振り手を振り舞の戻りの娘　あや美
首つりの服で就職線に立ち　同
首細く夢二の畫にも似て淋し　同
(秀)窓からの首案外に痩せて見え　新水
(軸)若さ若さ實社を棒にふつて會ひ　路郎

川柳雑誌社　今里句會（大阪）

五月二十六日　於桃助旅館　市場沒食子報
　席題　道　樂　變人選
道樂にしては氣入すぎてゐる　友帆
道樂へ此頃色が白くなり　魚水
道樂のあぐらの中で子はねむる　雀踊子
道樂に見えて苦しい世帶なり　水車
道樂をしてもやつぱり兄貴なり　白柳
いゝ道樂ですと甕筆を賞め　豆秋
(佳)忠告の前に道樂強く居る　昇鯉
(同)道樂へ隣りの不平つゞくなり　同
(同)道樂はこゝも親しくさせる　遊舟
　席題　證　文　沒食子選
證文は女將の眸でたゝまれる　柳哉
證文に隣の部屋で輕い咳　月麻呂
遺言はまだ證文ふれてゐず　遊舟
證文へ女の息が亂れたり　變人
孝行の德證文は棒を引き　里十九
證文へだん〳〵歳をとるばかり　變人

灰皿を押し證文の事にふれ　白柳子
（佳）證文をたしかめてゐる虫眼眼　水車
（同）平假名を證文ノックアウトする　春光
席題　名　物　申
（佳）名物は買はればならぬやうに買ひ　遊舟
（同）名物を箸でつまんで富士をほめ　柳哉
（同）長屋名物の男へ執達吏　四路平
（同）名物の何處の河豚だか食はされ　禿山
（人）名物の紐とく父を子が圍み　雀踊子
（地）名物の横を我家の灯が照らし　かほる
（天）八ツ橋を奈良で喜ばるおもしろ　四路平
席題　流　行　豆
（佳）流行る柄この陳列は大きいな　秋選
（同）流行へついてゆくのに汗が出る　白柳子
（同）流行へ遠く月掛貯金する　春光
（同）流行は帽子の疵し下げてゐる　里十九
（同）同肩であるいて流行の風にのり　四路平
（同）流行歌啞の世界のみちめなり　月麻呂
（同）はやらない姿でお供ついてゆく　水車
（同）流行の話旦那に酒をつぎ　かほる
席題　足　袋　選
洗濯のついでの足袋が汚れすぎ　遊舟
十六へはや白足袋をはいてゐる　紫水
洋室の女は足袋を氣にしてる　里十九
舞ざらへ小さい足袋の裏を見せ　四路平
均一の足袋は花緒の型に剝ひ　春光
紋付を着てから足袋を買ひにやり
白い足袋大阪辨にもなれました
戀人とあいこで行ける九文半　雀踊子
白足袋の男手相を見て貰ひ　夕鐘
足袋はだしうれしい聲にとり卷かれ　變人
足袋を脱ぐとこで寫眞は暗くなり　水車
兼題　心　境　艸
（佳）心境の脈を聞いてる橋の上　豆秋
（同）心境の變化こゝらで友をまき　樂選
（同）心境をさぐれば醉つた眼をやる　昇鯉
（同）白百合へこの心境を見られまじ　變人
（同）知る人ぞ知る心境は惡れず　村句茂
（軸）心境は語らず葭簀の中の夏　艸樂

川柳雜誌社　**簸川句會**（島根）　於緑之助居

七月七日夜　緑之助選

兼題　岩、怪談

席題　蚊　雷　相選

怪談も結局笑つた涼み臺　琴月
月明り岩をたよつて貸ボート　同
怪談の佳境に蛙飛んで來た　草路
怪談へ帶はだらりと解けかゝり　雷相
疲れた風は足に來て尿する　好朗
初夏は躍つてゐたよ岩の飛沫　同
球は夏空に白く體臭に醉へり　羅門
多角な戀が白熱した瞳に冷ゆる　同
怪談へ女の鼻が冷えるたり　同
（秀）怪談へ風鈴の風となり一人へる　同
（同）水銀は昇り岩は烈日のいろなる　同
三味の手が違つたことで蚊を叱り　緑之助
蚊を追へば男の髮はゆるゝなり　同
反目の波に浮かびし戀敵　同
怪談に一時二時の涼み客　同

悼　鴉　天

鴉天　名は井原通夫　行年二十八歳

君は簸川支部大地吟社同人となつてから三年にもなり　カラス吟社を田儀村に起して、第二支部でも結成したい意氣込でゐた。情熱の詩人で原石鼎氏を姻戚に有つて　俳句畑に育ち俳句の方に交友を多く有つてゐたが、川柳にも熱心で大地吟社の柱石であつた、鴉天を失ふことは田儀村カラス吟社を失ふことにもなつて痛惜に堪えない。

さびしさは白熱同志一人へり　好郎
君死んでゐる夜な〳〵田儀の汐鳴り　羅門
きちんと座れば君の俤よみがへり　雷相
君は今我が涙線に浮ぶのみ　緑之助

川柳雜誌社　**高知句會**（高知）

六月廿一日　於ブラジル樓上　中澤濁水報

席題　百　姓　六　絃選

牛の綱ゆるめて稔る秋へ笑み　翠川
豐作に晴衣買ふ日も近くなり　蟬風
長々と案山子大變世話だつた　翠川
百姓の百事寡した牛を賣り　青果
青訓の模範に曳かる肥車　濁水
（人）金にしてやはり百姓淋しすぎ　春水
（地）暮るゝ間の明るい惜しむ鍬の音　翠川
（天）子の智惠に不平が募る小作農　青果
（軸）浴衣から百姓の手と足が出る　六絃
席題　雇　人　蟬風選

呼鈴へ臨時雇の遠く居る　青果
實直な手代養子に所望され　紫世
不似合な柄を着てゐる雇人　六絃
雇人肩の淋しい戀をする　春水
（人）雇人レコード掛けて居ればよし　同
（地）よく聞けば遠縁らしい雇人　濁水
（天）我が家の茶が熱つすぎる雇人　六絃
（軸）給料へ忍從でゐる雇人　蟬風
席題　前　途　青果選

前途への希望粗食に甘んじる　六絃
日本の前途も無事な鯉幟　紫世
先生も前途を祝す驛に見え　濁水
前途ある身を戒める署長室　蟬風
シャンペンにジャズに前途を祝ふ　春水
（人）侮つた前途へ行き詰り　濁水
（地）嘆願の前途に父母もひに折れ　蟬風

思ひ出したやうに芝居の波動き　水車
濱寺へ彼女と來ればきつい波　夕鐘　かほる
鹽田に近く靜かな波が寄せ　秋選
雲　豆
雲に乘るやう飛行士は操從し　秀山
寢ころべば雲の峯から陽のあたり　夕鐘　かほる
初めての花火へ雲が動くなり　里十九
雲足の早さ傘をつき出され　水車
一人旅雲を相手の車窓かな　同
雲の峰行く手をふさぐやうに見え　かほる選
風　鈴
風鈴の下で河合武雄の聲になり　夕鐘
風鈴の音に其の日の苦を忘れ　秀山
用心をして風鈴につき當り　水車
新妻の趣味風鈴の釣り所　同
風鈴の下で桃割れしなを見せ　里丁九
夕立へすました顏の風鈴屋　同

一羊さんと別れる會（大阪）

七月十日夜　森永食堂　西いわを報

愛　情
妻に背を向けて夫の片えくぼ　一羊
受情へマダムの顏が丸くなり　夢裡
愛情を捨てネガンに涙ぐみ　青兒
愛情の手を握られて死んで行き　いわを

ABC社句會（島根・八束）

七月六日　於平塚別館　天痴人報

兼題　投　手　亂　笑　選

（人）ピッチャーのワインアップ甲子園　春　朗
（同）觀衆の期待投手の疲れ　居ず　柳人
（地）ピッチャーの肩叩かれピンチなり　卷二
（天）群衆の中に投手の兄もあり　青　波
兼題　青　田　天痴人選
（佳）キャムピング谷の青田がなつかしい　鈴　鹿
（同）淋しげな青田の中の分譲地　鈴　鹿
（同）兒童蕭は青田苦もなくかいてゐる　春　朗
（同）旱魃のせめて青田にしたい父　喜　朗
（同）水喧嘩あつたと見えぬ青田なり　一　雄
（水）爭ひの水が青田に疲れてゐ　青　波
（地）勝手口青田に續く新開地　卷二
（天）番へ青田うらめしさに明け　六　郎
席題　厄　年　柳　人選
（佳）君の人生觀に厄年が邪魔になり　亂　笑
（同）爪眞黑に伸ばしそお前は厄年だ　卷二
（同）死んだ氣で呑むさと厄年誘はれ　六　郎
（人）厄年の日本を救ふラッパの音　天痴人
（同）別莊へ來て厄年の深呼吸　六　郎
（地）厄年の男滿洲から戻り　青　波
（天）厄年も無く軍隊の夏となり　卷二
席題　藝　卷二選
好きなのは彼女の藝ではありません　勁一郎
故郷に歸れぬ初夏の旅藝人　青　波
辻藝の眞書へ白く陽があたり　六　郎
夕燒へ旅藝人の群が行く　春　朗
（人）藝術へ世相を拗ねたペンネーム　天痴人
（地）旅藝のホームシックになった雨　六　郎
（天）蚊帳に風あり藝術家の惱み　柳　人
席題　疲　勞　六　郎選
（佳）流行を追ふて疲れてゐる　卷二
田植終りて
（同）代滿休の姉は疲れた顏で來る　喜　郎
（同）行軍の疲れた足に街となり　春　朗
（同）轉寢の子が一日の欠伸する　六　郎
（同）疲勞した顏が默つて食つてゐる　天痴人
（人）旱魃へトマトが疲れきつてゐる　勁一郎
（地）疲勞した牛の肋骨に陽が強し　同
（天）人喝れた、水枯れた、田畑の叫息　春　朗
席題　南　瓜　春　朗選
（佳）すみつこで南瓜でつい奴が出來　天痴人
（同）園丁の趣味に南瓜が出來かゝり　柳　し
（同）露地の奥南瓜の蔓を這はもてる　鈴　鹿
（同）我儘に臍を南瓜は空へ向け　同
（同）どうせ南瓜ですよと悲し意地ち　亂　笑
（同）南瓜の樣な落ち着きおゐる高利貸　六　郎
（人）ハイヒール南瓜の花を知りません　卷二
（地）店頭へ色氣もなく南瓜の存在　亂　笑
（天）立腹の姿で南瓜熟れてゐる　天痴人

天痴人居對座吟（島根　八束）

七月七日夜　花ざくろ　桃　鰻
少年の情痴に似たり花ざくら　淞外人
おろかしき想にゐたり花ざくろ　同
桃の實よおまへは妹の乳房だ　同
お土産の桃へビールの泡涼し　同
内閣が變つた噂鰻喰ふ　同
花ざくろ丁度この頃子が逝つた　天痴人
健康に長女よ育て花ざくろ　同
拗ねたての桃をマダムは涼しがり　同
夏痩の肋骨見せて鰻食ひ　同
松江城雨に煙れりうな料理　同

正夫居偶會（大阪）

七月九日　生魂神社祭日　北川あや美報

席題　巡禮　代理　互　選

巡禮の淋しい聲にめぐみに出　太　一
巡禮に出ても戀を忘れかれ　あや美
巡禮の心にふるゝ旅の秋　正　夫
まかされて來た先樣のむつかしさ　あや美
代理でと輕く責任逃れてる　正　夫
終ひまで代理は口を閉きそこれ　太　一

（天性格は次男の方が案じられ　六絃
軸光明は夫の遺志で學を卒へ　青果
兼題　中年の戀　濁水選
亡き夫の位牌にすまぬ戀が有り　翠川
中年の戀かき船で飲んでゐる　春水
中年の戀借金も拂ひます　六絃
いゝ歳でなどゝ噂の戀をする　蟬風
（人）中年の戀と宿帳まで知らず　青果
（地）中年の戀靴下に孔が有り　六絃
（れ）中年の初戀らしい仕事ぶり　翠芳
（軸）娘を伴れ對に添ふ氣のランプデー　濁水

川柳雑誌社　**松江句會**（松江）

七月一日涼風みなぎるミドリ喫茶園に開く
折りよく鍛川支部河合田鶴緒氏の參會を得
て盛會（幹事報）
兼題　稲妻　柳人選
稲妻に　鋭く　光る　療養所　天痴人
稲妻がひとりぼつちの胸を射す　夢迷
稲妻にかき消されたる妄想よ　莞路
稲光り妓うつかり注ぎこぼし　砂詩郎
稲光り空へ浮き出たビルヂング　勁一郎
稲妻の光り五尺の身をおそひ　祥月
稲妻のいきぶきが東風となる　梟人
いなづまの下の子守です　磨須雄
停電し庭木の影はつきりと稲妻　田鶴緒
（佳）水枯れた村へ稲妻慰さめる　天痴人
（同）稲妻に心のすきを見すかされ　巷二
席題　インチキ　亂笑選
インチキがずつと並んだ夜店市　莞路
本當に自殺をしたインチキ師　夢迷
インチキな戀に酔ふるカフエーだ　天痴人
インチキな奴の言葉がふと優し　砂詩郎
（佳）インチキな男に輕マンドリン　勁一郎
（同）インチキな男煙草の輪を上げる　柳人

席題　肋骨　天痴人選
生活の息が動いたあばら骨　夢迷
塵芥箱に淋しき犬のあばら骨　勁一郎
借金を苦にせぬ夏のあばら骨　柳人
あばら骨夜は白々と明けにけり　祥月
青春に遠くはなれし肋骨　巷二
席題　ネオン　巷二選
故郷の色だネオンをくだく舟　砂詩郎
寝苦しい涼みネオンに呀へて來る　田鶴緒
遺る瀬ない氣持へネオンの灯が點る　夢迷
赤青のネオンくずれる屋形舟　亂笑
明滅のネオンが多情に囁くよ　天痴人
涼味からネオン戀しいものにされ　莞路
神妙にネオンの街を通るなり　柳人

川柳雑誌社　**塗青句會**

六月十日　於塗青事務所　熊谷
短所　遊舟選　紅報
言ひ聞かす子供に短所見つけられ　紅
こそばゆう家來に短所賞められる　春光
月明りへ我短所のはづかしく　變人
其短所可愛がられる時もあり　潮人
お互に酔へば短所の面白し　光
（佳）世渡りは人の短所に眼を閉じる　青踏
（同）後添に直して短所悔てゐる　謙公
（同）大阪の煙りほめられけなされる　春光
（同）短所かくして家族湯へ追ひ來る　紅
田舍落　謙公選
田舍落妻に挨拶させて出る　遊舟
田舍落無慈悲に算筯寳られたり　紅
田舍落今度の妻は初對面　同
田舍落暫く鍬が重いなり　魚水
田舍落小猫一匹殘されて　青踏
田舍落昔變らぬ友一人　光

塗り替えて島へ賣れたバッカード　春光
發車ベル暫し見返る田舍落　昇鯉
長閑さを笑ふて居れる田舍落　魚夫
母だけが驛に迎へた田舍落　與三郎
落椿しみじみ匂ふ田舍落　潮人
田舍落夜汽車に獨りうづくまり　變人
（軸）田舍落一座の太夫荒みきり　謙公
方言　訛り　紅選
方言がもたらす同じ國の人　悅洋
嬉しさへ太い訛が出てしまい　變人
變人の訛りを眞似て淋しがり　與三郎
（人）方言を交ぜて溫泉音頭出來　謙公
（地）方言の大聲で聞く戒橋　光
（天）方言で椿油をまけてくれ　變人
（軸吟）岡山で支線に乘つた國訛り　紅

兼題　圓滿　春光選
起される時時間圓滿振を見せ　紅
アパートに圓滿すぎて憎まれる　青踏
お隣りの圓滿振りにまけてゐず　光
圓滿が崩れかゝつた不姙症　魚水
圓滿を祈る書置見出され　悅洋

兼題　張り紙　青踏選
張紙の時間を刻タク睨んでき　春光
張紙へ梅干の種子投げつける　變人
爭議團物々しげに紙を張り　謙公
張紙のそこから無職甦へり　潮人
張紙の立春大吉雨に濡れ　謙公
資本家の讓步張紙はがされる　與三郎
（佳）張紙へ淋しい風の戲れて　變人
（同）張紙へ結束破るまいとする　春光
（人）張紙は無用別莊地帶なり　昇鯉
（地）張紙のそこから溫泉街は明け　潮人
（天）土藏貸します張紙に陽が當り　紅
（軸）貼紙の刺戟夕陽の工場畫　青踏

いかだ詩社例會（松江）

六月五日夜　於事務所

席匿　内閣　柳祥月報人選

擧國内閣バラックのやうなもの　卷二
内閣はごうであろうと小説欄　蒐路
内閣は危機か知られど鰯焼く　正雄
席匿　裸婦　柳人選

裸像を見せて視野から消えた女　夢迷
月光に裸婦の生毛がそよぐなり　正雄
裸婦の居る風景赤い灯をともし　卷二
盞み見る裸婦へあやしく燃ゆるも　蒐路
臍に影あり裸婦花を持つ　天痴人
おゝ裸婦に蠟燭の灯も消えがゝる　正雄
一人で見る裸婦は恐しい　蒐路

席匿　用水池　勁一郎選

だましてる事を知つてる用水池　蒐路
用水池一廻りして語る戀　祥月
用水池鯉が一匹死んで居り　柳人
用水池までは默つて二人來き　正雄
用水池羽のちぎれた蟬が浄　柳人
曇り日の空戀しがる用水池　雄選

席匿　卑怯　正夢迷

卑怯者已れの影におびえたり　蒐路
卑怯にも女泣かしてにげるのか　祥月
卑怯でもいい女と手を切らう　蒐路
默つて歸る卑怯な背だ　天痴人
のど佛高くとがつて卑怯者　蒐路
スクラムを拔けて卑怯な酒と居る　柳人

席匿　地下鐵　蒐路選

雨の日の地下鐵に戀出來かゝり　柳人
地下鐵を出て丸ビルはミルク色　正雄
雲下鐵の中から蠅がつきまとひ　夢迷
地下鐵を拔けて遊びの群と逢ひ　卷二
地下鐵に勝手が違ふ團體旗　同
席匿　稽古　月選

稽古着で新撰組が出來上り　夢迷
悲しみをはつきり見せて舞稽古　蒐路
稽古本ならべてお師匠さんの番　柳人
お稽古の孤格子の外は雨　正雄
急いやうに稽古のお孃さん　卷二
（佳）お稽古はお夏狂亂小糠雨　正雄

席匿　灰　卷二選

思案のやり塲に灰皿があつた　夢迷
あの男は今日灰になる　勁一郎
灰買ひの心も知らずおつぱらひ　祥月
幻想にバットの灰がくづれたり　蒐路

席匿　左遷　夢迷選

左遷からしみ〴〵酒の味を知り　卷二
左遷組一かたまりに飲んでゐる　柳人
ーラットの左遷の知事に降つてゐる　正雄

川柳雜誌社

梅田寶塚吟行（大阪）

水谷鮎美報

六月二十日雨

雨（車中吟）

沈默へ雨しと〳〵と降つてゐる　遊歩
降ればとて信ずる友の來りけり　觀月
雨だなと知つて寢返へる床の中　靜波
せめて惱を雨にうたれん　卜居
色街の雨に相合傘もよし　鮎美
（佳）ぼたりぼたり借家に住みなれて　白菊
（同）銀の雨芋の葉裏のあまがへる　卜居
（同）雨の朝フエルト履いて女給？　觀月
（同）美しい雨に欠伸がつゞくなり　鮎美選

足のうら　卜居

正直にそだてられたる足のうら　靜波
足のうらふせて父は寢てしまひ　同
足のうらふいて掃除もしまひなり　卜居

生活　觀月選

生活へ人形の鼻がかけてゐる　鮎美
初對面生活程度も知つておき　靜波

パサヤマの生活雲のゆききを視てゐる　卜居
生活へ心にもない笑顔でゐ鳴玉
平凡な生活辨當さげてゆく白菊
（佳）どん底の生活へ鰯賣りの聲　卜居
（同）生活へ五目並べのおもしろし　鮎美

川柳茂會（松江）

六月十五日夜　茉喫茶店岡崎祥月報奈良井

三郎君が姫路野砲兵補充として出征する事となつて送別句會を開いた。

席匿　野砲　三郎選

野砲兵砲にもたれてパンを喰ひ　正雄
曉の街を野砲の行く響き　柳人
姫路の原に樂しい野砲兵の夕食　祥月
席匿　月見草　卷二選

女が去つて月見草の淋し　磨須雄
月見草咲いたに戀は出來ぬらし　柳人
月見草センチメンタルになりました　蒐路
お孃さんの惱みを聞いた月見草　柳人選

席匿　新人

新人の金齒たのもしげに光る　正雄
異彩ある作句に耽る新人の　祥月
新人に聞けば酒量が上りけり　卷二
は動作ばかりを見つめられ　蒐路

夕鐘居小集

七十五日　姫田夕鐘報

頂上　水車選

名物の値が頂上みうなづかせ　かほる
頂上へ着くともたらぬ樣に云ひ　里十九
頂上でさかしに振つた魔法瓶　豆秋
頂上で栖草一本もろて喫み　同

波　里十九選

波一つ二つ三つ目に流される　秀山
波のさゝやき蟹の子が走る　豆秋

編輯の窓

山雨樓

▼本年の猛暑は格別である。海に山に且つ又儲けにビジネスにお忙がしき柳友諸兄の前に清新なる本誌をおくることの出來たことはよろこびに堪えない。

▼久し振りに三太郎氏から寄せられた「蒼々亭閑談」は夕立後の涼風を浴びるやうな筆致、どこを讀んでも快よい微風が流れてゐる。

▼路郎主幹は防空演習の防備に參加され、お疲れの中を特に執筆された。しかし主幹が健在なので力強い。

▼閑生氏の「時は流れる」は味ひ深い好文字 に僕達には最も關心を引く問題が述べられてあるので、幾度讀み返して見たがわからない。切に味讀を乞ふ。

▼柳秀氏の「酒の世の中」は麗に「日本醫事新聞」に掲載されたものであるが大變面白く、且つ川柳畑のものであるので同氏の快諾を得て本誌に飾ることにした。

▼正岡蓉氏の「春雪食思」は氏獨特の筆觸を味はつて頂きたい。うまいものである。

▼武玉川二篇研究は益々好評で味讀すれば作句研究にも大變役に立つ。本號中(一二一)(一三四)の句などは今日またと見られない圖であるが興味は盡きぬ

▼同人諸君から回答して貰つた「胃袋公開」は豫想外に面白いものが澤山集つた。そして食事の時間がまち〳〵で、御馳走もとりどりなのは一層興味が深い。

▼艸樂氏の「成書を正す」は藥物學の立場から 古川柳研究書に對する誤謬を指摘したもの。氏の造詣の一端を窮ふに足りる。

▼S・U・Rの「夏の論陣」は七月の柳誌に表はれた論題を捉えたもの。新しい評壇形式を備えて臨んでゐる。

▼月評は丹路君と僕とが本社事務所で行つた。傍では緣雨氏が社の事務に餘念がない。三方に窓があるので蚊が吹き飛ばされるやうないゝ風であつた。

▼表紙は柴谷畵伯の筆になるもの 涼風を味はつて頂きたい。

▼七月十一日の夜天王寺公園内十三軒で催された同人句會では傍を頻繁に通る市電と汽車が大變やかましく話の邪魔をするので、電氣局と鐵道省に勤めてゐる緣雨氏と僕の二人がうらまれることだつた。

しかし有益な會であつたので、短夜の散會を惜んだ

▼緣雨氏はこの春外喜夫人を失はれたが、今回前夫人の令妹を迎えられることゝなり、外喜樣の百ケ日を過ぎた八月一日結婚の式を擧げられるさうである。お子達もあることだからさうなれば圓滿である。

▼尙緣雨氏は八月十四日午後四時五十分大阪發の急行列車で鄕里へ歸省、前夫人の初盆を營まれるさうですが、日程がないので金澤方面の川柳家諸氏には會はれないだらうとの話。

▼九月になればカナメ喫茶店(里十九居)が元の所へ改築される。階上で小集會が出來るやうになるさうだし、待遠しい。

▼僕は七月二十一日の夜行列車で富士登山に出發、大宮口から登つた。途中七合目で強い風と深い霧に襲はれ一泊する。その岩屋内冷氣と山氣の中でこの編輯の記の一部を認めた。富士山の上から苦熱にあへいでゐらるゝ柳友諸兄の健康を祈つた。

▼二十九日信貴山で謠曲半歌仙會で咽喉が痛くなるほどうなつて來た。一度川柳家の謠曲會をやつて見たいものだ。一寸指をつつて見ても、艸樂、默平、蛙柳、二南、蟬古 圓角、北人等々大天狗が揃つてゐる。

▼高知支部から六月例會の寄せ書を頂いた。春水君から「この次にはゆつくりとお越し下さい」とある。忙しかつた土佐の旅が懷かしくてならない。

▼「芥子粒」東武支部吟行(日光)の清水米花氏と白濱溫泉へ旅の久米雄君から。お便りを頂いた誌上で御禮申します。

▼本誌の表紙畵、名所川柳の漫畵等でお馴染の大西長三郎畵伯の洋畵作品個人展覽會が、九月下旬阪急百貨店で催されるさうです。詳細は九月號に發表します。御期待を乞ふ。

▼本號の校正に汗を流した人達は艸樂、豆秋、與三郎、某人、緣雨の諸君と僕。

暑中御伺

不朽洞

麻生路郎

麻生葭乃

Nishi No Cho MEMO

▼玉造支部の幹事清水友帆丘遊舟の両君は今回本社同人(評議員)に入社されました今後活躍を祈ります。

▼中澤濁水君は高知支部の幹事として、多年高知柳壇のため活躍されましたが、今回國澤春水君と交替されることになりました。しかし濁水君は新幹事の春水君と協力して不相變活躍されることになつてゐます。

▼本社同人會を久し振りで七月十一日夜大阪天王寺公園内の十三軒で催しました。今後隔月に催したいと思ひますから、同人諸君は萬障繰合せて御出席を願ひます(別稿会報御参照下さい)

▼五月號、六月號が延刊のため一般「募集吟」の〆切を遅らして投吟される方がありますが、社務のため延刊する場合があつても毎月五日〆切を嚴守致します

▼募集吟「團扇、涼筆」は譯植のため再び投吟された方がありましたがそれ等の句は西田艸樂選で一路集欄に發表されることになりました。

▼守口支部は朝田新水君が幹事として多年活躍されてゐましたが、家事都合で當分守口支部を廢止して玉造支部と合併することになりました。

▼豐橋支部幹事白井梅里君が六月二日永眠されたので同支部を廢止することに致しました。

▼本社同人加藤文醉君及高岡支部幹事をされてゐました越田久水君は今回社の都合に依つて除名されました。こうしたことは本社創刊以來の始めてのことで實に兩君に對して遺憾に耐へません。尚、高岡支部は廢止することに致しました。

▼福田山雨樓君は六月廿五日は白濱　廿六日は信貴山廿七日は亀山廿八日は松坂廿九日は笠置公務のため出張されて、忙しい中から原稿や校正を忘れず奮闘されてゐます。

▼吉田水車君は七月八日淡路島から九州方面へ旅行されました

▼西村明珠君は病氣で絶對安靜されてゐましたが、昨今快方になつたので會社へ勤務される樣になられましたそうです。

▼北陸地方に於て七月十一日來の豪雨のため大水害がありましたが、川柳家に水害のないことを祈ります。

▼富士野鞍馬君の令孃は入院されてゐられるそうです、一日も早く全快を祈ります。

▼加藤史城君母堂が六月廿六日永眠(享年六十四歳)されました。哀悼の意を表します。

▼私は本年始めて七月一日大阪の地を離れた須磨、明石、神戸を子供を連れて遊んで來ました

▼本號の編輯は山雨樓、艸樂、丹路、豆秋、與三郎、機見女、鶴峰の諸君と私で本社事務所で致しました。

▼近江砂人君は七月九日松島へ遊覽され「雨の松島に白ズボン白靴あはれ也」の旅信を寄せられました。

▼揚井二南君は七月十一日山中溫泉から北陸溫泉巡りをされて左の句を寄せられました。「月の出を待てば柴山瀉の冷え」

▼御池橋支部の安井一羊さんが近く結婚されるので、七月十日心齋橋森永食堂で左の方々で送別句會を催されました。出席者一羊、いわを、青兒、夢裡。

▼「河北郡川柳聯盟」(石川縣)では七月一日川柳大會を催されました。

▼本社支部の畔柳社の幹事九天喜山一峰同人の萬よしの諸君と私が六月廿日夜萬よし亭で痛快に呑み、更に席を移して同人丹路君を加へて久し振りで愉快に語りました、

▼きやり吟社の十五周年記念事業の「川柳展」は九月東京三越で開催されることに決定されたそうです。

▼丸尚白葉君(大阪市東成區猪飼野町一四四三へ

▼川村觀月君(尼ヶ崎市東灘波七一七へ)

▼品川陣居君(木名中野竹雄)(東京市芝區中門前二ノ十三眞川房次郎方へ)

▼妹尾變人君(大阪府豐能郡箕面喜樂園へ)

轉居

社告

今回次の二君が本社同人として入社されました。

清水友帆
丘遊舟

尚今回本社同人加藤文醉君は同人を、高岡支部幹事越田久水君は同幹事を何れも社の都合に依り辭して貰ひました。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十一卷第十號課題

八月五日締切

（各題十句以內）

▼占ひ　麻生葭乃選

▼綱引　橋本綠雨選

第十一卷第十一號課題

九月十日締切

（各題十句以內）

▼煙　住田亂耽選

▼枕　永田里十九　竹內機見女共選

每號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年七月廿五日印刷

昭和九年八月一日發行

第十一卷第八號

（每月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

電話天王寺一一六七番

無斷禁載

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店（明文堂其他市內各書店）

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、寶文館（函館）石塚

（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

川柳雜誌社關係の人々

（順はろい）

賛助員

池澤樂居　伊藤彦造
長谷川一徹　鳥山一歩
大道弘雄　大島濤明
岡本一平　大谷五花村
片岡直方　岡田三面子
嘉納純　亀井晟修
笠原路生　石曾根民郎
田中辰二　岩崎柳路
長崎柳秀　川村花菱
米村あん馬　川上三太郎
長岡半太郎　市塲沒食子
田村孝之介　長谷川三汀
長野晴濱　西村山月
谷脇素文　西村明珠
窪田銀波楼　大鶴喜由
國枝史郎　大西八歩
藤村作　谷村稔
藤本卯之助　立井登美坊
安川久流美　中西おさむ
長野吉高　北川あや美
前田雀郎　北山悟郎
赤井清司　生田翠夢
淺田一　春元紀太
末弘嚴太郎　麻生路郎
柴谷柴舟

同人

篠原春雨　山本雨迷
蛭子省二　松下小柳子
藤里好古　増位汀柳
小林不浪人　奥野禿山
森東魚　遊舟
熊谷紅　江戸みつる
福田鶴峰　平井春光
阿形一杉　日野華水
明石柳次　姫田夕鐘
近藤勇　東谷聞路
後藤青兒　平井奥三郎
田水車　橋本綠雨
吉川啞人　毛利九波
須崎豆秋　妹尾變人
首藤竹楓　福田山雨樓
麻生葭乃　西田卿樂
住田亂耽

編輯局（同人）

三輪夏曉　高橋かほる
水谷鮎美　永田里十九
芝四葉　山本丹路
清水友帆　朝田新水
阿部閑生　庄萬よし

同人

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事西村明球
國館支部（國館市）幹事亀井晟修
高知支部（高知市）幹事國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美
蛍ヶ池支部（大阪府）幹事三谷梨風
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬
鍛川支部（島根縣）幹事尼緣之助
京都支部（京都市）幹事平岩司郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州
堺支部（堺市）幹事八木美夜路
松山支部（松山市）幹事石丸春峰
御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢
天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾變人
御池橋支部（大阪市）幹事西いわを
松江支部（松江市）幹事梶谷巷二
塗青支部（大阪市）幹事熊谷紅
大鐵局々部（大阪市）幹事植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
光耀會（大阪市）幹事竹内機見女
萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野禿山
北濱支部（大阪市）幹事谷村稔
今里支部（大阪市）幹事市塲沒食子
奉天支部（奉天）幹事江戸みつる
八東支部（島根）幹事平塚亂笑
玉造支部（大阪市）幹事清水友帆
今治支部（今治）幹事渡邊曉童
光笑會（大阪市）幹事永田里十九
新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子
伯耆支部（鳥取）幹事湯原美笑

暑中御伺

高島玉兎朗
東京市日本橋區蠣殼町四ノ一

住田亂耽
兵庫縣武庫郡魚崎町五九八ノ貳

大島濤明
大連市西公園町
川柳居平洞
電話自宅三七一三番
振替口座大連二五六五

滿洲國熱河省凌源小西街
カフエ・モダン
岩崎柳路
岩崎松代
電話一五番

暑中御伺

大阪帝國大學醫學部
長崎柳秀

阿部閑生
大阪市外豐中千歲通二丁目

柳大門
大阪市東淀川區十三東之町二四

南海電車
池澤樂居
大阪府下高石町北六二六

長谷川一徹
大阪市南區長堀橋一丁目
電話南四一八八番

國澤春水
高知市朝倉町

富士野鞍馬
鎌倉長谷十六

小林不浪人
青森市浦町橋本二八三

中澤濁水
高知市本與力町

暑中御伺

福田山雨樓
大阪市浪速區湊町保線事務所
電話戎一〇〇三番

西田艸樂
大阪市東區元伊勢町
昭和園

山本丹路
大阪市住吉區帝塚山中二丁目三八

川柳雜誌社籔川支部
尼綠之助
島根縣今市町

關本雅幽

增位汀柳
大阪市天王寺區上汐町一ノ五一
電話南四二六九番 六四四番

奥野禿山
（移轉）
大阪市住吉區住吉町一六四番地
但シ住吉神社北横約二丁東南側

川柳雜誌社西條支部
荒井英賀夫
愛媛縣西條町新町

川柳雜誌社塗膏支部
熊谷紅
大阪市西區新南通五ノ一〇

暑中御伺

永田里十九
大阪市南區日本橋筋一丁目一六
光笑會事務所

川柳雜誌社鶴町支部
宮岡白峰
宮岡公子
大阪市大正區鶴町二丁目八八

川柳雜誌社大鐵局支部
畔柳社一同
幹事 植山九天
大阪市北區大深町
大阪鐵道局經理課調査掛內

突如！柳界への出現
月刊柳誌 〃へちま 半ケ年 〃金五十錢
申込所 愛知縣祖父江町三三
加藤文醉方
川柳へちま會

川柳街
菊判 一部 十五錢
京都市紫野南船岡町七八
川柳街事務所

柳友諸兄の
御自愛を祈ります
紫光會
平井春光
平井與三郎
吳林秋光
山本夏光
青木史呂
象潟節子

川柳雜誌社神戸支部
神戸市林田區七番町四五 西村明珠
神戸市神戸區中山手通一丁目三六三 豐田繁堂
神戸市兵庫區東山町二丁目一ノ一 小原吉左右
神戸市神戸區再度筋三九ノ八二 眞田幸捐
神戸市兵庫區三川口町三丁目一〇八 喜多春秋
神戸市葺合區野崎通三丁目三九 首藤竹楓
神戸市神戸區中山手通七丁目五四三 日野華水

暑中御伺

前田五健
松山市眞砂町二一

文藝塔社
久佐太郎
神戸區神戸區山本通五ノ五
電話元町三五五五番

吉川啞人
山口縣久賀町
電話一四番

川柳雜誌鳥取支部
中島鐵洲
鳥取市川端町一丁目
電二八八番

妹尾變人
大阪府豐能郡箕面喜樂園

山本葉光
大阪市天王寺區
伶人町八四

宮内耕朗
臺中市榮町一ノ二

金泉萬樂
尼崎市東櫻木町四二

戸倉誠司（普天）
兵庫縣川西町鶴ノ荘

奥田綠水
金澤市石坂川岸町五ノ五
金澤電話四二九一番

玉井彩泡
大阪市天王寺區
石ゝ辻町七四

大橋素月
關西土地株式會社

廣江天痴人
島根縣八東郡乃木村
字上乃木二〇九六

石丸春峰
松山市大街道二ABC

毛利九波
大阪市東區道修町
五ノ三四吉田方

竹内機見女
大阪市天王寺區
勝山通リ三ノ四八

大西八歩
大阪市東區博勞町一
ノ一八竹中方

明石柳次
京都市室町蛸藥師南
藤井商店内

暑中御伺

川柳雜誌社今治支部

渡邊曉童
今治市松本通一丁目

平岩司郎
京都市右京區嵯峨天龍寺前

北山梧郎
大阪市北區天神橋筋七丁目市電停前

深野吾水
大阪市港區八幡屋中通一丁目五〇

松江筏川柳會
松江市竪町岡崎祥月方

東谷聞路
大阪市北區東堀川町三

松丘町二
大阪市旭區別所町五一一

福田鶴峰
大阪市天王寺區北河堀町六九

高橋かほる
大阪市南區北炭屋町二〇一
電話南五九六番

丸山白葉
大阪市東成區猪飼野〇一四四三

須崎豆秋
大阪市住吉區旭町三ノ一四

姫田夕鐘
大阪市港區西田中町四丁目四

川柳雜誌社今里支部

（イロハ順）

市場　沒食子
大阪市東成區大今里町三九五

西村　山月
大阪市東成區深江町九八九

西木　朴甫
大阪市東成區片江町四一八

地黄　天國
大阪市天王寺區上ノ宮町十二村田松華堂内

大鶴　喜由
大阪市東成區大今里町四三二

吉田　水車
大阪市東成區片江町四五三

今田　陽春
大阪市天王寺區上本町五丁目
大阪遞信診療所上本町支所内

武智　遊女男
大阪市東成區大今里町四一三

村田　新市街
大阪市南區日本橋三丁目三

大阪無産新聞

（毎月十五日發行）

暑中御見舞申上げます

一、本紙は市政中心に勞資協調の立場で新しい世の中の報道と指導を使命と致します。
一、朝日毎日の大新聞、赤や夕刊大阪の娯樂新聞の外に本紙を讀む人は短刀直入に社會の實相に觸れる事が出來ます。
一、萬よしを愛する川柳家の爲めに紙面を割愛します本紙を通じて柳談發表が出來ます。
一、本紙讀者は一萬に垂々として市内新興階級の米の飯だと云ふ好評を博して居ります。
一、幸ひ愛讀の榮を賜へ。

大阪無産新聞主幹
道頓堀 万よし 庄 健一
大阪南區道頓堀新戎橋南詰

「川柳家に限り購讀料一ヶ年金一圓也を金五十錢也に半減致します」

暑中御見舞

川柳雜誌社

御旅吟社

大阪市東區粉川町一六
電話東七五一五番

西淀川區海老江上四丁目三(電土二九二〇　岩本素人
東區粉川町一六(電東七五一五)　生田翠夢
東區十二軒町二六(電東二二、三八五八)　春元紀太
西淀川區海老江一丁目一八(電土六九四九)　長谷川景水
東區十二軒町六(電東二〇四三呼)　神戸正夫
西區江戸橋電停前ヤジマスタヂオ内(電土三三八七)　坪井洋三
東區十二軒町二六春元方　桑山清美
東區農人橋詰町一七畑口方(電東六九二)　的場正明
東區十二軒町九(電四七一四呼)　松田多郎
東區十二軒町二六春元方　近藤勇
東區內久寶寺町三丁目五十次特許方(電東六八三七)　北川あや美
愛媛縣東宇和郡土居村字古市　芝四葉
浪速區貝柄町六(電戎一一〇四呼)　白井羅仙
東區內久寶寺町三丁目七(電東四二一〇)　樋口太一

暑中御伺

顧門

關口文象
島田天涯子
大野茶喜次
吉田一斗
横山臥龍坊

例會

毎月十日草詩堂
同七日行詩堂
同五日文藝塔東京支部
同通知荻窪川柳會

畫友

岩田貫山
光玄會主
白取鈍助
投稿時代主
草壁春秋
文藝塔東京支部
中山紅夢
同
岸田朝雀

幹事

淺野筑紫　鈴木魚六　澁谷金王　三井三味線　遊佐誠郎　浅岡仙瓶　小谷津五碧　松原巨松子　丸山婦砂　上原告水　高久芳郎　高木丹三　高木胡枝　高木久花子　加藤仙里子　加藤櫻子　加藤梅茶　大石三羊　大石子羊　蒸合六文錢　原夢笑子　橋露草　等柳　箱守柳　今村凡糸　今守醉

草門（イロハ順）

東京市杉並區成宗三ノ三三三

高木角戀坊

草詩堂

川柳雜誌社

螢ヶ池支部

石森服部濱田　隨流之助

靜青直人

太正平

尾形正人

岡田公愚

龜井寵

武田市春太夫

高畑中のぼる

名塩松素風

丸橋松雨

福田縷紅

佐藤青鬼

北村後水

三谷梨風

白鳥白蝶

○

吉田所志津智女子

山本美子

田脇子羊

宮

暑中御伺

近く和紙和綴木版手摺といつた風な雜誌「魚」を出すことになつてゐます。そのうち一切の内容をおしらせしますがどうかよろしく願ひます

あし屋

食滿南北

電話芦屋二九四七番

川柳雜誌社御池橋支部

村松夢裡

後藤青兒

西いわを

大阪市西區北堀江一丁目
日本樂器株式會社大阪支店

川柳雜誌社事務所

橋本綠雨

大阪市住吉區平野西之町八三

電話天王寺一一六七番

暑中御見舞

弊社の特種設備

高速度式斬新輪轉機の設備と活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豐富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

社主　藤本卯之助

營業種目

新聞雜誌印刷
圖書出版引受
紙型鉛版活字製造販賣
各種製版印刷
其他附隨事業一切

「川柳雜誌」創刊以來の印刷所

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番・七七〇番
振替大阪八二八四番

川柳雑誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢、（但し節〃切手代用可）改號、移轉、句會案内、柳書廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雑誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**

大阪市内送料壹冊六錢
市外送料壹冊廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
申込所 **川柳雑誌社**

懸賞川柳募集

題「口紅」 路郎選 八月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京淺草區小島町二の二七 川柳きやり吟社

（取次所）川柳雑誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌（川柳の雜誌以外）に掲載ある川柳に關する記事の「切抜」

▼川柳家の集合寫眞、個人寫眞

▼川柳の短冊、色紙

右の品で不要なもの、あれば御贈與下さ

大阪市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

徳島盆踊吟行

八月二五日（土）早朝、天保山を出帆甲板に涼を納れつゝ徳島着、晝から宵へかけての名物―きちがひ踊―を見物して、即夜十一時頃には天保山へ歸る豫定

―船賃往復二圓―

詳細のプログラムは追て各々お手元まで御通知いたしますから幹事まで至急お申込み下さい。

主催 光笑會

南區日本橋筋一丁目一六 幹事 永田里十九

後援 川柳雑誌社

川柳雑誌投句用箋

本社制規の投句用箋、左の價額でお頒ち致します、なるべく此用箋を御使用下さい、

五〇枚綴二冊 價金拾二錢（送料共）

▼御申込は本社事務所宛。（一錢切手代用可）

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ。古本と云つても虫喰本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

暑中御伺

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

腦髓を刺戟せぬ毛髮の榮養

伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精

伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい
全國有名化粧品藥店にあり

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和九年七月廿五日印刷納本　昭和九年八月一日發行

にきびとり美顔水

御家庭に常備せられたき

美容衛生藥

ニキビ吹出物に第一等の良藥である上に、日常美容藥としても勝れた効果があるので男女共に廣く賞用されてゐます

お徳用な新裝品

主なる用途

▲ニキビ吹出物の治療と豫防に
▲洗面後、入浴後、お顔剃り後等のお肌の保護と整美に……
▲美容藥として御常用に……
▲蚤・蚊・南京虫等の毒虫にさされた時に
▲脂肪性の方のお化粧下に……

定價
35セン
50セン
1エン

定價金三拾錢　送料壹錢